慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館蔵宗碩自筆「古今和歌集聞書」
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro) 川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro) 石神, 秀美(Ishigami, Hidemi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1984
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.21 (1984.) ,p.351- 540
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	太田次男教授退職記念論集 資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000021-0351

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

慶應義塾図書館蔵

宗碩自筆「古今和歌集聞書」

平澤五郎
川上新一郎
石神秀美

書誌

大和綴、二冊。梨色地に金銀唐花繋紋の鳥子表紙、竪二十八・一糎、横二十二・八糎。見返しは金銀砂子雲形文様の美麗な大型本。料紙は楮紙。毎半葉十三行書き、字面高サ約二十三・五糎、釈文二字下げ。歌は上句のみを掲げ、作者名を略記す。本文墨付丁数、上冊　七十七丁、遊紙前後各一丁、下冊　百八丁、同前一丁後二丁。

題簽、表紙左肩に蔦文様短冊を貼付し、「古今和歌集聞書」と墨書す、但し下冊は「哥」字に作る。内題、「古今和歌集聞書」と誌す。

本書の奥書は、下冊巻末、貞応本奥書註文に続き、百八丁裏に

予此集伝受之儀於越後府中自然斎宗祇旅館／文亀元辛酉六月七日令始行同九月十八日終功訖

文亀元年九月日　　宗碩（花押）

後年又宗祇老聞書引合不審之所少々書改／之早

と誌している。

本書に添付する極札二枚には、それぞれ

「月村斎宗碩古今集聞書上巻年のうちに（琴山印）」（表）

「上下弐冊之内下巻奥書名判有己巳壬正（了珉印）」（裏）

「月村斎宗碩古今聞書下巻郭公なくやさ月の（琴山印）」（表）

「文亀元年九月名判有上下弐冊之内己巳壬正（了珉印）」（裏）

と記している。

その書姿、墨蹟は極めて古雅流麗にして、右記古筆了珉の鑑定を俟つまでもなく、室町期―奥書の年紀を程経ぬ時代の風韻をとどめている。しかし、猶寡聞にして宗祇晩歳の門弟月村斎宗碩の書蹟を確認し得る処ではないが、僅か、「日本書蹟大鑑」第九巻所録の宗碩書状、同花押を対比照合するに、その書風、運筆に見る、就中、その花押の細微の一致は否定しがたく、又、書写年代、本文補訂等を併せ統合するに、宗碩自筆本と断定することに現在の処躊躇するものではない。寧ろ、否定すべき検証を得ればと識者の御啓示を俟つものである―因みに、「古今墨蹟鑒定便覧　地下哥人之部」に印する同花押は該書の誤刻であろう―。

さて、本書は右掲奥書に誌す文亀元年の古今集聞書伝受の後、宗碩自らの追記に見る「後年又宗祇老聞書引合不審之所少々書改之早」の如く、前記の受講本を本体として、所謂「両度聞書」を多少に酖酌しながらに成った宗碩自筆浄書本と推定されるのである。しかし、浄書本とはいえ、その後―恐らく繕写直後の事であろう、誤写訂正と本文見消ち補訂書入れがわずかながらに散見されるのである。これも執筆者自筆ならではの補正である。この補正とは異り、極く僅少にすぎぬが一・二字の別筆傍記が見出される。明らかに時代も降り、いずれ本書所持者でもあろうか、宗碩特有の書体に通行字体を判読傍記した箇処が散点する。前者と別して後掲凡例中に一括掲示した。が、いずれにせよ、本書は宗碩自筆の「古今和歌集聞書」の定稿原本と目されて然るべき伝存本である。

この定稿原本の成稿時期であるが右奥書の年紀のほか未だ確認すべき証跡を得ず、「追記」に云う「後年」とは何時を指示するものか推測しがたい。この語感からして、伝受直後とも感触しえず、又、所謂「十口抄」増註の後年とも云いがたく、宗祇没年―文亀二年―後、程遠からずして面晤口授の心象猶鮮かなりし時期を想定するのであるが、未詳というほかはない。

本書二冊の巻第構成は、先ず上冊は、内題冒頭に、本聞書講釈の年次―後述―を誌し、題号の儀に続き、四季六巻、賀・離別・羇旅・物名四巻と巻第に従い各部聞書を終了し、下冊も又、恋哥五巻、哀傷・雑上下・雑躰・大哥所御哥等五巻、墨滅哥・

貞応本奥書と、講釈は巻第を追い完備するが、本書は不幸にして仮名序註―真名序はともかくも―を佚している。序註は本来聞書中に存したのであろうが秘巻たるをもって別して編次したものであろうか。但し、京都大学附属図書館中院文庫蔵一本（外題「鈷訓抄乾（坤）」。〔江戸前期〕写二冊。函架番号VI 74）も本書の転写本であるが、又同様に仮名序註一篇を欠いている。あるいは、秘巻序註の伝受は猶後事に託されたのでもあろうか、翌年宗祇の遐世を憶うと、この伝受は未完にして先師の加判、加証を経ることなくして終尾するにいたったとも想定されるのである。上述の本書の編次に於ても、巻十・巻二十の両秘巻も、古今集巻第次第に再編繕写されているのを見るにも序註を佚するのは首肯しがたい点でもある。その間の事情は猶今後の調査課題として残されるのであるが、宗碩自筆「古今和歌集聞書」定稿原本の書誌的概要は略右述の如くである。

その成立

宗祇、終焉の旅ともなる越後下向は明応九年七月十三日のこととい[註一]う。先後九次にもわたる越路への旅立は北方の雄上杉家に親昵し相恃むところ如何ばかりかと憶われ、老来の胸裡には「此度は帰る山の名をだに思はずして」と覚悟の過る出途でもあったのであろう。頽齢八十の初秋である。

翌明応十年二月二十八日改元、文亀元年である。その旅程の後を追った少壮の門弟、時に二十八歳の宗碩への「古今和歌集聞書」伝授は永年の度重なる面晤口授とは一入あらたまる述懐の講莚でもあり、一念また期するところがあったことであろう。

本書奥書は、その伝受の期日を、「於越後府中自然斎宗祇旅館／文亀元辛酉六月七日令始行同九月十八日終功訖」と誌し、本書冒頭には聞書の例に倣い、「文亀元年辛酉六月七日巳剋始之同九月十八日令成就云々于時祇老師八十二歳講尺予二旬余而請之」と同じくし、稍々詳記している。晩夏から初秋にかけての二旬余日の面受であったのであろうが、講釈の日数は前例に比して短期日である。如何様なる経過か既に辿るすべもなく、唯本書中に、期日を傍記するのは、春哥上31番に「同八日」、春哥下巻頭歌69番に「同九日」、同下104番に「同十日」、夏哥巻頭歌135番に「同十一日」、と、同年六月七日から十一日までの五日間の記日を見出すのみである。上例よりみれば一日三十四・五首程度となり、二旬余日は如何にも短く、或は三旬の誤認かとも臆測にかられるのである。或は若年二十余歳を敢て誇示した文脈

でもあろうか。

又、「祇老師八十二歳」の記に就いても、その生誕が仮令「実隆公記」にのみ拠るところであれ、文亀元年八十一歳とする通説より見れば不審の記とせざるを得ない。前者同様に不審のまに未詳というほかはない。しかし強いて臆見を記せば、奥書「追記」に云う「後年」の歳月が繕写成稿の折の慮外な錯誤を招いたかとも思われてならないのである。不聞なるままに記して又御啓示を許うところである。がいずれにせよ、余生一歳を余すにすぎない最終の講釈が本書となって結実したのである。

古今和歌集両度聞書と本書

本書の紹介は夙に阿部隆一氏により、其概要は既に識られるところである。[註二] 氏の記中、「此を両度聞書（板本）に比較するに……（中略）……歌解の注釈内容は両書は変る所がないが、此に詳にして彼に略などの詳密簡略の出入は多く、概して言へば、両度本の方が詳しい」と述べられ、その内容上に見るかぎりに於ては概ねを要約されている。尤も此期の同学統上の講釈に目新しい変化を見出すこと自体が所詮は難事であろう。それはともかくとして、氏は本書を「連歌師宗碩（号は月村斎、天文二年没）が師宗祇から文亀元年越後に於て伝授を受けた聞書で、世に『十口抄』と称される」と記され、且つ記末に「この宗祇（碩ノ誤）自筆本を後年の写本たる次に掲げる『十口抄』[註三]等に比べると、後世の写本は、聞書その他のものを混入せしめて、原形を失ってをる』と結語され、本書を以って所謂「十口抄」と目されている。当時、昭和三十四年現在の通念からすれば当然の結論であろう。しかし、本書は上掲奥書にも、又後述の如く、宗祇講、宗碩聞書であって、後年の増補・増抄を経た所謂「十口抄」とは別して措定すべきものである。氏の「聞書その他のもの」の混入伝本こそ寧ろ宗碩の意図せる「十口抄」草稿原形を遺留する伝本類と想定すべきであろう。

本書が師宗祇の直接口授たることは、本「聞書」文中に、例えば、秋歌上　読人しらず歌に、

224 萩か花ちるらんをのゝ

心は、秋深かたの萩花漸うつろひ行比、かゝる折ふしを尋みんこそ、花の心にも思しるへけれと也、又云、思へき方へもかゝる折にこそゆかめ、さらは人も哀と可思之義也、行さきは夜も深るともかゝる折しもはと云心也、

まへの説は直被仰事、次のは御注也

と見え、前説を「直被仰事」と断り、「御注」と別している。参考までに、「両度聞書」(板本)を掲出すると、

心は、おもふへきかたへもかゝる折にこそゆかめ、さらは人も哀とおもふへき義也、又云、行さきは夜もふくるともかゝる折しもはと云心なり

と述べ、本書云「御注」本文である。[註四]「御注」が常縁口授か成書かはともかく、本聞書には、宗祇講釈にみる鑑賞の余韻を纔かながらにも吐露する一端を窺見るのである。

更に、一例を示すと、雑部下　読人しらず歌には、

952 いかならんいはほの中に
昔化外道四人ありしか、生死をかなしみて、あるは天にあかり、あるは海に入、あるは市に交り、あるは巌の中にこもりし事あるを思へると也、此説、講尺の時は慥申されぬ侍し、祇聞書には、いかならんとは、世をすみ侘て、いつこのうら、いつれの山かくれにてか、なと思つゝくるに……(下略)……

と、法句譬喩経の説話を栄雅抄などを意識してか増注している。これも又、「此説、講尺の時は慥申され侍し」と師宗祇説とし、口授の情況を附記しているのである。「両度聞書」は諸本いずれも、板本に見る「付紙に有」の部分を除けば、「祇聞書」以下略同様の釈文である。

右の二例を挙げるにとどめるが、本書は、師説、直接の忠実なる再現であることは想定するに難くない。後日、不審少々の改補はともかくとして、敢て宗碩の補説と認むべき証左も又本文中には見出しがたい。

次に、本書と「両度聞書」と、両書相互の関係は既に述べて来た如くであるが、それは、又単に両書の釈注の粗密の相違を以て全てを律するとも言難く、上掲二例に見る如く、漸々微かながらに釈義・鑑賞に於ても、いわば宗祇流の補説・見識の跡を辿り得るのである。その全文は以下に掲出したので、任意に二・三の補説をあげ刪省する。

本書、春哥下　よみ人しらず歌に、

100 まつ人もこぬ物ゆへに
心は、人をかならすまつ程に、その人のために花を折つるに、其人もきたらぬ時述懐してよめる也、鶯のなきつるとは、只今なくにもあらす、又鳴へき花をと云にもあらす、たゝ鶯は花になき、花になるゝ物なれは、なきつる花をと打任ていへる也、かならすと待人のこぬ端的の

心を能々可思

と釈註は詳細である。これに対し、「両度聞書」（板本、但し他本も略同）には、

鳴つる花を折てけるかなとは、鶯の来りなかぬにはあらす、又云うくひすの愁へき花をと云にも非す、たゝ待人のこぬおりのことくさ也

とかなり簡要である。上例に見るかぎりでは、「両度聞書」を土台に敷きながらに、唯叙述の粗密にとどまらず、微妙な感触の気配をも異にしているのである。かゝる例は両書の間には尠いが、細微な鑑賞の揺れは随所に見出すことが出来るのである。最晩景宗祇の古今集講義の一端は確かに本書に具現しているともいいえようか。しかし、繰言するが、それは緩やかにして、且つ異見の提示とまでは到底あり得るものではない。

このような一首全姿にわたる歌解と共に、「両度聞書」の基底を保ちつゝ、刪・補の均衡を整える一方、前者に欠く釈義・補説部分も又屢々目に付くところがある。前掲952番の法句譬喩経の説話の導入もその一つであったが、次例もまた同様の補強経過の一部ともなっている。春哥下　88歌の一本作者につき、

一本大伴くろぬし

一本と侍るは、定家卿家の本には貫之哥也、他本又黒主とあれは其説すてかたくて一本とかける、黄門奥書、且任師説といへるによくかなへり

と、一本校異に言及している。更に関聯する一例を示すと、「黄門奥書」の末尾には、

此奥書は貞応本の一義也、此以後又加録本（ママ）を書り、其には、僻案輩とあり、好士といへるにはまされり、其は一両年以後なれは、猶よく調所もあるにや、しかれと、二条家は嫡々たるにより貞応本用之、されは僻案好士とかける也、以此奥〈書〉之意、此集の大意をも、黄門の心をも可量知、毎人の教戒たる物也、

戸部尚書　其時定家卿民部卿なり

の如く、嘉禄本にも論及し、貞応本依拠の理などをも寸述している。わずか数箇所の例にすぎぬが、猶この部分的釈義・補説は尠くなく、殊に作者注記などに於ては顕著に散見され、漸次に、所謂注釈的傾向の萠しを見るの感がある。その微細な萠しが、門弟宗碩をして、常縁から宗祇、宗祇から肖柏・宗碩に至る聞書の集成的意図を目論む「十口抄」への胎動の因をなすものであったかもしれない。

本書と所謂「十口抄」

その「十口抄」であるが、未だ数本を披見するにすぎず、伝本調査不足の難はまぬがれぬが、管見する限りに於ては、「両度聞書」を本文に立て、同系流の複数聞書を傍注し増抄、補説する形態をとるものである。両序・二十巻・墨滅歌等全般に亘る注釈書である。

その一本、大阪府立中之島図書館蔵本（函架番号　甲和279）、〔江戸後期〕写四冊本の巻末真名序注の奥に誌す識語は、

(1)伝受之後宗祇庵主書此一帖／以被見常縁所存少々加筆加／詞者也門弟随一思尤在之／仍為後証又加此詞早

文明四年五月三日　　平常縁在判

(2)予此集伝受之儀於越後府中自然斎宗祇旅館／文亀元辛酉六月七日令始行同九月十八日終功訖　　宗碩在判

後年又宗祇老聞書引合不審之所少々書改之早

(3)所一見存分無相違尤以無比類者歟

文明十四年春正月日　　宗祇夢庵判

同十九年未六月重聞此説加筆

延徳弐庚戌年三月又聞序十廿巻訖之判同

全部四十三ケ度伝授之

真名序〈無宣下云〉故不必用之然而又難捨にや／貞応本被書入追可受之

(4)十口抄者元来秋田城之介殿宗実所持之御本也／宗実者年来朝熊村蟄居件御本荒木田盛徹令恩借書写之又盛／徹本高向氏光屋令借用書写之其後以光屋本洛之／書肆佐々木平右衛門写之予十口抄求平右衛門手／彼本転写之誤依有之光屋本令借用遂校合但宗／実之御本以朱黄点行傍別説々今亦如写本以二色／摸之本之奥書宗祇夢庵判有之夢庵者杜丹華／之別号歟雖不無不審随本而已

貞享四丁卯年中秋日

と誌している。管見する諸本の中では、右掲識語(1)～(4)をすべて書写する伝本は京都大学国語学国文学研究室蔵「古今集為家十口抄」（函架番号、国文学EcⅡ7b）〔江戸中期〕写三冊本であるが、他本は(1)～(3)を所載するか(1)を欠く伝本を見る。

さて、右識語中、(1)は「両度聞書」（板本）に刻す、常縁加証奥書である。(2)は云うまでもなく本書奥書である。(3)は伝本により多少の異同が存するが、「古聞」奥書と認められる。就中、本学図書館本「古今和歌集聞書」写三冊本と同一である。但し

孰れも文明十四年宗祇加証の次に存する「文明十三　九月下旬之聞書也　肖柏判」の一行を書落している。それ故か、右掲書は「宗祇」の左傍に、「夢庵判」と細記したものか。ともあれ「古聞」の奥書であることは事実である。最後の(4)は貞享四年書写本の転写経過を誌すものである。但し、上記京都大学国語学国文学研究室本には、「貞享四丁卯年中秋日」の許に、「比叡山近江片田生縁／一祇法師／伊夜日古神胤高階氏光元嫡男／道祇桑門」の両記名が存するが、書写の一・二字を除けば全く同一識語である。両本はこの識語により祖本を同じくするものであったことは推測に難くない。

そのことはともかく、この(4)識語の中で留意されるのは、両本の祖本である「秋田城之介殿宗実所持」本である。且つその記中に該本には、「但宗実之御本以朱黄点行傍別説々」と誌していることである。又次いで、「今亦如写本以二色摸之」と付記するが、両書共に朱黄の施点を佚している。然しながら幸いにして、同朱黄点を付する「十口抄」が伝存する。大阪府立中之島図書館蔵「古今連著抄」（外題）〔江戸後期〕写十冊（函架番号224・4—116）である。前記「十口抄」と巻第編成に於て両序が第一冊に並綴するほかに、上記の識語に於て、(2)・(4)の奥書を欠いているが、[註五] 他は同じくする「十口抄」である。

その朱・黄両墨の〻点は、「両度聞書」本文の行傍施注に、両序を除き全巻に付されて、それが二種の古今集抄に拠ることを示している。その一例を掲出すると、雑哥上　読人しらず歌904には、

904千早振うちのはし守なれをしそ哀とは思ふ年のへぬれは
御注ちはやふるとは神とつゝけ共かやうにもつかふ詞也（朱）万葉に道早振菟なとかけり是は宇治の宇もしを取て云り如何宇治橋守は神祇なれは如常五文字可意得にや
万葉に此たくひあり橋守は姫明神也我年の老ぬることを歎あまりにはし守の年へぬるをあはれと思心也橋守はむかしより道をまもる神也此哥は道有人のいたつらに老ぬる後我身をはし守になすらへて読る哥成へし尤心面白くや（黄）橋守と成て幾春秋を過すらんと鄰心也（黄）裏説橋守は道を守人の心也其家ならては雖天性器用有と難信仰也世をへて家を重たるを信用すへき也

と見える。まず朱〻点の傍注は、本書、宗碩聞書には、

万葉に、道早根菟（ママ）なとかけり、是は宇治の宇もしを執ていへり、如何、宇治橋守は神祇なれは、常のことく五もし可心得にや、されは『神とつゝけねともかやうにもつかふ詞也下略』以下「両度聞書」ニ略同

次の黄〻点の傍注は、「古聞」（国会図書館本、函架番号WA

16
131）には、

神なれは千はやふるとよめり橋守となりていく春秋をすくすらんとあはれむ心也道ある人のいたつらに身の老によりて思へる也裏云橋守は道をまほる人の心也其家ならてはたとへ天性器用あるも信仰しかたき也世をへて家をかさねたるを信用すへき事也

と聞書している。縷述を避け僅か一例にとどめたが、既に明らかのように、朱〻点以下の傍記付注は、本行「両度聞書」に見えぬ本書「宗碩聞書」による補説であり、黄〻点以下の同付注は肖柏の「古聞」による増注である。この朱黄両墨点は上記の如く両序を除く全巻に施点され、その大概、寧ろすべてが両聞書による補説の弁別である。—但し、宗碩聞書中の一部には朱点増注のなかに遺漏するところも確かに散見する—そのことは此「十口抄」が、その源泉たる「両度聞書」を基底におき、その土台の上に、宗祇講授、就中連歌師系流伝受の聞書を代表する肖柏・宗碩の両聞書を以って補強し、連歌師系流の宗祇講釈を集成化、あるいは完成化を目論んだ、その結果と見ることが出来ようかと思われるのである。—因みに該書の外題を「古今連著抄」と称するのも誰人の呼称かは不問に付すも、その謂であろう—。未だ「十口抄」諸本調査の不充分なる過程の推測にとどまるが、それが単に結果としての集成であれ、宗祇流聞書の相互間を相補っての統合化への傾向は多少の紛乱を招く惧れはあるにせよ、旧来の伝受遵守から歩一歩を進めたる意義は認めざるを得ないのである。其後、この傍記補注の変則形態の草稿がどのような成稿本となって完了したかは、寡聞にして未だ聞くところでない。

ともかくも、「十口抄」識語(1)〜(3)は、現存「十口抄」の編成経過を提示するものであろう。本解題は、その編者を宗碩その人と通説に従い拙述しているが、しかし猶、一抹の不安と躊いを覚えるのである。それは右識語(1)〜(3)の不則な掲出次第と共に、編者その人の然るべき追記、付言が存すのが自然ではなかろうかとも思う、素朴な暗推である。片桐洋一氏は、右識語(1)・(2)までが、「本来の『十口抄』の奥書である」[註六]とされるが、それは又ひとつの仮説として首肯されるのである。が又一方、稍〻混然とはいえ、両三書の相互本文を酌酌参照しての編成であれば、猶識語次第に従う一人の編者を想定したくも思われるのである。併せて今後の課題としたい。

むすび

本書翻印に就き、その解題は本来書誌上の記述にとどむべきかと当初は予定したのであるが、わずかな翻字の共同作業の中にも種々の問題が提起されるにおよび縷述する結果にとなった。その一つは、「両度聞書」成立以後に於ける宗祇の古今集伝授又は講釈の展開である。偶々その最晩景の講説を受けた門弟宗碩の自筆本伝存により、錯雑多岐にわたる諸聞書の転写現存本の中にあって、その確実なる証本の伝存は、とりわけ恰好の比較対象たり得たのである。それが、「古今和歌集両度聞書と本書」の項となり、両書の間にはゆるやかながらもその講説の中には、独自の異見とは到底云難くも静かな個性の変容とその完了を窺見ることが出来るのである。奈辺に本書の特色は存するのであろう。かく対象を両書に絞ったのは繁縷な諸本聞書との交渉・関聯は徒らな諸疑提示に果てるからであり、もとより浅学の敢て為すところではないからにほかならない。次いで、提起されたのは、宗碩編著とされる「十口抄」の存疑である。猶未詳なる諸点は存するが、現「十口抄」の補説の半ばは、既に本書に見る宗祇講説中、「両度聞書」未載本文を殆んど其儘に所引移写するものであり、又、その半ばは又同様に「古聞」のそれであることが明らかとなり、いわばその編録とも称すべき性格のものであることが判明されるのである。従って、「十口抄」は宗祇講説の集成にとどまり、編者所論の具体的発言は其処に見出し得ないのである。しかし、寧ろその集成化の動きにこそ、古今集註釈史に於ては其意義すること尠くなきを認知すべきであろう。一方、本書にかえって、「十口抄」一半を編成する内容は、本書、宗祇講説の中に醸成された宗祇の古今学として捉えられるべきものであろう。「本書と所謂十口抄」の一項の視点は其処に存するが、更に諸本調査の結果を俟ち今後に期するものである。

猶「十口抄」—管見する数本ではあるが—いずれも両序注を具備し、且つ同一傍記付注が存する。しかし、それは「古聞」からの移写にかぎり、本書、宗碩聞書を見出し得ない。さきに、本書が両序聞書—就中仮名序聞書を佚するのは、元々の形態かと推測を付言したが、やはり「十口抄」が宗碩の編録とすると序注を欠く現存本が、その聞書のすべてであったのではなかろうか。臆測を重ねるに、宗碩の受講は仮名序注の秘巻終了を寸前にして師宗祇の遐世に遇い終焉を余儀なくした、とも想像さ

れるのである。全二十巻講説伝受のあとをうけ、その繕写成稿を俟って、再度の披閲補正を得、次いで序注講授によって全伝受と加証という経過などを予測するに、翌春早々の東国への旅立ちに老弱猶怱忙の半歳は、随伴する宗碩にとっても繁多寧日なき日々でもあったろう。又、老師八旬余、黄吻三十歳にもみたぬ門弟にとっては、この倉卒の間の成稿には猶躇いも覚えたことであろう。講受の繕稿も成らざる前にして師翁の急逝は望蜀の全伝受印可の面目を逸するの終局となったのではないか、など妄想にもかられるのである。

本書は宗祇加証をとどめず、尾に、「後年又宗祇老聞書引合不審之所少々書改之早」とのみ追記しているのは、上記の如くである。

註一　「後法興院記」、明応九年七月の条に、「五日丁巳晴、及黄昏肖柏、宗祇等来、有一盞事、宗祇近日越後国江可罷下云々」、又「十三日乙丑晴……入夜宗祇来、々十六日可下向越後云々、有一盞事」と見ゆ。

註二　「慶應義塾大学図書館月報」第五十一号、昭和三十四年。

註三　慶應義塾図書館蔵「古今和歌集聞書」〔江戸中期〕写三冊（函架番号214 152 3）。本書の奥書は後掲の「十口抄」奥書(1)〜(3)と同じくする。

註四　所謂近衛尚通本―書陵部蔵桂宮本―には、眼前のさまなり。花を愛する心なり。又おもふ人のかたへゆかん心に、露にぬれてもといへり。（片桐洋一著「中世古今集注釈書解題三（下）」）と、その異同が稍々顕著である。板本又尊経閣蔵〔江戸中期〕写三冊本「古今和歌集両度聞書」（函架番号1326）等は全くの同文である。

註五　該書の奥書は貞応本識語につづき、

伝受之後宗祇庵主此一帖／以被見常縁所存少々加筆／加詞者也門弟随一思尤在之／仍為後証又加此詞早（本云）

文明四年五月三日　　平常縁在判

延徳二庚戌年遙四十三箇度伝授之訖　　自然斎宗祇在判

と誌され、「両度聞書」、「古聞」奥書の末尾を記するのみである。その削落の経由は未詳である。

註六　片桐洋一著「中世古今集注釈書解題三（下）」。

（平澤五郎記）

凡例

一、ここに翻印紹介するのは、慶應義塾図書館所蔵　月村斎宗碩自筆本　文亀元年奥書「古今和歌集聞書」二冊（函架番号132X 62 2）である。

一、翻印は原写本の再現を期したが、以下若干の補・改を施したところがある。

(イ)原本に見る旧体・異体字は現通行字体に統一することを原則とした。又、本文中にまま散見する、見消ち・追補・欄外書入れ等は原本が自筆本たるをもって、その経由を辿るべく、見消ちは其儘とし、追補欄外書入れは、それぞれに、前者を〈　〉圏符内に之を示し、後者は（頭書）と付記し当該箇所末に掲出した。

(ロ)猶、細註は略原本に従い、小字一行又は双行に掲げたが、此期の聞書類に多見する助辞・活用語尾の細字表記は稍々統一を欠くも、後者に於て略一貫するので原本表記に準ずることとした。

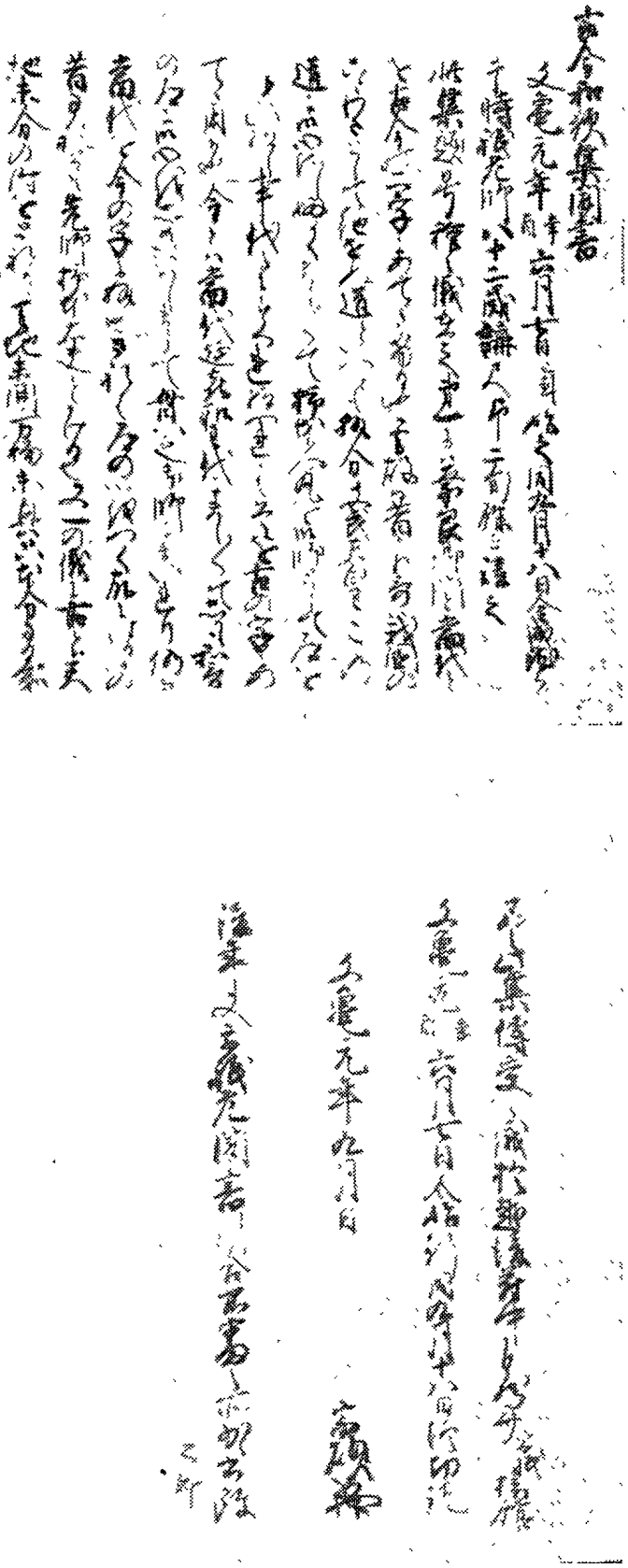
(ハ)特に、その播閲の便宜をはかり、敢て本文に読点を多く施したが、稍々繁に過ぎるの惧れも存する。御諒察されたい。又本文中の汚損箇所、明瞭な誤字誤脱にはそれぞれに、空格□符を付し補訂語を傍記し、或は（ママ）を付記した。猶前者の補訂傍記には、本書の転写本たる京都大学付属図書館中院文庫蔵〔江戸前期〕写「古今和歌集聞書」二冊本（函架番号VI 74）を参照した。

(ニ)歌頭に付したのは、本集の国歌大観番号である。

一、原本中には極めて纔かながら宗碩筆蹟とは異る別筆の朱墨傍記が見出される。以下の如く草体誤認又は補訂は後人の付註するものである。

202「又松虫と云はんに(名)(朱)」、216「鹿(鹿)(朱)の打しきりなくを」、232「飽心は少もなし」の上欄に「飽歟」と朱書、244「蛬(鹿)

の打(朱)鳴たる」、312「只今きく鹿(墨)のねに」、384「郭(墨)○も君(墨)かわかれを」、426「心に常ならぬ(墨)所のなき理也」、556「七日〳〵の法師(墨)なとにや」、635「思ひつめたる(墨)ことも」、680「此哥に執てはたは〳〵(朱)に侍なりとそ」、誹諧哥「滑稽(墨)」の「稽」字書体稍〻異体なるに就き下欄に「稽」と墨付記す。



古今和歌集聞書

文亀元年辛酉六月七日巳剋始之、同九月十八日令成就云々、于時祇老師八十二歳講尺、予二旬余而請之

此集題号種々儀在之、第一には奈良御門と当代とを古今の二字にあてゝかける也、其故は、昔より哥は我国のことわさとして絶せぬ道といへとも、執分文武天皇この道に御心さしふかくまし〳〵て、柿本人丸を御師として道を□(学)ひ給し事代々にすくれ給へれは、是を古の字にあてゝ用る也、今とは当代延喜聖代にまし〳〵て、しかも和哥の道に御心をしめおはしまして、貫之御師にまいれり、仍而当代を今の字に執也、されは道の心をつく故に、はるかの昔なれとも、先師柿本大夫とかける也、又一の儀に、古とは天地未分の時をとれり、天地未開万物未興只本分なる所を古と云也、今とは国常立より此方今日まて一切衆生の境界を今の字にとれる也、又一儀に、正直の二字を古今にあてゝいへり、正は自性の心也、自性は言語のをよふ所にあらす、されは正直の二字の尺に、中ならすして中なるを正と云、枉(テ)不枉(ヲ)直と云、中は無極の称也といへり、はかられぬさかひなり、則正は天照大神□(の)御慮也、直は其御心をうつす所の儀也、天下は正直の二字にておさまる者也、しかれは、此集は正直を姿とせり、天地人を正直にとる時は、天地は正、人は直也、この国のことわさなれは、読所の哥も正直を可守也、尤哥人可思処也、和哥とは、和は此国の名、哥は此国の風也、されは、道をたゝしくする事肝心也、哥道の異風少の所より出来る者也、除自他異風帰直心を可思也、世を治、家を守道、又この心也、只此道は和を以、詮とすへき者也、人の五尺も天地の和よりおこる者也、世界の和より人事のとゝのひもおさまる也、されは心の

和する時よめる哥よろしき也、集とは内外の道をあつむる義也、巻は其数をさため、第一第二とみたらぬ心也、みな法度也、只よく法を守る事此集の眼目也、いにしへは、人の心をのつからたゝしくて、道を守る心もふかゝりき、末の代は、人みなみたりかはしけれは、いかにもこの旨を仰き、道をおさめんと神慮をも可憑事にこそ、又云、この題号の一義毛詩より出事在之、序聞書載之

此内先師柿本大夫と書ル事、真名序に貫之書也、猶此儀口伝切紙在之、文武延喜両皇之間年記可為弐百年斗歟

国常立は天神七代の第一神也、従其今日講尺までを今の字にとる也、正直の正と自性の性文字は替たれ共おなし心也、自性とは人間の事、未聞以前本分なる所にあたる理也、是則正也

中ならすして中也とは、惣別中と云は、物を三をきて前後を云也、然に是は前後もなき所なれは、中ならすして中也といへり、枉而不枉も同し心也、中の字無極(ブキヨク)の理也、正の字又其理也、されはこの正中の両字同前也、中と云字をナカシマト読ル、無極の心也、是則はかられぬ境界也、天照大神の御慮又同、されは、正直一躰の心也、□(天)地人の三ははなれぬ物なれは、天地人といへり、是までは古今両字之注三説也

此国の風は伊弉伊諾尊の一言を述給しより哥と云事始レリ

右集三ケ大事も正直をもとゝせると也

天地の和とは、人間腰妊せしより天地の和を請て人となる物なれは、其境をいへり、一切天地の和よりおこる也、人事は人のことわさ也、内外の事、口伝在之

春哥上

ふるとしに春立ける日よめる　ことは書とよむへし

此こと書は、いにしへといまとを一によくなすことを以かける也、貫之か心に人丸もある義也、当代の御うへ則文武天皇也、心のひとしき事をいはんと

て、よく此心にあたる哥を見あさりてかける也

在原元方　作者には儀なし、只哥に依て入也、然者哥道の徳により第一に名を頭也、猶可尋之

1年のうちに春はきにけり一とせをこそとやいはむことしとやいはむ

□□(此哥)は此こと書の、年のうちの立春と心うる外に無別心、これはたゝ序分也、たゝさゝへてみえたる分也、これ尤其故有也、此集の本躰也、一部の哥をもこれにて其理をしるへし、一切根源となる儀也、貫之か哥心、又これを以其心をさとるへし、さて此集はよく物の法度を直にするに、大かたさしむきたる立春をは入すして、年の内の立春入る事は如何、此集はこれ君子の徳、万性の楽あらん事をもとゝして、春と云は四時に執ては祝の時万物の始也、春のきたる事はめくみの発する義也、しかれは仁徳も末とをくおこり、民の心もたのしむへきを先尺する義也、古今両字此一首にきはまる、心其習あり、可請師説、作者には別義なし、第一に入事其人の名誉是也、又心に物のかんする所其習在、是真実の□□(古今)也、此内本躰(テイ)とは、此集は物をむつかしくせさる所を云リ、一切根元と云も還したる所をいへり、貫之か哥又同と云も其心也、又年内立春為巻頭事不審も先達我思所を自聞自答也、仁徳とは君徳也、古今両字一首に籠事、心に物のかんすると云所、いつれも可請師説

2袖ひちてむすひし水の　貫之

此哥巻頭にはよくあたれり、ひちてはひたす由也、したしくしたる也、心は夏の比納涼せし水の氷ゐたるさまもたゝならぬに、又春風至て吹ときたるさまえもいはぬ景気にや、此哥四季をよめると云、不可用之、理説、納涼せしを知音にたとへ、氷ゐるを遠隔に比、又解行所を立かへりいひかはすに譬、されは知音の中遠隔の事ありとも堪忍すへきの教也

題しらす　此儀当座の景気にのそみ、又会所の斟酌なとによる事もあり、是は出題の人なとなき所を云、

又題の心あらはれされはいへる事もあり、定らぬ事也

読人不知　あるは勅勘の人、あるは貴人、あるは古世の人、又は実に名をしらねはかける事もあるへし、此哥作者口伝在之、これはたゝ勅勘の時也、勅勘なれと此三番に入らるゝ事、且は貫之か名誉彼女なれは云又は直なる儀也

3 春霞たてるやいつこ　春のけしきをも先よしのゝ山にこそみめと打なかむるに、雪打ちりて更に霞のけしきもなけれは、たてるやいつこと云也、次第をかへてとは、吉野の山に雪は降つゝ、さて春霞たてるやいつこと云へきを、先霞をいへる所を云、これまては初心之儀也、あはれ霞もたてかしとねかふ心也、霞を願は花を思心なり、雪はよしのゝ山たかき所なれは、よみならはし侍る也、又の説、ことはりをいはすして引くつろけて云哥也、理をとちめぬを古今の正意とす、遠白哥也、打吟してみるへし

4 雪のうちに春はきにけり　二条后（清和后、陽成の御母后也）

此雪〈の内〉をとしのうちの心と云人あり、不用之、（顕注密勘也）勘云、ふるとしの雪はまたきえぬに、日数ははや春に成にけれは、涙も氷り、雪にとちられつる鶯も、をのか時まち出て春に木つたふ心もあらんかしとそきゝ侍しとあり、愁を散するの心也、哥はたゝあさはかなる事をもとゝして人の進退を案するはし也

5 梅かえにきゐる鶯

きゐるは来居也、なるゝ義也、春かけては、春に成て也、心は、雪と鶯とをともに興しあひする也、其さまおもしろかるへし

6 春たては花とやみらん　素性法師

詞書に心は明也、花とやみらんとは、我心の花とみるより鶯の心をも察したる也、逸者其吟楽、此心也、みらんと云詞本哥にありとてよむへからす

7 心さしふかく染てし

おりけれはとは、折る也、心は、志をふかく染てお

れは、たゝきえあへぬ雪か花とはみえけると也、又おりけれはにや消あへぬ雪の花とみゆらんとも云、惣別みる人の心よりある義也、宿ちかき梅なとをなくささ(ママ)みに折たる心なるへし、消あへぬは其の雪のさま也

左注、忠仁公なり

二条后云々正月三日(ミカト)よませ給ける、よませさせ給なるへし(ミツカトモ)

8春の日の光にあたる　文屋やすひて

光にあたるとは、春宮の母后なれは春の日によそへいへる也、かゝるめくみにあへる身なれと、老ぬれは行末とをき御代にもあひかたき由を歎心也、又の説、詞すなほにして内外共にかくれぬかきとくなり

9霞たち木のめも春の　紀貫之

心は、みるまゝの躰也、梢も漸春めく比ふりかゝれる雪は、まことに花ともみゆらんかし、下にはめくみのいつくにもをよほす心をそへたり、祝の心もこもれる也

10春やとき花やをそきと　藤原言直(コトナラ)

此花何ともさすへからす、但梅なとにてもや、たゝ初春の哥の心也、春と花とのいつれをそきと云理を鶯にてしるへきを、いまたなかねは、鶯をかこつ心もあり、二物の証人に鶯をし侍る、尤めつらしくおもしろき心なるへし

11はるきぬと人はいへとも　みふのたゝみね

あらしとはさにもあらしと也、是もまへの哥のやうに春のくる証拠に鶯をいへる由也、鶯を賞して、此鳥なかぬ限は春にはあらしと也

寛平御時　寛平は年号也、亭子院、仁和、朱雀、此帝の年也

12谷風にとくる氷の　源当純(マサスミ)

毛詩に、谷風は東風(春風也)也といへり、心は、深谷まて至ぬる春の風に解る氷に、浪の花も折を忘すさき出たる心也、たゝ春の残所なくあまねきよしとそ

13花のかを風のたよりに　紀友則

鶯もはやなけかしと思ふ心を、花の香吹風になすらへやる由也、うくひすも花にはさそはれやせんと思心也、これより四首、鶯の段也、まへに鶯をあまたよめるは、初春の哥まて也、此哥面白風也

14うくひすの谷より出る　大江千里

大かた春のくるをは誰もわき侍れと、鶯の春をまち出て、あらたに鳴出たるを感していへる也、只鶯を賞し愛したる心也、世俗に其人をほむるには一人をさしていへる、おなし心にや

15春たてと花も匂はぬ　在原棟梁

春到花のさくにも、さもあらぬ山里なとは、鶯の音も物うきやうなり、下の心、花もにほはぬ山里を在原一門の時にあはぬに比ゝ、四五の句は身上の事とそ、なへての春にもあはぬ心を述懐せる也

16野へちかく家ゐ〈し〉せれは

是も少述懐の心こもるにや、かゝるなす事なくさひしき物なから、鶯の声はかりはきゝてなくさむよし也、是まて鶯の段也

17かすか野はけふはなやきそ

伊物に武蔵野と云て恋の哥也、此集にては初春の哥也、心は野遊の義也、若草のつまもこもれりとは、漸草の下もえ初るかいまたほのかなる比の心也、我もこもれりとは、春の野に立なるゝ様の義也、かゝる折ふしは、はや野をもやきそと云也

19み山には松の雪たに

心は、たゝ深山には雪たにもきえぬに、都ははやわかなつむ由也、松はみ山にある物なれは、詞のよせにいへる也、松は真木にてと云説不用之、雪は松にみるか切なる物也、眺望の心也、尤面白くこそ

18かすか野のとふ火の野守

御抄にくはし、飛火野の様と云説不用之、此野は燧火の在所也、そのかまへなとして、自然のためまもらせらるゝ、其を野守と云也、されは若菜の事なと

ことゝはんにも便あらんかし、只その事〳〵にしるへき人をもつて、事を尋しるへき心をおもふへきことゝそ

20梓弓をして春雨

ある説、あすさへふらはをしてつまむと云説如何、只をしてはる、みな枕詞也、あすさへふらは若菜ももえそひてつむに便あるへき由也

仁和のみかとみこにおまし〳〵ける時に人にわかな給ける御うた

此御門五十有余まて即位なかりし間、久御子と申せし也、遍昭に五十賀給へる時の御哥なり

21君かため春の野に出て

君かためにすることわさなれとも、雪氷しのく袖のしつくは我身にこそ侍れと也、此道内に王道もこもりて有心躰也、しかも見所ある哥なり

22かすか野のわかな摘にや　　貫之

此哥野外春望なとも云へし、ふりはへ、打はへ同事にや、初春の比、わかなつむ人の此野に行たるさま可有其興

23春のきる霞の衣　　在原行平朝臣

心は、ゆら〳〵としたるうすき霞の風ふかば乱ぬへきさま也、霞を衣にとりなすは常の事なれと、春をきる人にしたてたる奇妙也、此山風只今吹にあらす、遠望の義也、へら也とは、けなりなと云心、又は、へく、へしなと也、哥によるへし

24常磐なる松の緑も　　源宗于（ムネユキ）是忠親王二男光孝御孫也

もとより不変なる松の緑なれは、変する所はなけれと、春風至てあらたまり行、我心よりみれは今一入色まさるよし也

25我せこか衣はるさめ　　貫之

時節相応の哥也、此五もし序なから古めかしき所何となく面白也、春雨の一たひ〳〵に野への色のまさり行さまみるまゝの躰也、せこ男女の間いつれにても云へし、これ晴の哥の躰也、色にとらは白色也

26青柳のいとよりかくる

心は、青柳の糸のゆら〳〵と打なひきたる比、花も又ほころひあひたるさま也、春しもと云に心を付へし、いとにほころふると云ことを態したてんとにはあらす、自然のえんにはなるへし

27あさ緑いとよりかけて　　僧正遍昭

まへの哥の類なれと、これはわさと作なしたる姿也、柳かと云か文字はかな也、遍昭は姿をえたる哥よみなり

28百千鳥さえつる春は

御抄に委みゆ、上は、郭公鳴やさ月のたくひ也、春来ては諸鳥あつまりてなけは、鶯もをのつからこもる也、物毎にとは、一切草木の冬枯も名残なく春めき、いつれも又本の物になりゆけと、我身一は古行事のあらためかたき由也

29をちこちのたつきもしらぬ

此二鳥可請師説、心は、深山幽谷分入て、遠近の便もわかぬ霞のそこはかとなきに、此鳥の打なきたるおほつかなき由也、大かたの鳥なりともあるへきを、こと更に我をよふやうになけは也、をちこちこなたかなたといへるにも叶へし、猶たゝ旅行の心と所の折ふしの義と執合て、其身になりて可吟味〻〻

30春くれは鴈かへる也　　凡河内躬恒

道〈行〉ふり行とは道行次也、こしへ行たる人を思おりふし、帰鴈の打なきたるを聞て、ことやつてましといへる、哀ふかし、みつねか哥は思入る所たゝにはなし、されはかすかなる所は侍らすとそ、いつれの哥をも一ふしよみいたす哥よみ也

31同八日春霞たつをみすてゝ　　伊勢

花をいたくまつ心を我そめたるよりいへり、只今さくへき花をまたすして行所を云也、花なき里始てよみ出たる詞也

32おりつれは袖こそ匂へ

梅花おりつる袖の打かほりたるに、打過る道のほと

りに、鶯の打鳴たるをしたふやうにいひなせり、此花只今折て持たるにはあらす、たゝ梅に鶯のしたしむ心をかく云也、ひとへにえんにして余情風情ある哥也、執此哥有家卿散ぬれは匂はかりをとよめり

33色よりも香こそ哀と

心は明也、たか袖ふれし、昔のいかなる人と云心をもつ也、そもは梅そと也

34宿ちかく梅花うへし

あやまたれけりとは誤てと云義也、やゝもすれは人のとふかと思よし也、かならす恋の哥にはあらす、朋友なとにや、只梅を愛する也

35梅花たちよるはかり

心は、かりそめに立よるとすれと程をへたる由也、人のとかむるとは、物えんしの義にはあらす、いかなる御袖の香にかなと人の云やうの儀也、家集に云事はたゝ指南也、おもてはふかき匂也、兼輔哥也

36鶯の笠にぬふてふ　東三条左おほいまうち君源常

笠にぬふとは、梅の枝にあひたをこなたかなたへかよふと云事は不用之、花のすかたを笠ににせて、しかもむつましくする様なれは思よそへたり、老かくるやとは、笠は物をかくすに便あり

37よそにのみ哀とそ見し　素性法師

哀は愛したる義也、よそなからも愛しおもへるか折ては又一入なる由也

38君ならて誰にかみせん　友則

切に思人の所へ梅を送るとていへり、君ならてとは、その人を賞して云也、しる人ならすは、いかてかみせんと也、色は惣の儀、香はくはしき心也、下の心、世上の人の心の程をみしるへきの心也、大途の義と内心のこまやかなるとをよくわくへき事の風也、道の事なとに大底人に対していひかたき事なるへし

39梅花にほふはるへは　貫之

くらふ山、鞍馬と云説不用之、有城州、心は明也、

春へのへ文字は心なし、題には夜とはみえねと心はよるの哥也

40月夜にはそれともみえす　　みつね

是は白梅なるへし、心は、月ともはなともわかねは香を尋てそしらんと也、又匂をしるへに、いかて尋こぬそと隣の人にいひやる心也、詞書にて其理あらは也、不然はあまりにやすくや侍らん

41春の夜のやみはあやなし

あやなしとは、御抄〈に〉、かひなき事をあちきなくなと云心也といへり、心は、色をかくさは匂をもかくさす、さらは又色をもさやかにみせすして、さすかなる所、御抄の心によくあへり、世上の人の心に此義あり、よく思さとるへし

かくさたかになんやとりはあるといひいたして　貫之

ははつせ信号(ママ)にて折〳〵まうてし也、然に久音信さりけるを、実に心もあひかはりけるやと思事をいはんとて、我方はたしかにしてこそ待わたりつれといへる也

42人はいさ心もしらす　　貫之

まへのこと書の心をさし返して、さやうにあるへきにもなきをかくいふは、そなたの心こそおほつかなけれとおもふ心を、人はいさ心もしらすといへるにや、されは、こゝに昔のまゝなる物は花なりけり、とよめる也、故郷とは久しくなれきたりたる所を云也

43春ことになかるゝ河を　　伊勢

題に、水のほとりに梅花さけりけるをと侍れは、梅より思ひよそへて河をさへ花とみれは、たゝおられぬ水にも袖をぬらしつへきよし也、河を花とみるとはうつれるかけ也、おらはやと思に叶ぬ所を云也、あまり花に着したるにより心も実ならぬさま也、一たひのみるめこそあらめ、毎春此花に心をまとはす所、哥人の心也、下の心、世中のしわさはたゝおられぬ水也、なりかたき事のよし也

44年をへて花のかゝみと

花のちりおほひて水のみえぬをみて、ちりかゝるをやくもるといふらんといへり、又云、花のかけの水の清きを鏡といへり、年々歳々なれきたるに、花と水との間少も思所はなきか、たゝちりかゝりたるに思所一出来たるよし也、たとへは月に俄雲のかゝりなどするのよし也

45くるとあくとめかれぬ物を　　貫之

うつろふ事のはやきをいはんとて也、家にあると云こと書に、めかれぬよくかなへり

46梅かゝを袖にうつして

心は明也、猶いはゝ、袖にうつしてとゝめてはとは、とゝむる物ならはと云心也、かやうに文字をくはへて見侍へし

47ちるとみてあるへき物を　　素性

うたては転也、うたてしきと心うるはよろしからす、其心この集恋部に一首ありとか、心は、甚袖にとまるよし也、又あまりにいよ〳〵なと云よし也、下の心、一たひ過たる物を其にまかせすして執気をとゝむるのいさめなり

48ちりぬとも香をたにのこせ　　読人不知

義なし、思いてと云へし、恋しき時は花の事也

49ことしより春しり初る　　貫之

人の家にうへたると云其心あり、王昇宝殿野老謳歌、此心也、治世のすかたとそ

50山たかみ人もすさめぬ　　読人不知

心は、遠山なとの傍に人もすさめぬ花の一木なとあるは花の心もさそと思心を、われみはやさんとなくさむるよし也、いたくなわひそ、如此の心、哥道の命也、左注又は里とをみとあり、山たかみは、大やうにしてしかも里とをき心を持也、里とをみといひても山たかみをはもてとも、少くはしきにや

51山桜わかみにくれは

やま桜と先をける詞よろしとそ、哥をよむ人五もし

を可覚悟也、我みにくれはと云に霞のあやにくなる心あり、又述懐したる心もあり、霞をかこつよし也

52年ふれはよはひは老ぬ　　さきの一　忠仁公

詞書に心は明也、染殿后は御母なれは、母后の世のさかりを見給へは物思もなしと也、哥から古めかしくめてたきとそ

53世中にたえて桜の　　業平

あるはさくをまち、うつろひちるをしたひ歎、散はてゝおも影を忍ひなとして、春中はのとかならねはかくいへり

54石はしる滝なくもかな　　読人（ママ）是は藤丸大夫哥也

家集には、山川に花のなかるゝをみてといひて、落花の部に入り、此集にては滝をへたてたる花の心也、石はしる滝なくもかなといへる幽玄のよし、俊成卿いへるとそ、こんとはゆかんと云儀也、たゝ又来の字にいへる説あれと、みぬ人のためと云に、ゆかん可然歟

55みてのみや人にかたらん　　素性法師

のみやは也、ことからおもしろく、春の哥のさま、是にて心うへし

56見わたせは柳桜を

都そとは山の錦よりいへり、心は都をほめたる義也、そもしに可付心

57色もかもむかしのこさに（なから）　　友則

桜を立入たるにはあらす、古き哥は如此侍る也、年ふる人そとは、年ふる人のめにそ花の色もあらたまると也、弥めつる義也

58たれしかもとめて折つる　　貫之

誰かもとめて折つらんと也、誰然もと云義不用之、心は、ふかく霞こめたる山の桜を折てきたるは誰にかと、其人の志を感していへる也、此五もし御抄委

59さくら花咲にけらしも

幽玄躰又晴の哥のすかた也、山のあはひよりみなれぬ雲の立たるをみてかく思えたる也、尤可仰ゆへあ

り、詞書可請師説

60みよしの〻山へにさける　　友則

花に雪をまかふ事常にあれとも、吉野は雪の所なれはおもしろき也、山への辺もしくつろきて面白詞也

61桜はな春くはゝれる

御抄に委、猶あかれやはせぬを、やはすると心うる事不用之、やはせぬとはいかてあかるゝと也、此桜花といへるは、まへの咲にけらしもといふにはかはれり、是はよひ出して末を云心也、いかてあかれぬそとは満足させよと云心也、さてこと書に、やよひの潤月の事いへり、然は春の末に入へきを春の上に入事おほつかなし、但哥に末の春の心なし、よりて上に入、こと書を本にする事あり、大やうにいふ事もあり、弁さとるへし

62あたなりと名にこそたてれ　　読人不知

桜をはあたなる物といへと、花故にこそ稀なる人もまちつけ侍れは、あたにはあらすと也、非恋哥、花の哥也、心は伊物に同

63けふこす〈は〉あすは雪とそ　　業平

返しの心は、我けふきてあたになさぬにこそあれ、ちらは雪とはみるともけふの花とはいかゝみんと云心也、此集にては花の上斗也

64ちりぬれはこふれとしるし　　読人（ママ）

是はちりかたなる花の心也、今日おらすは明日はちりなんと思ふ心よりいへり、時分にて心うへし、花に執心の外別義なし

65折とらはおしけにもあるか

心ひとつに花を色〻に思あつかへるよし也、たをるやと思へと、おしけにもあるかとは、花の心になりて思返す也、されはいさ宿かりてと思得たる也、ぬしありておしむ花にはあらぬ也

66桜色に衣はふかく　　きのありとも

花はおしむにかひなき物なれは、何を形見にと思心也、哀なる哥也

67我宿の花み〈か〉てらに　　躬恒

花みかてらといへるに我宿へは志なき人なるへし、されはちりなん後はとはしと思心をうらみ〈ま〉ほしきを、さはいはすして、散なん後そ恋しかるへきといへるか有心也

68みる人もなき山里の　　伊勢

桜に対して此理をいひをしふる様の心也、少述懐の心あるへし、五句の外に心ある躰也、猶可吟味〻

同九日

春哥下

六十六首

69春霞たなひく山の　　読人不知

上句義なし、さてうつろふと色かはるとはおなし様なれと、色かはるはうつろふよりまへ也、其浅深あり、霞に映したるさまも何となくあるへし、花欲散なといふ心なるへきにや

70まてといふにちらてしとまる

心は、まてといふにもとまらし、されはこそ花をおもふ心もまされ、心にまかせは何か花を思ふ心もまさらんと也

71のこりなくちるそめてたき

心は明也、猶老てなからへたる世のうきより思しる心也、花のはかなきを感する理也、寿者多恥の心也

72この里に旅ねしぬへし

此里とは花のある所をいへり、ちりのまかひとはちりまかふ由也、其間の興に家路をも忘てと云也

73うつせみの世にもにたるか

花桜と云物はなし、只うつせみの世にゝたる花といはん為也、にたるかは哉也、心は明也、花桜このみよむへからすとそ

74桜花ちらはちら南　　惟高

遍昭につかはすとあれは、この人見にもきたれかしと思ふにさもあらねは、花も朋友なとのためにてこそあれ、かゝる身一にはよろつかひなしと、少述懐の御心にや、ふかく思さとるへし、俊成卿古来風躰

に、ことにかんし給へる哥也

雲林院にて　文字のまゝよむへし、但真名かな共にうとよむへきにや

承　均（此均文字、平均の均字也、可尋之）

75桜ちる花の所は

花の所とは（ママ）あるは、吉野初瀬なと云所にはあらす、いつくにても花のある所をさして云也、心は明也、花を色々に愛したるよし也

76花ちらす風のやとりは　素性

風のやとりとてはあらぬ物なれと、花さそふ風をふかくうらむる心のあまりかくいへり、心詞やすらかに、しかもめつらしき風也

77いさ桜われもちりなん　そうく

心は、我身の残生を歎心よりいへり、命なかくては、人にうきめみゆへきとは、いとはれなとする事也、されは花もさやうにや侍らんと誘ふ由也、一さかりとは誰も一度のさかりはありきと也

78ひとめ見し君もやくると　貫之

こと書、あひしれる人と侍るは朋友也、一めは一目也、かりそめにみたる人なり、心は、漸ちりかたなる花なれは、けふはかりまち心みて、その人きたらすは其時はちるとも花にうらみあらしと也

79春霞なにかくすらん

義なし、ちるまはちるをもの心也

80たれこめて春の行衛も　藤原よるか

こと書に、風にあたらしとてとかけるに心あり、花は風にちる物なれと、おれる桜の風にあたらぬもちりぬるを、世の限ののかれぬ事を思よし也、わつらふ人の心にかなひて哀ふかき也

東宮雅院　東宮の内にあり、みかわ水おなし

81枝よりもあたに散にし　菅野高世

此哥は此集はるかの後入也、集は延喜五年こと始て、同十年のころ首尾早、御門かくれ給て後此哥入也、これに付て種々の義あり、先風流なる哥也、又

崩御の後歎の切なる時此哥を思ふに、ちるもあたなる花のおちてもあわとなるを哀と思よしにや、又枝よりもと云を生にとる、淡とみるとは死の方にとる、生死ともに物にあつからすかろき心也、哥人ことにこれを可思にや、ある人の注、詞つゝまやかにしてむねひろしと云は此哥なりと云々、可吟味々

82ことならはさかすやはあらぬ　貫之

花のしつ心なくちるをみて、心をさへおさめかたきまゝにかくよめり、如此あらは、さかすしてもあらてとうらむるよし也

83さくら花とく散ぬとも

心はこと書にあらは也、其詞にこたへて、人の心そといへり、此世後世かけたる朋友夫婦もうつろふ物なれは也、詞つかひのめてたき哥也

84久かたの光のとけき　紀友則

心は、一天うら〳〵として風の音鳥の声ものとやかなる空に、花の心あはたゝしくちるをうらむる心にて、何とてしつ心なくちるらんと也、時節到来の理をおもへるよし也、此哥定家卿種々の抄に入給へる也

東宮のたちはきのちんにて　帯刀は武管(ママ)也、わきと読也、此管(ママ)は東宮ましまさぬ時はなき也

85春風は花のあたりを　好風(ヨシカセ)

よきては除て也、心つからちる物と思はゝ、風に恨もあらしと云心也

86雪とのみふるたにあるを　躬恒

心は、時いたりて花のうちもやすらはすちるを、大方にちる花のやうに、又風さへさそへは、いかにちれとかと云也、これ世上の理也、事一あれは打続よし也

87山たかみみつゝ我こし　貫之

此こと書に山たかみよくあたれり、道とをき心もあり、みつゝ我こしといふに、程をへたる心もあり、風は心にといへるに、我は心にまかせぬ心あり、返

〻えさらぬ斗なとにて、帰くる花の本を立かへり色〻におもへる心、能〻吟味すへし

一本 大伴くろぬし　一本

と侍るは、定家卿家の本には貫之哥也、他本又黒主とあれは其説すてかたくて一本とかける、黄門奥書、且任師説といへるによくかなへり

88 春雨のふるは涙か

心は、春の霖雨のつれ〳〵に花のちるをみてかく思よれり、世以花をおしむ心切なれは、其涙雨ともなりて、あまねきにやと思つゝけ侍り、哀ふかき物也

89 さくら花ちりぬる風の　貫之

なこり、浪にえんあり、空にちりまよふ花の浪に似たれはかく云也、水なき空はたゝ浪のえんに云いてたる也

90 故郷と成にしならの

ならの御門とは、文武聖武平城三皇共に申也、是は大同天子平城御哥也、平城を則ならの都とよめり、此御門は嵯峨帝御このかみにてまし〳〵〈し〉也、治世は四年也、大同四年御位をさり給へり、然に后の御いさめにて、又御治世の謀叛事ならすして奈良におはしけるに、万かはり行たるに花のみ色もかはらてさけると云は、此院の御述懐の心哀ふかし

良岑むねさた　遍昭と

も、又むねさた共いれる事あるは、男にてよめるは俗名、出家にてのは法名を書也、但又哥によりて書りともみゆ、又しからぬも侍るにや、能〻分別して見侍るへきにこそ

91 花の色は霞にこめて

遠山の花の霞に立こめられて、おほつかなきをいへり、香をたにぬすめとは、匂をなりともひそかにさそひこよと云心也、ぬすむと云詞当時は思はからふへし

92 花の木も今はほりうへし　素性

心恋にあらす、春きては花にうかるゝ人の心の、う

つろひやすき事をかへりみかなしひて、我心を思返して、今はほりうへしとこと草にいへる也、面白哥也

93春の色のいたりいたらぬ　　読(ママ)人

春は一天のこりなくたては、到不到理はあらしを、何とて花はさきさかすみゆらんと也、心は、我身の時にあはすして、花もなきを其ことゝなく歎よし也

94みわ山をしかもかくすか　　貫之

右哥は万葉に、みわ山をしかもかくすか雲たにもかくさふへしや　此哥をとれり、しかもは然也、さうもと云心、又かくもと云義もあり、如此かくすは人にしられしとする花ありて、そのためにかくすかと也、しかもと云詞は、人にしられぬ花やと云所にあたる詞也

95いさけふは春の山へに　　素性

こと書、うりんゐんのみことは常康親王也、そこへ素性まいりてよめり、暮なはなけのは、暮なはなかるへき花のかけかはと云也、かけとは花の光也、されは暮ぬとも花の光にましりてよるもみんと云義也、御抄委

96いつまてか野へに心の

限なく花に着する心を思返して、我心の師となりていさめ又打歎由也、此哥のくさりきとくの哥とそ、又云、上句は打あふきいへるを下句にてこたへたるやうの心とも

97春ことに花のさかりは　　読人不知

心は明也、ありなめとはあらんすらめとゝ云儀也

98花のことよのつねならは

花はしはしの盛なれと、毎年かはらすさけは常住なる理也、されは我昔の変しはてたるを、花のやうならはといへる也

99吹風にあつらへつくる

つくるは告る也、花の下にてしたふ心の切なるあまりに、あつらへても告る物ならはと、あらましこと

にいへる也、花を愛するあまりに、わりなき事まておもへる也

100まつ人もこぬ物ゆへに

心は、人をかならすとまつ程に、その人のために花を折つるに、其人もきたらぬ時述懐してよめる也、鶯のなきつるとは、只今なくにもあらす、又鳴へき花をと云にもあらす、たゝ鶯は花になき、花になるゝ物なれは、なきつる花をと打任ていへる也、かならすと待人のこぬ端的の心を能〻可思

101さく花はちくさなからに　藤原興風

千種なからにとは、花と云花のあたならぬはなけれと、春をうらみはてたる人もなけれは、花にまけたる理也、又花に頓したる心ふかし

102春霞色のちくさに

色のちくさは、霞の中の花の色〻にうつろひたるを、花の光のうつろひて、かくあるにやと思えたる也、此かけも光也

103霞たつ春の山へは　元方

はる〳〵と霞こめたる山より吹くる風に、花の匂きたるはいか斗の興あらんや、おもしろき哥の躰、此等に過たるはあるへからす

104同十日花みれは心さへにそ　躬恒

うつろへる花をみてとあり、心は、うつろひかたなる花に心のうはゝれて、こと更おもしろく思うかるゝ程に、漸人も見とかむ斗なりゆけは、思返して色には出しと我心をおさふるよし也、花の木もほりうへしのたくひなり

105鶯のなく野へことに　読人不知

一説、鶯の頻に鳴を聞てきてみれは、うつろふ花に風の吹けれはにやと思心と也、此義は不用、心は野遊也、されはいく野をも分つくしてみれは、うつろふ花に風そ吹けるとは、こゝに種〻おもしろき事をあつめたる也、野遊の興さかりなるよし也

106吹風をなきてうらみよ

我きてみる折ふし、花に風の吹侍るを鶯の打侘て鳴をきけは、我をうらむるやうなれは、我やは手たにふれつる、風をうらみよと、鶯に下知する心也

107ちる花の鳴にしとまる　典侍（テンシ）洽子（アマネイコ）朝臣

義なし、けにとまる習あらは涙おしむへきにはあらすかし、景気の哥也

108花のちることやわひしき　藤原後蔭（ノチカケ）

こと書、仁和中将宮す所、仁和宇多天子仁和寺に住給也、其宮す所也、父中将なれはかくいへり、哥の心は明也、但このわひしきと云、侘る心なからかなしきと云まてはなし、たゝならぬなといへる心也、鶯の鳴をかく察したる也、姿打越風情景気の哥也、かなしきなといはゝ哥の幽玄たかふへし

109木つたへはをのか羽風に　素性

我やは花にの類也、こゝらはおほき也、うらむる心也、下の心は我非（ヲ）は他にゆつる心の風也

110しるしなきねをも鳴（ミ）かな　躬恒

義なし、猶鶯のといへるの文字幽也、上句世を観してみるへし

111駒なへていさみにゆかん　読人不知

御抄に委、故郷といへるよく叶へり、みる人もなき花の雪とのみこそ徒にちるらめと思やる心哀ふかし

112ちる花を何かうらみん

此ちる花をといふをやかてさやうに思へは事あさきにや、花をしたふ時は、はかなくとまらん物のやうに惜きたるに、打ちれは、風をも花をもうらみあまりて、其時よしやと思侘て、ちる花を何かうらみん世中と云やうに心をみ侍へき也、下句は明也

113花の色はうつりにけりな　小野小町

花さかは木の本にも立なれくらさんなと思きつるに、世上の事に何となく打紛て過るまゝ、剰霖雨さへして、其有増もむなしき由也、又小町身上を花によそへて、我身世にふるなかめせしまにとは、さても世にふるはとやかくや〈と〉物おもふ習なるを、こと

に好色の人なれは、世をも人をも恨かちにて、打詠てあけくるゝまに、おとろへかはる事を歎おとろく心也、此義小町にかきるへからす、霖雨は羽林(為氏)説也

114おしと思心はいとに　　素性

此こと書まへにもあり、同時にや、心は、あまりに花に着してかくわりなき事をさへ思よれる也、素性か哥にはみる所侍るへきと也、哥人のうちにも其人〳〵の様をならひしるへし

115梓弓はるの山へを　　貫之

大かたの花も盛すき行ころ、この山こえにて、女なとのおほくあへるを花にそへていへり、道もさりあへぬは心のうつろひ迷よし也

116春の野にわかなつまんと

わかな摘にとこし時は、雪を分てそことなきみちをまとひこしに、いまは又ちりかふ花の雪にまとふよし也、心は、たゝ光陰の程なさをおとろきいへる也

117やとりして春の山へに

花のちる比の山ちの旅ねにはさも侍へき事にこそ、めつらしき作意なるへし

118吹かせと谷の水とし

水も風も花の為よからぬ物なり、しかるに、山ふかくちりし花の行衛をこの風水にてみれは、思返してうらみを忘たるよし也、世上の義にも此理侍にや、又の説こまやかなる躰也

119よそにみてかへらん人に

しかより帰ける女共花山に入て　をんなとよむ、花山は山科にあり、此女共遍昭のしれる人にや

心は明也、枝はおるともは縦口舌なとはいてくるとも云義也、法師の所なれは也、遍昭は常にされたる哥侍るにや

120我宿にさける藤花(なみ)　　躬恒

こと書より心を付てみるへし、我宿にさけると云より、日ころはさもなき人の此花の時には過かてにみるよし也、又云、まへわたりなとする人の此花の本

を立よりてもみす、よそなからみて過るを、我宿からにやと少述懐の心也

121いまもかも咲にほふらん　　読人不知

もとみしを思ひ出るよし也、今もかもはいまか也、もは例のそへ字也、猿丸か哥也、顕昭は小嶋のくまといへり、心は明也

122春雨にゝほへる色も

すこしうつろふ山吹の、春雨にゆら〳〵とみえたる色のおもしろきか、香さへあかぬよし也、作者同

123山吹はあやなゝさきそ

心は、欵冬なとうへたる家あるしの物へ行たるか、漸かへるへき所にてよめる也、こよひと云字きふくはみるへからす、あるは夕暮、又はけふなといへるやうの心にや、あやなは益なきなと云心也　　貫之

124よしの河きしの山吹

心は明也、上うつろへは下の影ものこらぬ眼前のさま也

125蛙なく井ての山ふき

蛙鳴井ては枕詞也、但此五文字には少心あり、花のうつろひはてゝ後にみたる人よめる也

左注此哥は橘の清友か　左注は神詠又至て貴人なと也、此哥も貴人の心也

126おもふとち春の山へに　　素性

御抄、猶春の哥とてといへるによく叶へり、おもふ友なといさなひて、いつくにてもあれ行を、限の花の本に所もさためぬ旅ねも興あるへし、してしかはかな也、願の心也

127あつさ弓春たちしより　　躬恒

こと書に春のとく過る事をとあれは、三月尽の心にや、然共哥は大やうによめる也、心は正月一日より春の過るかはやき義也、年月と大やうにいへる肝心也、月日と云へきをかくいへる也、此哥はかならす春の哥ともみえ侍らす、こと書によれる也、又立そめし春の程なきより一とせの末をも思よし也、又

云、三月一月にて年中を思と云説もあり

128なきとむる花しなければ　　貫之

心は、鶯の落花をかなしめと、惜とゝめたる花も侍らねはかくいへり、物うくとは次第に末よわになるやうの義也、うしと云心には差別あるへし、又説不如閉口送残春の心也

129花ちれる水のまに〳〵

心は、やよひの末つかた山路を行に、いつくともなき花のたえ〳〵なかれくるか、梢は青葉のみしておもしろき比也、あなかち花を尋ぬるにはあらて、山水のあたりなと行に、みる〳〵流こし花も次第にみえねは、山には春もなく成たると云、三月のつこもりによくあひたり、つこもりかたの方の字幽也

130おしめともとゝまらなくに　　元方

此春霞常には聊かはれり、春のかへるにしたかひて霞も立とまらぬよし也、其をかくかへる道にし立ぬとおもへはといへる也、結句におもへはと云とちめたる心あり、とまらぬ物と思ひなからも、かへるとおもへはしたひうらむる心侍ると也

131こゑたえすなけや鶯　　興風

心は、年中に二たひともくる春かは、春のうちをたに声絶すなけと云也

やよひのつこもりの日、花つみよりかへる女ともをみてよめる

花つみとはもとめ愛するを云也、又むかしは春中にたかき人なと野にいてゝ、花の色〳〵をつみ手向をして、無縁の霊を訪給事ありき、其をみるとて女のいてゝかへるをみてよめるともいへり、此事京極黄門の〈本に〉自筆の本にて被書付本直之此心（右本細川殿在之了）

132とゝむへき物とはなしに

心は、女とものかへるをちる花毎にといへり、心のうつるを思返したる所に哀ふかう侍るにや、心かのか文字はかな也

133ぬれつゝそしゐて折つる　　業平

こと書、雨のうちに藤をおるとてといへるを、哥には其理をいはすして、しゐて折つるとは切なる心也、春の物をは春愛してこそはへも侍らめ、又春はいくかもと、既今日なるをきふくいはぬ所哥人の心也、ぬれつゝといへるは、花をも人をも賞したる心あり、哀ふかう哥からゆうなるとそ

134 けふのみと春を思はぬ　躬恒

花をしたふ心のいつとなき中にも、けふのみと思花のかけは、こと〈に〉立かへりかたき心也、長高く哀ふかゝるへき哥也

夏　哥　卅四首

135 同十一日 わか宿の池の藤なみ　読人不知

藤の花さきたれは、郭公をも聞そへまほしき心にて待にはあらす、たゝ夏かけて藤もさきぬれは、時鳥も漸なかんと思心にて、いつかとまつよし也、春過夏きぬる程の光陰の程なきを思へる也、猶いはゝ春の花色〳〵咲つくして、又郭公もやかてきたりてそなかんと観する所、人丸の哥也、すかた心深遠の哥也、尤可仰とそ

136 あはれてふことをあまたに　紀利貞

此哀は愛する也、大かた花のたくひある時よりも、夏にかゝりて一本さきのこりたる興も一入なれは、又なく愛せられんとにやと、花に心を付てかく思あつかふ也、ひとりさくらん桜を立入たるにはあらす、此類おほし

137 さ月まつ山ほとゝきす　読人しらす

打はふきとは、なかんとて羽をひらくやうにするを云也、又あまねき心とも、五月まつは卯月の比也、なんは下知也、ことしはいまたこゑをもきかねはやなけと云義也

138 さ月こは鳴もふりなん　伊勢

鳴もふりなんとは、あまねからぬさきにと云也、只初ねを急く心也

139五月まつ花橘の　　読人しらす

卯月よりさ月を待にはあらす、さ月まつ橘とはいひならはしたり、昔の人の袖の香といふに、橘を蓬萊に尋し事をいへる説不用之、昔の人なと思ふ折ふし橘にふれてかくよめる也、物語には心かはるへし

140いつのまにさ月きぬらん

郭公の両三声あらたに鳴たるをきゝて、月日のとりあへぬをおとろきおもふよし也

141けさきなきいまた旅なる

始て郭公をきゝてかく思よれる也、花橘にやとはかれとは、やすらはせまほしき心、又一入興あらん心のねかひ也

142音羽山けさこえくれは　　友則

今朝こえくれはとは、かねてもこえたる山なれと、時鳥の待こしか、梢はるかにほの〳〵と鳴を聞ておとろきいへる也、景気にのそむ所尤うるはしく、余情かきりなき者也

143ほとゝきす初声をきけは　　素性

此哥は首夏の哥也、夏部は哥数なきによりて、次第をたかへる所あり、郭公を初て聞て、朋友なと誰となく、おなしくはもろ共にきかはやなと思へるよし也、此内におもへは、これもはかなきと云心余情也、はたは将にと云義也、但大やうに心うへし

ならのいそのかみ寺にて　奈良の内いそのかみ寺ありと云は不用之、石上はならちかき所なれはかく書り

144石上ふるき都の

故郷の万かはりたる義也、心は明也、古き都はならの都也

145夏山になく郭公　　読人しらす

物おもふ折ふし、声をきけは、いとゝ思のそふ心ちすれはかくいへり、妻を思心ふかき鳥なれはさも有ぬへし

146郭公なく声きけは

昔蜀州忙帝（バフテイ）と云人、旅行にて逝去す、其亡魂此鳥と

成といへり、又不如帰の心もあり、かた〳〵故郷を思便あるへし

147時鳥なかなく里の

御抄委、汝かなく里のおほけれは思へともうとまるゝと也、非恋哥

148思ひ出る常磐の山の

から紅のとは、ふり出てといはん枕詞、又は初声のあらたに色をそへたる心也、我おもふ人を思出たるおりしも、時鳥のふりいてゝなくこゑ、一しほ〳〵思もまさるよし也、紅のふりいての事、御抄にも不用之由みゆ、如何

149こゑはして涙はみえぬ

我は鳴ねにはたてねと袖の涙はしけゝれは、郭公にもゆつりやすると思心よりかくいへり

150足引の山ほとゝきす

おりはへ打はへおなし事也、我思の人にまさる事を時鳥にゆつりていへる也、又郭公の我はかりは誰かなかんと云やうに鳴心也、恋の哥ともいふへし

151いま更に山へかへるな

此五もし常のやうにいへはたかふ也、今と切て更にと可心得とそ、但大やうにいひてあるへし、山への(ママ)こゑもしもおもはしからす、心は明也

みくにのまち　此作者惟高の母と云義不用之、紀氏の中に三国氏とてありし其人の女房に此女なりてみくにの町といへるとそ、又昔は一条より北に三国の町とてありし、其を名乗ともいへり

152やよやまて山郭公

御抄委、心は、あるはおや、あるはつまなとにをくれて歎宿に、時鳥の鳴たるをかくよめり、やよやとは物をよふやうの心也、冥途の鳥なれは、なき人のかたへことつてんと也、哀ふかし、御抄には此五もしやゝしはしなとあり

153五月雨に物思をれは

とものり

物思人はいつとてもかきくらす心ちするに、五月雨の空はいとゝ袖も一にうちもねぬ空の我物思の行衛もなきに、郭公の夜ふかう打なきてすき行を、いつちにかとうらやむ心也、余情かきりなき物なり

154 夜やくらき道やまとへる　　大江千里（行平卿兄也、大江氏に養れたるなり）

心は、五月やみの比、郭公の過かてに鳴を、夜のくらき〈に〉よりてや、又行かたの道をまとへるにや、さらすはかうわか宿なとを過かてにはせしとすこし述懐の心也

155 やとりせし花橘も　　紀貫之

かれなくにとは、いまたその橘もかはらぬにと云義、心は明也

156 夏の夜のふすかとすれは　　壬生只岑

これは夏の夜をせんにしてよめるとそ、又郭公にとんしてたゝ一こゑに明けるよと云也

157 くるゝかとみれは明ぬる　　躬恒

これも夏の夜のさま也、郭公のしきりに鳴を聞てよめり

158 夏山に恋しき人や　　秋岑

時鳥の恋しき人也、打頻なくをかく執なし侍る也

159 こその夏鳴ふるしてし　　読人しらす

声はこその物なからめつらしく、きく心あらたなれは、それかあらぬかと云也

160 五月雨の空もとゝろに　　貫之

空もとゝろはうこく斗にと云心也、よたゝは夜さはき鳴也、御抄の説也、又云、夜つきなくなと云心也、一声二声なとにはあらす、けたゝましう鳴よし也、何をうしとかとは、物思ふ物は如此なりけりと云心也、我物思ふあまりの心なるへし

さふらひにてをのことも　殿上の事也、おのこは殿上人也

161 郭公こゑもきこえす　　躬恒

こゝになかすとも外のなくねにもこたへぬ事あらしと読り、これは勅には心なき物もしたかはさらめや

はと云義也、こと書にて思わきまふへし、さて時鳥まつ哥と侍れははしに入へけれと、哥はさもあらねはおくに入なるへし、惣而夏部は次第たしかにみえぬ物也

162時鳥人まつ山に　貫之

頻になくを聞て、郭公も人をまつやとさつしていへる也、されは我も打つけにもよほさるゝ思のまさるよし也

163むかしへや今も恋しき　忠岑

昔へやのへ文字、御抄にはやすめ字と侍る也、但むかしなとやと云やうの心也、故郷にしもと云所こと書に引合て可付心也

164郭公われとはなしに　躬恒

我とはなしにとは我と共にはなにしにと云義也、心は、独物おもふもかなしきに、郭公さへなけはいとゝうき世の思も切なる由也、卯花のうき世中とつゝくるは、うの字かさなる義也、卯花にしゐて用はなし、されは此哥奥に入也、又説我こそあらめ時鳥は何ゆへにと云心也、いつれもよろしけれと此説可付

165蓮葉のにこりにしまぬ　遍昭

泥中にありなから濁ぬ物なれは云也、人の心の正意はさらにこらぬを、種々の悪念にひかれてにこりはてたり、されははかなき蓮の露をのみ玉とみる心を思返して云也、あさむくとは愛するよし也

166夏の夜はまたよひなから　深養父

短夜のさまをよくいひ立たり、またよひに明たる様なれは、月は半天にもあらんかとみるに、月さへのこらねは、雲のいつこにといへり、たゝ月にあかぬよし也、こと書にてみゆ、清き様の躰也

167ちりをたにすへしとそ思　躬恒

すゆるは居の字也、塵をたにすへしとは大切なる心也、いもと我ぬへき床とはきらひ道也、たゝいもと我ぬる床と云迄也

168夏と秋と行かふ空の

行かふとは行ちかふ也、かたへすゝしきとは、夏の暑気秋の早涼行あふ所、片方涼しき也、半と云儀也、下の心は善悪の行かふ心也、秋の涼しき気をは善にとる、庭の暑気をは悪にとる、人の善悪相分て半ならんをは悪〈ヰ〉にとるへし、悪は少けれ共物を破る物也、暑気も秋に猶のこりて人をくるしむる物なれは、同等の善悪は猶悪を恐るへき教也

秋哥上

八十首

169 烋きぬとめにはさやかに　　藤原敏行朝臣

昨日まて夏の天をくるしみ思へるに、いつしか早涼いたりて、心も驚かれぬる時の景気を思へし、さやかは清の字也

170 河風の涼しくもあるか　　貫之

こと書、河せうえう、心は義なし、あるかはかな也、文字につよくあたるへからす、惣而貫之哥はとゝこほる所なく、しかも晴の物也

171 我せこか衣のすそを

上句は序也、うらめつらしきは何となく珍しき也、序なから我せこかなといへる、なつかしき心あり

172 きのふこそ早苗とりしか

時のうつる所の程なきをいひたてたる也、万に過る物ときたる物は如此也、昨日かも植し田の既秋風吹立て、打そよく景気おもふへし

173 秋風の吹にし日より

七夕後朝よりまたぬ心はなけれと、猶秋風の吹にし日より切に思心也、たゝぬ日はなしとは、打たゝぬ日はなきと也、七夕に成てよめる也

174 久方の天河原の

義なし、二星の別切なるへきを思やりてよめる也

175 天河もみちをはしに

秋毎の通路なれはかくいへり、紅葉の橋とてはなし、始而よみ出る也、かよふ浮木にといへるもこれもをとりて也

176恋〳〵てあふ夜は

恋〳〵てと云に明すもあらなんよく叶へり、二の句又面白也

177天川あさせしら浪　友則

年に一たひわたる河なれはあさ瀬をもしらぬといへり、わたりはてねはとはあはてかへるにはあらす、たゝあふともおほえぬほとの心也

178契けん心そつらき　藤原興風

一夜のあかぬ心より立かへりかくいへる也、か様の哥大かたにみれは其感なし、心を付て吟味すへし

179年ことにあふとはすれと　凡河内躬恒

義なし、たゝ思入て打歎たる心也

180七夕にかしつるいとの

左糸右糸七筋つゝ手向る也、朗詠にも、竹棹頭上願糸多なと作り、年の緒とは心緒なと云に同、一とせのみならす、連続して恋やわたらんと打歎よし也

181こよひこん人にはあはし　素性

今夜かならす人に約したるにはあらす、二星の契のはかなきを思心より、惣別のあらまし事にいへり

182今はとてわかるゝ時は　宗于

ひちぬるとは七夕の袖也、水には袖のぬるゝ物なれは、わたらぬさきにといへり、切なる心也

183けふよりは今こん年の　忠みね

八日の哥にて心は明也、いつしかはいつかと也、只待かたの切なる心也

184木のまよりもりくる月の　読人しらす

このまの月のみえかくれ、心つくしなるより、此秋の色〳〵の思をかねたる也

185大かたの秋くるからに

此哥は、物思人の秋きて万おもひつゝけてよめるにや、心は、法界の秋は天然に来れ共、我身に生得のかなしき理あれは、何となく来る秋もたゝならぬ由也、か様の哥よみあけん時はおもくよむへしとそ、然は心もふかく、聞には余情も猶きこゆる也とそ、

雖非此哥之義、秋者不到貴人意トモイヘリ

186 我ためにくる秋にしも

我をうかれとくる秋にはあらねと、万我身のかなしみとなるよし也

187 物ことに炁そかなしき

此哥は、紅葉の所なと可入を初秋に入る事、例の貫之の心ある也、大かた身の上をも限あるものとは思へと、眼前にあたりて、しけみなとの梢の秋来て、かつ〳〵色かはるなと物の哀もふかきをみて、万かきりある事のおとろかるゝ心也、余情限なし

188 ひとりぬる床は草葉に

よひと云は長からん夜の程を思やる心もありて、哀あさからすこそ

189 いつはとは時はわかねと

いつはのは文字はそへ字也、限なりけるとは思の済際と云義也、定家卿これを執て、いつはとはわかぬ常磐の山人もと読り

190 かく斗おしと思ふ夜を　　躬恒

こと書、かんなりのつほとは五舎の内也、つゐてにとは人〻のよみける其次にと云義也、心は、秋の夜おしむと侍らは月風露の哀をこそ云へきに、さやうにもとり出すして、かく斗おしと思ふと云内に、万の哀こもりて、余情限なきもの也

191 白雲にはねうちかはし　　読人不知

御抄、数さへかけさへ両説なれ共、猶数さへにてこそ、名明月の清光もあらたならめ、しら雲とは、空の心、とをく鳴よし也、余情かきりなき者也、位ある哥といへり

192 さ夜中と夜は深ぬらし

此哥は古躰にしてしかも幽玄の姿也、さ夜中と夜もはや深ぬらんと打なかめたる折ふし、鴈打なきて、月は漸西の空に行様の心也、折節をよく可思、長高く余情ある哥也

193 月みれは千〻に物こそ　　大江千里

月は陰の気なる故に、ひとり月をみれは、千々に物のかなしみもうかふ時は、我身ひとつの心ちする事をいはんとて、我身一にはあらねとゝいへり、以此哥、鴨長明、詠れは千々に物思といへり、よく吟味して其感を可思

194 久方の月の桂も　　忠岑

月の桂の紅葉する事はなけれと、秋の夜は清光のことなれはかくいひなせり、紅葉を橋にといへるたくひなり

195 秋のよの月の光し　　元方

あらは也

196 きり〳〵すいたくなきそ　　藤原たゝふさ

こと書に、人のもとへまかりてとあり、我所ならぬ旅ねなれは、夜もなかうおほえたる由也、又人にあひそめたる夜、きり〳〵すを聞て、行末のなかき思となるへき事をいへるなり

197 秋の夜のあくるもしらす　　敏行

我物思の切なるより虫の哀をことはるよし也

198 秋はきも色付ぬれは　　読人不知

萩の色付と云は、世上の秋の漸ふかくなる比也、我ねぬとはいねかてなるよし也、我心より虫を思はかる義也

199 烋の夜は露こそことに

露はいつもをく物なから、猶夜はことに虫の思となるへき理也

200 君しのふ草にやつるゝ

一二の句ことに感あり、人まつ宿の荒たるに、松と云虫さへ鳴侍らんは、いかはかりのかなしみなるへくや、哥さま哀ふかし

201 秋の野に道もまとひぬ

旅の心にはあらす、只野遊也、されは松虫のねに宿をからんといへるも優也、道もまとひぬは興に乗したる心也

202 秋の野に人まつむしの

松と云虫のいたくなけは、我にやととふらはんと云心也、又松虫と云はんにかくいへり（名（朱））

203もみちはのちりてつもれる

秋もくれ紅葉もちりはてゝ、埋はてたる宿に松虫のなくを、誰とふ人もあるましき物をと述懐の心也、又我こそあれ、松虫は誰をか待らん共云也、又松虫はたのむ人もあるにやと也

204ひくらしの鳴つるなへに

なへにとはからにの心也、ひくらしのなくゆへに日の暮けるよとおもへは、山のかけゆへなるよと、我山かけの栖のことはりを思えたる所哀也

205ひくらしのなく山里の

優にしてしかも理明也、日晩は山里の匂也、此二首猿丸か哥也

206まつ人にあらぬ物から　　元方

此まつ人は我つまなとにはあらす、大やうに心うへし、待人なとの様に、初鴈のめつらしき也

207秋風にはつ鴈かねそ　　友則

初と云字肝心也、心は、中秋の比秋風そよ〳〵と吹立たるに、はつ鴈かねのかり〳〵と鳴てきたる、端的鴈には文を付る事あれは、たか玉つさをといへることのは及ふへきならす、たゝいく度も吟味して、其心をうへきなり

208わか門にいなおほせ鳥の　　よみ人しらす

御抄に云、時の景気秋風すゝしくなり行ころ、庭たゝきのなれきたりて、おとろへ行秋草の中におりゐて、色もこゑもめつらしくなく比、はつ鴈の空にきこゆる当時ある事なれは、人の門庭なとになれこぬ鳥をとをくもとめいたさて、めのまへなる事につき侍らんと思給ふる也、いはまほしからん人は、鸞とも鳳ともいはゝいへ、しるへからすこそと侍れは、此説尤珍重なりとそ、これ又三鳥の一也

209いとはやもなきぬる鴈か

最はやう也、鴈かはかな也、色とるは染はしむるや

うの心也

210春霞かすみていにし

霞のうちにそこともなく立別し鴈のうらめしかりつるに、たゝいまめつらしくきゝ初て、過しうらみを忘るゝ心也、眼前の躰也

211夜をさむみ衣かりかね

時節相応の景気なり

212秋風に声をほにあけて　藤原菅根朝臣

声をほにあけてはあらはるゝ也、心は、くもりなき空にとをう飛鴈のこゑのさやかなる景気也、鳥を舟に舟を鳥にたとふる事常也

213うき事を思つらねて

鴈のつらぬるにはあらす、よる〳〵の秋のね覚に鴈の声をきゝて、こしかた行末を思つゝけて、愁にたへす打なくさま也、なすらへ哥の心也

214山さとは秋こそことに　忠岑

山家は四時ともに哀なる物なから、秋ふかう成行て夜〳〵のしかのねにね覚かちなる比、秋こそことにわひしけれとくときたてたる哥也、わひしきとは、一事をさゝす執あつめ心ほそきさま也

215奥山に紅葉ふみ分　読人不知

外山のもみちなと散過ては、鹿も山ふかくこもる物也、深山の紅葉さへちりはつるをふみ分て、鹿の物かなしく打なく比の秋、ことにかなしき心也、何事も物のきはまるを歎よし也、此声をきく人に限へからす、又立田山梢まはらにと云、野分せしをのゝ草ふしと云、毎首共此哥をとれり、猿丸哥也

216秋萩にうらひれをれは

うらひれとは、なつみ物おもふかたち也、心は、秋ふかくなる比、萩花うつろひはて、下葉も色かはりしほれたるを、詠わひたる折ふしの物かなしきに、麀(鹿)の打しきりなくを理にも鳴よとおもひやるさま也、猶うらひれとは、すくよかになく愁たる様也、しなへ、うらふれなと同事也、又かゝる折ふし、鹿

のなくをうらむる心も侍る也、なにしに鳴そと也

217秋はきをしからみふせて

しからみふせてとは、鹿のをのか身にまとひなとするやうのさまなれと、此義はえんならす、たゝ秋萩にふれたる心也、心は、はるけき野への萩の盛にましりてなく鹿をきく様也、音のさやけさも鳴ね也、又云、しからみふせては領しなくよしとそ、又の説、さやけさはひやゝかなる躰也

218秋萩の花さきにけり　藤原敏行

此高砂非名所、山の惣名也、心は、こゝの萩をみて思やる義也

219秋萩の古枝にさける　躬恒

心はこと書にて明也、猶めつらしきにも昔の恋しき心也

220あき萩の下葉色つく　読人不知

かゝる折ふし、我身只ひとりいねかてにして、物おもふまゝに人のうへまてをしはかる也、たゝ時節のかん也

221鳴わたる鴈の涙や

わか物思おりしも、萩の上の露を打なかむるに、時しも鴈のなきわたるをきけは、いとゝかなしみそひて、大かたの露ともみえ侍らねは、鴈の涙やと心をのふる也、景気の哥也

222萩の露玉にぬかんと

萩の露を色〻愛したるさま也、枝なからみよといたはり給へ(ママ)へる所、王道も侍る也、左注奈良御門は聖武也

223折てみはおちそしぬへき

たはゝ、とをゝいつれもなひく也、猶たはゝに可付、此集の習に書は本に書たるを可用、心は、手折てやみんとおもふ心より、立返露のおちぬへき所をいたはり思也、余情かきりなき物也

224萩か花ちるらんをのゝ

心は、秋深かたの萩花漸うつろひ行比、かゝる折ふ

しを尋みんこそ、花の心にも思しるへけれと也、又云、思へき方へもかゝる折にこそゆかめ、さらは人も哀と可思之義也、行さきは夜も深るともかゝる折しもはと云心也、まへの説は直被仰事、次のは御注也

225 秋の野にをく白露は　文屋あさやす

義なし、眼前のさま也

226 名にめてゝおれるはかりそ

序の小注に、馬よりおちてと云にも心あり、こゝにては題しらすといへるめてたし、心は、女郎花といへとおちたる由也、恋のかたにいひなせる心おもしろし

227 をみなへしうしとみつゝそ　布留今道

こと書に、遍昭かもとへならへまかりけると云に心あり、遍昭は既世をのかれたる人のかたへ行は、我心にも其奇縁を思に、女郎花の此男山にたてるをうしとみる心也、詞書のよくあたるもあり、又大かたにかけるもあり、春部、春くはゝれると云哥なとは不相当也

228 秋の野にやとりはすへし　敏行

上は明也、旅ならなくにとは、さす所もなき野遊なれは也

229 をみなへしおほかる野へに　小野美樹

義なし、あやなくはせんもなく也、又あちきなくの心もあり

230 女郎花秋の野風に　左のおほいまうちきみ本院贈太政大臣

よく打なひきたるを心もをかてと云よし也、又云、心をひとつにしてよくなひくらん、其人誰にかと云義也、又うらなく打なひきてともいへり

231 秋ならてあふ事かたき　藤原定方朝臣

七月にかならすさけは、天河原に生ぬ物ゆへ、秋ならてはあふことなきと也

232 たか秋にあらぬ物ゆへ　貫之

女郎花の我秋にてこそあれと云也、我と色に出、又

我とうつろふ理を、誰にうらむるそと也、飽歟(上欄朱)飽心は少もなし、下心、我心よりおこるわさはひを以、人をうらむる様の教也、又云、女郎花にかはり読とも

233つまこふる鹿そ鳴なる　　躬恒

女郎花のある野にしかの鳴をきゝて、それを我つまになくさめかしとよめる也、みつねか哥は常にかくたくみなる物也

234をみなへし吹すきてくる

義なし、端的の心とみるへし、なつかしき所あり

235人のみることやくるしき　　忠岑

霧にこもれる女郎花の、かつはみえ、かつはかくれなとするさまの、あたにのみみゆれは、よそのみるめを忍ふにやとおしはかる由也

236ひとりのみなかむるよりは

我身やもめにてなかむるよりは也、又云、秋の野風に独なかめんより、荒たる宿のすさましけなりとも、うつしうへてやなくさめましと、をみなへしをおもへるさま也、又我ひとりなかめ侘るころ、花の心もかくこそとおもふよし也

237をみなへしうしろめたくも　　兼覧王

荒たる宿の人もなきに、女郎花の独たてるを心もとなしとみる也、又男なとひとりある宿にや

蔵人所　此管(ママ)職の人座する所也

238花にあかて何かへるらん　　平定文(ママ)儒者也

定文は好色の人也、されは女郎花と云にあかぬ心あるへし、さてこと書、蔵人所のおのこともとかけるに心あり、ねなましと思へと、世につかへ、人にしたかひて、心にまかせぬ身なれは、打歎心也、是詞書の叶(に)理也

239何人(清々)かきてぬきかけし

匂のふかきをいはんとて、いかなる人の移香にかといへり

240やとりせし人のかたみか　　貫之

御注、思人のありける所に立より侍しことを思て読

る也とあり、又こと書に、蘭をよみて人にとあり、貫之宿なとへ人のきて立かへりたるにつかはしけるにや、されは大かたの匂にはあらねは、花の心にも忘られかたき匂と也、其人を賞する心又尤珍重にや

241 ぬししらぬ香こそにほへれ　　そせい

何人かといへる哥のおなし心也

242 いまよりはうへてたに見し　　平定文

これも作者の好色よりいへり、大かた野への薄のほに出る比、萩の思も一かたならすかなしけれは、うへてたにみしと、薄にとかをおほせたる所あたらしき作意なり

243 秋の野の草の袂か　　ありはらのむねやな

秋風に打なひきたるお花の袖してまねくやうなれは、草のたもとゝはこれにやといふよし也

244 我のみや哀とおもはん　　素性

さひしく面白哥也、あるは山かけなとの閑居に、撫子の物はかなうさけるを、蛬(鹿朱)の打鳴たる夕暮なと見侍て、又人もなきやとりなれは我のみやといへり、又云、我のみやは誰もこそと云義也

245 みとりなるひとつ草とそ　　読人しらす

此哥には年中の心あり、春は緑にみし草の、秋又色〻にうつろへるさま、尤面白くこそ、下心、彼葦かいの心あり、一気きさしゝより、境にふれてさかへおとろふる道ある也、以之人間生死のたゝすまひを可思の理也

246 百草の花のひもとく

秋の野の盛に思ひたはれんとはたはふれん也、たつさはる義也、かゝる折ふし、あこかるゝ心を理と人〻おもへといへる也

247 月草に衣はすらむ

艶にやさしきさま也、哥人はかくあるへき事とそ、万葉に人丸か哥〈の〉よしあり、可尋之

仁和御門ふるのたき　みこにおはしませは御幸なともたやすき也

248里はあれて人はふりにし

心はこと書にてあらは也、里は荒てとは、はかなき宿の述懐也、人は古にしは、遍昭母の事をいへり、こまやかなる哥の躰也

秋哥下

六十五首

249吹からに秋の草木の　　文屋やすひて

右哥は序にも野への草木とあり、家集にもさやうにあれと、貫之此秋部に入る時、秋の草木とかけりとそ、心は、野への草木は山風ちかくてしほれやすし、秋の草木は朝夕風のはけしき比なれは同、むへとはことはりにもと〈云〉義也、非文字心也、あらき心也

250草も木も色かはれとも

秋は草木共にかはる物なれと、浪の花は不審なる所を賞していへり、興あるさま也、又説、康秀ある人のもとへ行たれは、其人気色あしけなれは帰しに、大内の大磐所（ママ）へいりたれは、人（女房也）のさまゆう〳〵として侍るをみて、大海は如此ある物なりと思てよめりと家集にあり、但哥合にはいかゝと思へと、かくよめるを哥合に出しけるにや、此説さる事なれはしるし侍る也、心はさしむきたる理也

251もみちせぬ常磐の山に　　紀淑望

義也（なし）、此哥は勿論のやうに云人あれと、いひのこしたる所あり、彼山里人なとは、風のをとにや秋の盛をは聞侍るらんと也

252霧たちて鴈そ鳴なる　　読人不知

心風情共に明也、紅葉しぬらんと云所少よはき由いへり、惣哥はうるはしき躰也

253神無月時雨もいまた

時雨といはんため神無月といへり、時雨は秋もあれと専とする時をいへり、心は時雨をもまたすしてと云義也、神なひの杜、和州にも又山崎のわたりにもあり、何にても心は明也、下の心、行末の事をはか

りて可身退の教也、時雨を行末の凶事にとる也

254ちはやふる神なひ山の

五もしは枕詞はかり也、是は和州也、思はかけしとは、心の物に着するを思返す義也、又うつくしき物もつゐにうつろふ習あれはと云心也、観する義也

貞観御時　清和也　綾綺殿

255おなし枝をわきて木葉の　藤原かちをん

こと書に心は明也、猶西より秋のくるとは誰もしる事なれと、さしあたりてにしのかたの紅葉はしめたる〈を〉みて領解したる也

256秋風の吹そめし〈日〉より　貫之

秋の風ほのかに吹しより、いつしかみねの梢程なく色付、おりふしの景気面白くこそ、只時節のうつるを感する義也

257しら露の色はひとつを　敏行

白色なる露の色〻に染なすを感していへる也

258秋の夜の露をは露と　忠岑

露〈は〉朝夕ともにふかき物なれと、猶よるの露はことさらなるによりていへり、されは夜のまの露に野への色もまさり行折節、鴈のなきわたりたるか、今一しほの心あれは、露をは露と置て其上に又鴈の涙やといへり、余情かきりなし

259秋の露色〳〵ことに　読人不知

ことには毎也、其物〳〵にわかちて露の心をつくす所を感してよめり、又、異にと云義もあり、かはりてをく心也

260しら露も時雨もいたく　貫之

義なし、もる山と云に付て下葉のこらすと云也

261雨ふれと露ももらしを　元方

笠と云縁にかくいへる也、執の字には心なし

262ちはやふる神のゐ垣に　貫之

あへすはたへす也、心は、神のいかきをたのむくす葉も、秋のことはりにはのかれぬ時いたる理也、世上此理あり

263雨ふれは笠とり山の

是もたゝ笠といはんため也、此笠とり山のもみちは、雨ふれは行かふ人の袖さへてると云やうにをきかへてみるへし、又此笠取一所にいらすして、くすの哥をへたてたるいかゝと云義あり、まへ二首は心をあつかひたる作也、是はたゝ時の景気を本とよめりとそ

264ちらねともかねてそおしき　　読人不知

心はみてるをかく心也、限とは色の至極と云義也

265たかためのの錦なれはか

思へき人のためにやなといへるやうの心也、りんしやくの義にはあらす、只此山の色〻なるに、立わたりたる霧をかくよみなせり、尤其興あり

266秋霧はけさはなたちそ　　読人不知

今朝はとは、只今打みる端的を感する義也、よそにてもとは、心さしのふかきあまりにいへる也、風情おもしろき哥也

267さほ山のはゝその色は　　是則

柞は天然色ふかゝらぬ物也、されと漸秋ふかくなれは、其感あさからぬを心にもちて、成にけるかなといへり、哀も風情も秋はふかくと云所にこもる也

268うへしうへは秋なき時や　　業平

此哥は二条家にいたく用る哥也、五文字は重詞也、心は、かくうふるとうへは毎秋さくへきと云心を、秋なき時やさかさらんといへり、こゝを作者の心に可思也、以之二条家の骨目とする也

269久方の雲の上にて　　敏行

左注、また殿上ゆるされさりける時とあり、されは殿上の菊をみるめのまかふよし也、あやまたれけるとは誤まかふ儀也、詞のよせ尤珍重〻

270露なから折てかさゝん　　友則

以菊よはひをのふる理をかくよめり、花をも露をも愛したる心也

271うへし時花まちとをに　　大江千里

うへし時の待とをなる心には、うつろふ秋にあはんとも思はさりしか、時節の程なくうつるよし也、以之世間をも観したるにや、此哥過去のしもし三あり、耳にたゝぬ所勘能(ママ)のしわさにや

おなし御時　まへのこと書をうけて云也、寛平の御事也

272 秋風の吹上にたてる　菅原朝臣　聖廟の御詠也

延喜御時は四位なれ共、贈位以前なれは如此書姓朝臣書也

心は、花とやみん浪とやみんと云義也、かやうの時は常の哥にかはりて時の興をよむへきとそ、此菊合の中にも一段面白所を興してかくよめり、大かたの菊とはみえぬよし也

仙宮に菊を分て　これも同菊合の時の事也

273 ぬれてほす山ちの菊の　素　性

第一より第五句に至てよろしき哥也、こと書にいへるを、仙人になして我はとも(云)、其仙人にかはりて云義也、ぬれてほすとは、そとの程に千とせをへにけるよと云義也、俊成これをうらやみて、山人のおる袖にほふとよめり

274 花みつゝ人まつ時は　友　則

白衣の佳人なとの心にはあらす、白妙の菊の花袖の色にまかふ義也、花みつゝを大やうに打なかめなとしたるやうに可心得

275 ひと本と思ひし菊を

一本菊は大沢の物也、これをかけのうつりてなと見侍らは曲なし、たゝ打みる端的の心也、仍哥の興侍る也、返〻当座の心をよく思入てみるへき也、これまて四首同菊合の時の哥也

276 秋の菊にほふかきりは　貫　之

義なし、花よりさきとしらぬといへるに、又後ともしらぬ心を持也、哀なる哥也

277 心あてにおらはやおらん　躬　恒

おらはやおらんとは重詞也、たゝあらましこと也、うつみはてたる霜にはあらす、初霜とも花ともわか

ぬをともに愛したる景気也

278 色かはる秋の菊をは　　読人しらす

菊のうつろひて一盛あるを、一草に二様の花さきけるかと思よし也、是も菊を愛したる心也

仁和寺に菊の花めしける哥　寛平へめしける也

279 秋をゝきて時こそありけれ　　平さたふん

秋をゝきてとは専にする盛の秋をゝきて也、うつろひて一盛なる所を秋の外に時こそといへり、同秋のうちにても又うつろひて盛ある所をいへり、下には仙院のいよ〳〵光ある事をそへたり、菊も其よせあり

280 さき初し宿しかはれは　　貫之

心はこと書にあらは也、人の宿よりうつしうへたる菊の、宿さへ色さへかはるよし也

281 さほ山のはゝそのもみち　　読人しらす

ちりぬへみは散ぬへき也、されは月の情ありて、よるもみよとてらすにやと、月に心をつけていへるおもしろし

282 奥山の岩かきもみち　　藤原関雄（セキオ）

岩かき紅葉を身上に比したり、心は、君恩をへたてゝ、のこれる身のいまいく程もあるましきを歎よし也、散ぬへしは死の心也

283 立田川もみちみたれて　　読人不知

此哥は文武天皇行幸の時の御哥也、此ならの御門を文武と付る事は貞応の本にかきる也、嘉録（ママ）本にはなかりしを阿仏の似せて書加也、後光厳院御時為明卿申あけし事也、良基公の御時也、哥の心は時の景気肝心也、又云、上の三句を古の字にあてゝ、末二句のさまのくはしくなるを今の字にとる、古今一部は此哥より出る習在之、上句は大やうに下句くはしき所ある、是古今の心也

284 立田川もみち葉なかる

心は、もみちのなかれ行折ふし、みむろの時雨を思やる也、もみちそめし時の時雨を思あはする心ある

也、又云、上下をいひくたさすしてならへて心うへし、此哥をも古今の字にとる習あり、打吟すれは、あちはひかきりなく、つゐに一首の首尾相応せり、此たつた河の二首は、君臣の道、此集の根源也、非師説者難計者也、又はあすか川もみち葉なかる、万葉にありとそ、そはに付たる也、不用之

285 恋しくはみても忍はん

此恋しくはとはもみちの事也、木の本の落葉を風の猶吹ちらすをみてよめるにや

286 秋風にあへすちりぬる

一説、もみちの風にたへすちるを我身に比して、風の落葉のやうに行ゑさためぬといへるはなすらへ哥也、一説、行ゑさためぬ紅葉はの句を切て、さて其よりも行ゑさためぬ我そと云義あり、是はたとへ哥也、猶木葉は秋の風にちるも落着はありぬへし、我は更におちつく所なけれは、我そかなしきとそもしにあたりていへる也とそ、風の木葉は猶たよりあるにゝたり

287 秋はきぬもみちは宿に

秋はきぬは来の字にあらす、つきぬなと云へきを上略の心也、心は、秋はくれ、もみちはちり、とふ人はなき也、このおりのかなしさを云いたさすして、心にもたせたる、尤哀ふかくや

288 ふみ分てさらにやとはん

更にやとは、始とひたる道を落葉のかくしたれは、今更にやと云也、又さらにやとは、二度の義にあらす、わさとなと云説もあり

289 秋の月山へさやかに

山への遍文字少心あり、秋暮かたのもみちのあかすちるをみよとてやと、月の情をおもへり

290 吹風の色のちくさに

山風なとのこくうすくみえたるを興して、山の木葉のちれは如此ありけりと思えたるへし

291 霜のたて露のぬきこそ　せ　き　を

もみちの錦は露霜の所作なれは也、我あかぬ紅葉のあたにちるをみて、かくいひ立たる也、をれはとは織也、色を調る儀也、折にはあらさるへし

うりんゐんの木のかけにたゝすみて　たゝすんてとよむへし

292 わひ人のわきて立よる

立よるは、身心のうきをもなくさめんと思へは也、つゐの心は情あらはとんする心もあるへきを、たのむかけなきか中〳〵力そといへるにや、只世は如此の物そと思返し身を安する心也、又云、述懐の心あり、世上の不運如此理あり、遍昭の哥にて猶面白し

293 紅葉〈は〉のなかれてとまる　素性

湊は大海の通路にて、うら〳〵の船のよる所也、后の所に世界の人の心をよせたてまつるをよそへいふ也、紅ふかきはめくみのふかきをもよそへ、又人の心さしのふかき色のあつまるをもよそへ云也、世以心さしふかけれは、めくみも又ふかき心也

294 ちはやふる神代もきかす　業平

心は、此河の景気をいひ立たる也、神代もきかぬなといへる、彼御屏風にかく哥なれは、ほめていへるなり

295 我きつるかたもしられす　敏行

ちるとまかふは、只ちりまかふ也、ともしはそへたり、くらふ山と云に付て、我きつるかたもしられすといへり

296 神なひのみむろの山を　忠岑

本文を不及引、但これも其よりおこる也、紅葉のちる当位則(ママ)妙也

297 みる人もなくてちりぬる　貫之

こと書に、紅葉おらんとてとあり、何となく紅葉のかけには、みる人も有ぬへく思へるに、さもなくて、物さひしき所をいへり、よるの錦とは物のはへなき心也、又云、我さへみすはとあはれふ心とも

298 たつた姫たむくる神の　兼覧王

立田姫とは、山神の事をいへとも、此哥はたゝ立田姫と女のうへとはかり心うへし、心は明也

299 秋の山もみちをぬさと　貫之

秋の山かぬさと手向る也、紅葉打しきりちるをかくいひなせり、ぬさは、旅行の人のする〈物〉なれは、これをみて、すむ我さへとよめる也

300 神なひの山を過ゆく　清原深養父

是は過行秋か手向る也、神なひと云に付てかくよめり

301 白浪に秋の木葉の　興風

心は、山川の岩まこゝかしこにうかへる紅葉のおもしろきを打なかめて、秋の思、身の歎も忘るはかりなるに、又山水のを〈し〉なかしてゆけは、心をなくさむたよりをうしなふ儀也、海士は舟を以世をわたる便とせり、しかるをあまの舟なかしたるは、便をうしなふへき其にたとへていへる也

302 紅葉ゝのなかれさりせは　是則

此もみちなかれすは、水の上の興をもいかてみましと、おしみつる心をなくさむる義也、是二条家の哥の心さし此哥にあり、少の所にめつらしくなる儀是也、又の説、水は常住にして色なきを、時にあたりておもしろきを感してよめりとそ

303 山川に風のかけたる　春道列樹

散つもりて水をせきたるにはあらす、吹かけ〳〵ひたつゝきちるを云也、風のしからみ珍しき詞也、しかの山こえの秋興を可思也

304 風ふけは落る紅葉ゝ　躬恒

こと書にて明也、水の清けれはちるもちらぬもと也、水辺のもみちの興をいひ立たる也

305 立とまりみてをわたらん

絵にかける人にかはりてよめり、水はまさらしとは、落葉の雨なれは也

306 山田もる秋のかり庵に　忠岑

此いなおほせとりを何鳥そなとは云へからす、田家

にゑんあるによりて也、心は、時の景気哀ふかき哥也

307 ほにも出ぬ山田をもると　　読人不知

心は、ほに出ぬ比よりもる山田の種〻にくるしみあるを哀とみる也、猿丸か哥也、家集には恋の哥也

308 かれる田におふるひつちの

述懐の心也、出身もせぬ人の、物はかなきをひつちによそへ侍り

309 もみち葉は袖にこき入て　　素性

たけかりとは、あなかちに松茸何茸なとにはあらす、たゝ秋の野遊也、秋はかきりとは、炑も暮ゆけはもみちもあらしと思人にみせんと也、暮秋の部也

310 み山より落くる水の　　興風

古き哥をとめしあれは、立田川もみち葉なかると云名哥を奉て、其心をよめり、み山より落くる水のとは、紅葉〻なかるの心也、秋の限を水上の落葉にてしるよし也、又もみち葉なかるの哥にあはする義在之、俊成はみ山より落くる水を、みむろの山に時雨ふるらしに合、定家は秋は限と云を、みむろの山のしくれに合給へりとなん、此用様浅深あるへしとそ

311 年ことにもみち葉なかるす　　貫之

年毎にといへる面白し、一年なとならは不定の理もあるへし、毎秋なかるゝをみていへり、湊とはいつくにても行とまると所(ママ)をいへり、されはそこや又秋のとまりなるらんと也

312 夕月夜をくらの山に

五もしは枕詞也、夕月夜の時分とは不可心得、只今きく麀(鹿)のねにくるゝ秋と云は不用之、こゑのうちにやとは、鳴一こゑにあくるしのゝめの類也、たゝ秋のうつる所のはやきを、秋は暮ゝらんといへり、所の興を思入て見侍へき也

313 みちしらは尋もゆかん　　躬恒

秋かぬさと手向てと也、過行秋なれはかくいへり、其道をしらは尋も行へき物をとは、秋をしたふ心の

ふかきをかくいへり

冬　哥　巻第六　四季を六巻に分るは、表六義、又表六根也　　廿九首

314 立田川にしきをりかく　　読人不知

心は、たゝ落葉の錦にゝたれは、時雨の雨をたてぬきにしてをりかけたる義也、又云、神無月の時雨の雨をたてぬきにしてといふ義也、時雨は秋よりの事なれと、当時の興にのそみて今をほむる心也、これは延喜の御哥也、延喜の御哥の風流如此とそ、貫之か哥ならは、たゝ直に神無月時雨の雨とやすらかに云へし、貫之か風流又如此、文武天皇立田川に行幸ありて、人丸と合躰してよみ給ける哥をうつしたる心也、されは文武人丸の二首を古今の古字にあて、この哥をは今の字にあつる也、此哥の心を二に云事、御門と貫之との心にあてゝ二首に用る也、仍貫之か哥別にこれなし、此哥冬の巻頭に入事、此集に秋おほく落葉の哥あり、冬の落葉に此哥よくあらはなれは也、下心、春夏秋は不定の心也、冬は物みなおさまりて実なる時也、春花さき、夏葉さかへ、秋色付は、みな不定の義也、草木落葉して根に帰るは実所の姿也、これ王道の大意也、実なる所に心をさためをけは、あたなる方へ心をやるも、みたるゝ心はなき也

315 山里は冬そさひしさ　　源宗于

山里のさひしさは四時ともにと云説あれ共、たゝ山家の秋はさひしき物なれとも、せめては虫のこゑ、木草の便にも、をのつから人めをも見侍るを、草かれ木葉ちりはてたる比は、玉さかの便もなき心也、秋を心にもちて冬そといへり

316 大空の月の光し　　読人不知

月に映して面白水のいさきよきか氷れるをかくよめり、先こほりけるとは、同水なれと、月の移たるをみし水の先こほるとみるは、思なしなるへし、その

感よりいへり

317 夕されは衣手さむし

義なし、夕されはたゝ夕暮といへる同、夕去と書は万葉書也、去の字の心はなし、但吉野の山ちかき所よりいへる心也、幽玄の哥也

318 いまよりはつきてふらなん

薄をしなみとは、あは雪のふりそめて、薄のほのかに打なひきたる興を感して、又もふれと云也、をしなみを、をしなひかしてといへは、心たかふ也

319 ふる雪はかつそけぬらし

心は明也、深山なとは、冬の雪もかつ〳〵消て、水の音まさるよし也

320 この川に紅葉〻なかる

此と云字はいつくにてもそこをさしていへり、雪けの水、まへの哥に同、さて此水岸なとこす程の水にはあらす、雪消てそろ〳〵と落る水に、かたはらの紅葉のなかるゝを云也

321 故郷はよしのゝ山し

これは吉野の故郷也、故郷といへは、しはしの雪もかきくらす心ちするに、猶此故郷はよしのゝ山ちかけれはと云心也、此所ひろき所なれは、おなしよしのゝうちにても、かくいひ分たる也、明也

322 我宿は雪ふりしきて

雪中の道はたゆる事あれと、とふ人なとある所はたえぬ理もあるを、我宿は人もとはねは、宿からこそと述懐したる也

323 雪ふれは冬こもりせる　　紀貫之

御抄、冬籠とは草木の葉落たる跡を云、これも難波津の哥より出たり、雪を花とみるよし也

324 しら雪の所もわかす　　紀秋岑

心は、うす雪なとの岩の上に村〳〵みえたるか面白きを花かとは云也、又しかの山は花の道地なれは、かく思よれりとそ、下の心、和のよく至かたき所へもいたるよし也、花は人に和の心ある也、又云、か

ならすとする事なかれといふ心にあたれりとそ

325 みよしのゝ山の白雪　坂上是則

義なし、故郷はならの京也、幽玄かきりなく余情ある哥也

326 浦ちかくふりくる雪は　藤原興風

いつくにて〈も〉浦ちかき雪の眺望也、海辺の松の雪の興を松山に思よそへたり、此哥金玉集には人丸かといへり

327 み吉野の山の白雪　壬生忠岑

大かたの所たにあるへきを、此山はことに深き所の雪さへつもりたらんを、ふみわけて入にし人はなをさりの心にてあらしとおもひしに、案のことく音信もせぬと云也、心甚深也、世のうき程の心もこもりたり、忠岑か哥は心尤ふかし

328 しら雪のふりてつもれる

我住里の雪中に、山家の雪を思やりたる景気あらは也、物ふかき山家の雪に籠ゐたらん人の心は、何事も跡なくこそおもひけち侍らめと、我心より思やる義にや

329 雪ふりて人もかよはぬ　躬恒

上の三句は、跡なき事のたとへに先云出たり、世上何事か我思こしの事の跡かあると、ひとり思ゐたるに、諸相みな跡もなけれはいよ〳〵観して、更に雪ふりて人もかよはぬ道なれやとたとへおもふ也

330 冬なから空より雪花の　深養父

ふる雪のさらに花のやうなるを、かくいひつゝくる也、雲のあなたはなといへる、幽玄にて、しかもめつらしく、面白心ある也

331 冬こもり思かけぬを　つらゆき

冬こもりは、さしこもりゐる心也、雪をひとへに花とみる心を思返して、雪そふりけるといへり、猶ふりけるよと、けるに心を付へし

332 朝ほらけ有明の月と　坂上是則

山と云へきを里といへるは、浅き雪の心也、うす

〳〵とふりたる雪の、月にまかへる其興可思、余情かきりなし、此時分眺望也

333 けぬかうへに又もふりしけ　　読人不知

義なし、春霞立なはといへるわたり優なるへし

334 梅花それともみえす

ふりうつみたる雪とみれは興なし、天きるとは、空うすくもり、きら〳〵とするやうのさま也、深雪にはあらす、うすき雪の花もいつれとなく面白を、其ともみえすといへり、哥に親句疎句あり、是は疎句の哥也

335 花の色は雪にましりて　　小野篁朝臣

白き梅なるへし、香にた〈に〉とあるへきを、をといへり、但香をなりとも匂へといへはおなし事にや

336 梅の香のふりをける雪に　　紀貫之

こと〳〵は悉也、皆の心にはあらす、くはしく分別して也、まかひせは、まかはんには也、これは梅、これは雪と、誰かわきてをるへきと也、但すみて心うると云説如何

337 雪ふれは木ことに花そ　　紀友則

木ことにを梅と云字といへるは不用之、心は明也

338 わかまたぬ年はきぬれと　　みつね

詞書に心は明也、冬草枕詞なから哥の匂とはなる也、年はきぬれとゝは、来春の年の事也、只行年也、非歳暮、幽玄の哥也

339 あら玉の年のをはりに　　もとかた

年〻如此してくらし〳〵する心哀ふかき哥也、思入て心うへし

340 雪ふりて年の暮ぬる　　読人不知

貞松顕歳寒と云心にや、つゐにもみちぬとは、こし方はかく思とちむる心なかりしを、雪ふり初て松の徳ある事をしるよし也

341 昨日といひけふとくらして　　春道つらき

人の心はたゝ千年も如此也、此哥は詞書より歳暮の哥に入侍り、心は日月のうつりゆく所の程なきよし

也

342行としのおしくもあるかな　紀つらゆき

鏡の影も過こし年〳〵次第におとろへきぬるを、又一とせもこえては、なと打歎也、常の惜きに一きわまされは也、みる所に不ひんなる心ありとそ

賀　哥　賀は祝哥也　廿二首

343我君かは千世にやちよに　読人しらす

義なし、八千代に非す、にやは、てにをは也、哥は義なし

344わたつうみの浜のまさこを

つみと書るともうみとよむへし、わたつうみは四海の惣名也、浜のまさこをかそへつゝなと、たゝ大に限なき事をいひ立んの詮也、四海心あり

345しほの山さしての磯に

塩の山さしての磯、わきていへるいかにそや、たゝいそと云詞による歟、又屏風の絵なとに合たる歟、此山に千鳥をよめる事不審のよし、上古もいへり、甲州には海はなけれと、しほの山さしての磯なといへは縁あり、心は、君を我いのる志の発するにより て、千鳥のちよ〳〵と鳴を思よそへたり、鳴は告る也、猶塩の山さしてとはさすと云義也

346我よはひ君かやちよに

八千代に執そへてとは、君臣合躰の心也、我身のよはひを君かやちよにかそへくわへんは、冥加なく、過分なれとも、思出にしかせよといふよし也、下知は我をも云也、君かやちよに執そふるとは、君かためにと云義也

347かくしつゝとにもかくにも

かくしつゝは、天子御身なから卑下の御詞也、さてかひもなけれとなからふるはかりをせんにして、たゝ君か八千世にあはゝやといへり、君とは遍昭をの給へり、一二の句誠殊勝の御詠也

348ちはやふる神やきりけん　遍昭

こと書、御をはとは〈常の〉伯母也、杖は賀の時ちとせの坂のためとてつくれる物也、此杖をつけは、則ちとせの坂をもこゆへき心ちすれは、大かたの杖にはあらし、神やきりけんと思得たる也

349 桜はなちりかひくもれ　　業平

こと書物語にくはし、心は、こんといふ道まかひやすると云心也、かにととまる、賀の哥に自然にあへるおもしろし、態かくよまんとにはあらさるへし

さたときのみこのをは　貞辰、清和第七御子、是も伯母也

350 かめのおの山の岩ねを　　きのこれをか

亀山の事也、西山にあり、一二の句は久しくうこきなき物なれは、いはひによせ侍る也、又風情もある哥也、たつよき姿とそ

351 いたつらにすくる月日は　　藤原興風

こと書にて賀部に入り、打みる所はさのみ祝言ならねと、賀の時はかならす千世万代をよまねとも是又賀也、徒に過る時は月日のとくをそきもおほえ侍らす、花みる折ふしの心あはたゝしく過る心ちすれはかくいへり、おもほえてのてもし清説あり、当流可濁

352 春くれは宿に先さく　　紀貫之

先さくとは、宿にさく花なれは、世界のをはをきて先みるとも、又梅は花の初なれはとも云、其を君かちとせのかさしとは切なる志の義也、賞翫の心もあり

353 いにしへにありきあらすは　　素性法師

ありもあらすも也、君に始んとは此君にと云義也、是も同時の哥也

354 ふしておもひおきてかそふる

心は、おきふし我祈る心の君かためなるは、神そしらせ給らんと也、家隆卿、君をそ祈る身を思ふとてといへる、此哥より出る也、此身を思ふとてといへる、末代の哥のよはき所の証拠也、其心は、身を思

ふとてといはねと、君をそ祈ると云所に、此心はこもると也

355 鶴かめもちとせの後は　　在原滋春

此賀を鶴かめにたとへんとすれは、其も千世万代と限あれは、たゝあかぬ心にまかせはてんと也、此哥左注に在原のときはるともかけり、等類の義也、されは等類を黄門のいさめ給へる此故也

356 万代を松にそ君を　　素性

まつにそとは、松待両字をかねたり、松によせて万代といはふ心に、鶴の字の心もあり、おやの賀に女のかはりてよめは、かけにすまんなといへる其心也、たゝ万代をねかふよし也

内侍のかみ（延喜の御時）、右大将藤原朝臣の四十賀しける　此右大将は高藤公（定国）の事、内侍のかみは満子也、高藤公の〈二〉女也、御門の御伯母なから御門をやしなひ奉る人也、和泉大将定国四十賀を此内侍のかみし給に、素性奉行として、仰ける屏風にかける哥也

357 かすかのにわかなつみつゝ

屏風の哥は絵に合てよめり、藤氏なれは春日野にと読り、心は明也

358 山たかみ雲井にみゆる

躬恒か哥也、心詞ともに無比類物也

359 めつらしき声ならなくに

貫之か哥也、義なし、但こゝらのとしなといへる、何となく賀の心あり、あかすもあるかなに、哀ある哥也

360 住の江の松を秋風

躬恒か哥也、此哥は秀逸の本といへり、大きやかなる風躰也、これをうらやみて、経信卿、興津風吹にけらしとよめり、是も彼卿の自讃の哥とそ

361 ちとりなくさほの川霧

忠岑か哥也、遠白躰とそ、山の木葉もなと時節の感ある也、藤氏の人なれは此川を詠〻心あり

362 秋くれと色もかはらぬ

作者同、理あらは也、よその紅葉を風のかすといへるに二の心あり、一説、よその紅葉するころ、吹きたる風にをのつからときは山も景気の秋のさまなれは、風そかしけるとは云也とそ、又いつくともなき紅葉の、此山かけにちりきたるをも云也、いつれも可用也

363しら雪のふりしく時は

貫之か哥也、此降しくを力を入すくしてみれは、深雪に成て花そちりけると云所、心詞相違せる也、此七首素性か哥はかり作者ありて、残はなし、此作者は四人也、屏風哥悉入によりて如此と云義もあり、又屏風の哥も悉は不入、其内ぬきてこれに入と云義もあり、不分明、所詮、此時素性奉行を承て配分してよまするは、素性か哥の様に入也、其故は此集は四人の撰者なれとも、義に至ては貫之一人か儀になる也、又此集の哥はみな御門の御哥になると云習もあれは、素性奉行するにより一人の名ありとそ、猶可尋之

364峯たかき春日の山に　　典侍藤原よるかの朝臣

ヨルカハ名乗也、女ナレト四品スレハ朝臣ト書ナリ

心は明也、春宮の母后藤氏なれは春日山をとり出る也

離別哥（スム）第八　旅立刻を云、はなれさくる心也　四十一首

365立わかれいなはの山の　　在原行平朝臣

此哥は行平因州受領として下向の時よめると云説不用之、又いなはの山美濃なれは、濃州へ任の時といふも無証拠、彼卿所々任の事五六ケ国侍れと両国の事はみえす、心は、立わかれいぬると云、又松としなといへはいなはの山詮あり、待人たにあらはやかてかへりこんといへるは、まつ人もあらしと述懐の心也、俊成卿は四の句までくさり過たるを嫌へり、定家卿は百人一首にも載られたり、第五の句にさら

りといひくたしたる所にて秀哥となる也、あまりにくさり過、詞のえん過たるはしかるへからすとそ

366すかるなく秋の萩原　　読(ママ)人

すかるの事、御抄に委、しかれといつれにも付かたし、たゝ鹿の別名也、心は、かゝるおもしろき事とものあるをふりすて、朝たつ人の心をもとゝめぬをは、いつとかまたんと云也

367かきりなき雲ゐのよそに

此哥は遍昭か也、此僧正は所〻に修行せし人にて、只今も都をわかるとて切にしたへる人にいひをく也、限なき雲井とは至てとをき心也、いつくにても忘ねは、我心にをくらさぬ理也

368たらちねのおやのまもりと　　小野氏也、ちふるは名乗也

をのゝちふる

母の心にあかぬ別なれと、大やけことにくたる道なれは心にまかせす、されはそふる心をもせきとめんするやうに歎て、せきなとゝめそと公界へ云心也、まもりとは、其人を思心かまもりとなる心也、うらむれは其心こたふるかことし

369けふわかれあすはあふみと　　きのとしさた

あふみへくたる人なれは、あすはあふみと云、ちかき程なれはやかてあひみん別なれと、さ夜ふけかたの袖はたゝならぬよし也、涙にこそ侍らめと、たゝ夜ふけかたの露とのみみれは優也

370かへる山ありとはきけと

霞は枕詞なから物をへたつる心あれは也、かへるさのおほつかなからん事をなけくよし也

371おしむから恋しき物を　　紀貫之

わかるへき人なれは、さしむかひなから恋しからんことの、やかて心にうかふ也、されは立別て後は、猶なに心ちせんと云也、猶おしむによりやかて恋しき心も侍る也、白雲は枕詞なから遼遠の心侍り

372わかれては程をへたつと　　しけはる

心は、大かたまへの哥におなし、かつみなからは、

かくみなから也、程とをくわかれん事をかねて歎よし也

373おもへとも身をしわけねは　いかこのあつゆき

思へともと云にあまたの心こもる也、はるゝと行衛もなう、あつまのはてへくたる人を、あかすなこりおしく思あまりに、とゝむるならひかなはぬわさなれは、せめて伴ても哀なと思へ共、朝家につかへなとする身なれは、身をわくる理なきにより、たゝめにみえぬ心はかりをたくへやると云也、されは此五文字、なをさりにはつかはぬ詞也

374あふ坂の関しまさしき　なにはのよろつを難波氏也、万雄名乗也

あふと云心はなし、関と云義まさしくはと也、惣の心は明也

375から衣たつ日はきかし　読人しらす

おきてしとは起て行也、旅立心也、されとも我をゝきて行と云心ある也、左注にみえたり、心哀ふかく不ひんなる哥也

376あさなけにみへき君とし　寵テフトヨム義可然也

朝なけは朝夕也、朝にけとも万葉にはよめり、同事也、公俊を立入たるとみゆ、草枕はたゝ旅と云心也、但公俊を立入る義ならてみれは猶ゆう也とそ、此人うつろひかたなるを恨て思立にや

377えそしらぬいま心みよ

人の家とは女なとの所にや、五もし余情こもりて先面白也、行末の事ははかりかたけれは、人か忘るゝか、我忘るゝか、今みえんと云也

378雲井にもかよふ心の　ふかやふ

雲ゐは遠き心、遠人にも心はをくれねは、わかるとみゆるのみそと也

379白雲のこなたかなたに　よしみねのひてをか

こなたかなたとは、我人二かたになる義也、心をぬさとは、思くたくる心を手向のぬさによそへいへる也、行人を切につゝかなくと思よし也

380しら雲のやへにかさなる　紀貫之

上句は限なく遠き心也、思はん人とは、誰にても御ため切ならん人と云義也、されは我事におちつく心を、我とはいはて〈公界に〉いへる心珍しく、しかも長ありておもしろき哥也

381 わかれてふことは色にも

こと書、人をわかれけるとは、我と〻まりて人はわかる〻心也、心にしむなといへるは色ある物こそあれ、さもあらぬ別の何とてしむそと云也

382 帰山なにそはありて　　躬恒

あひしれる人は朋友也、さやうの人こしちにありけるを、帰と云山あれはと待わたるに、まれ〳〵京に来て又立かへり行時、ありてのかひはなにそ、きてもとまらぬ事の名にこそあれと、うらむる由也

383 よそにのみ恋やわたらん

こと書に心は明也、雪みるへくは行と雪とをかねたり、哀なる哥也

384 音羽山木たかくなきて　　貫之

木たかく鳴て尤肝心也、はるかなる別をしたふ心よく相叶也、郭公歟○も君かわかれを惜やときく心也、此山にて人をわかる〻折節なき侍にや、又なかすもあれ我心を時鳥によそへいへる也

から物の使に　唐舩帰朝の時の使にや

385 もろともになきてと〻めよ　　兼茂

折しも長月の晦日なれは、きり〳〵すも秋のわかれおしくあらすや、我もけふ〈人に〉わかる〻人を秋のわかれといへり、されはともになけと云也

386 秋霧のともに立いて〻　　平元規

秋きりのたつあしたなと、旅立ゆく心哀ふかし、心は、かく別ゆかはおほつかなく、はれぬ思のふか〻るへきにこそと云也

387 命たに心にかなふ　　白女（大江玉緑か女にて遊女也）

女の哥にて猶哀ふかし、心は、只今きえんなとにはあらす、又あひみんまての命しらぬ心也、思入て見侍へき也

388人やりの道ならなくに　源さね一字名乗也

是もまへの哥同時也、切にしたふ人に心をまかせていへる也、かならす行へき道なれと、かやうにいへは情となる也、御抄に委

389したはれてきにし心の　藤原兼茂

是も同、人をしたひくる心にまかせて、うかれこし道なれは、帰さもたしかならぬ心おもしろき作意也

390かつこえてわかれも行か　貫之

かつは且にあらすかく也、行かは哉也、人たのめなるとは、あふ坂といふに付ての心也、かこちていへる也

391君か行こしのしら山　兼輔

雪にまかせて尋は、かくれあらしと也、一二の句風情限なし

392夕くれのまかきは山と　僧正遍昭

なんは下知也、人のとゝめまほしきあまり、かくわりなき事をいへり

山にのほりてかへりまうてきて、人〻わかれけるとは、ひえの山にのほりし人の入堂なとせしか、坊にかへりて、又都へかへり行よし也

393別をは山の桜に　幽仙法師

こと書にて心は明也

雲林院のみこ　常康親王也、舎利会は二月也、まへの同時にや

394山風に桜吹まき　遍昭

山風にのにもし心へかたし、山風のうちにと云心也、みたれなんはみたれよと也、さやうのまきれにみる人のとゝまる便もありやと也

395ことならは君とまるへく　幽仙法師

この花の比、客のきたれるか、折ふしおもしろくおもへるに、其人立かへる時、ことならはとは、かやうにうれしき時さくことくの花ならはとまるへく句へと也、かへすは花のうきなるへしと、花にかこち云也

396あかすしてわかるゝ涙　兼藝法し

しもはとは川末の事也、此みこかへり給を切にしたひ奉る涙の、滝に落そふを水まさるとや末の人みるらんと也、切なる涙也

397秋萩の花をは雨に　紀貫之

こと書、かんなりのつほは五舎の内也、兼覧王参内ありしを、雨のふりけれはとゝめ給て、日暮てかへり給をかく読り、おりふし秋なれは、萩によせて花よりも王を切に思よし也

398おしむらん人の心を　兼覧王

かくおしまるゝ身とかねてしらは、いたつらなる老とは思ましき物をと、くゆるやうの心也、心面白く哀ふかき哥也、前の哥はさまて侍らねと、此哥により入けるにやとそ

399わかるれとうれしくもあるか　躬恒

あるかは哉也、初而あへる人にかくよめる心おもしろし、惣は明也

400あかすしてわかるゝ袖の　読人不知

いつもある涙なれと、只今の別の切なる涙をかたみにせんと也

401かきりなくおもふ涙に

切にわかるゝ人を思涙の、大かたならぬ心をかくひ立たり、されは今日の涙は、又あひみんまてひかたかるへしと也、又我涙にて人の袖さへほしかたかるへきを云にや

402かきくらしことはふらなん

ことはふらなんとは、行人のためあしき雨なれと、とても如此ふらは、行人のとゝまる斗にふれと云也、ぬれきぬは雨のえん、又とゝめえぬ人を、雨にことつけてとゝめんのよし也

403しゐて行人をとゝめん

ちりもまかはゝ、せめて花ゆへやとゝまると云義也

404むすふてのしつくにゝこる　貫之

物いひける人とは、しれる人にや、あかてもと云を

手のあかをよせたるなと云は不用、凡俗の事也、あさき水なれは、又むすへはにこりて、心に満足せぬ事をあかてもとは人によそへいへる也、此哥俊成卿執しおほしたる哥也、尤以可仰

405下のおひのみちはかた〳〵　友則

途中にて不慮にあへる人なれは、こなたかなた行わかるゝ也、帯は行めくりて末にあふ物なれは、そのことくにと云也、車にいひつたへたるに行めくりえんあり、道にてあへは、又後をかへるよし也

羇旅哥　第九　羇中は旅の中途の心也　十六首

406天の原ふりさけみれは　安倍仲丸（安部氏は陰陽家にあり）

此哥は左注にてあらは也、ふりさけみれはとは、あまたの義あり、先ふりあふきみる心、又引さけと云義もあり、提の心也、ひつさけは手にとるはかりの心也、ふりあふきみるを本として、ひつさくるの義をは心に持へし、万里の外まてすみわたり、おもしろき月をふりあふきみれは、ならの京なとにてみし月の、心にうかひたる、端的は手裏に入たるやうにおほゆれは、三笠の山に出し月かもとは云にや、此国にてこそ月の所、明石更科なといへ、他州にては都をさしてよめる所面白、仲丸は元明元正両代の人と云へり、可尋之

407わたの原やそ嶋かけて　小野たかむらの朝臣

篁流罪の事は仁明の御時也、その先代よりの人也、やそ嶋はおほくの嶋の心也、此国のさかひの外へも、こき出るにやと思ふ心の、かなしさ切なるをしる人にも伝まほしきあまりに、只今我に対する物なれは、あまの釣舟つたへよと、心なきものにむかひていへる所、一しほの哀にや、こと書にいへるは此哥をいひ送るにや

408都いてゝけふみかの原　読人しらす

みかの原、泉川、かせ山、皆南への道すから也、かせ山を衣かせといへる、河風さむき折ふし哀ふかき

さまにや

409 ほの〳〵とあかしの浦の

是は海路に我おもふ人のおもむくを送てよめる哥也、明石の浦は〈霧をよめる〉所の道地也、たとへは、あかしのうらより切に思人の舟出して漕出るか、次第に遠さかり行おりふし、朝霧の村〳〵はるかに立て、ある時はほのみえ、ある時はさやかにみゆるか、猶みるまゝに嶋かくれはてたるを、今はいつくにか行らん、いかやうにか成ぬらんなと、一かたならす思やるよし也、大かたの旅の空さへ、哀にもかなしくも侍るを、まして万里の波濤をおもふ人の漕わかれゆかんを思やる心、いふかきりなう哀ふかゝるへきにこそ、此哥旅に入事尤奥義也、霧を病なといへるは不用之、此哥を当流に秘する事は、心詞とゝのをりて、しかも幽玄に、たけたかき余情あれは也、哥道の大切不可過之、可仰とそ、上品上生にをけるも其故也、是は親句の哥也

410 から衣きつゝなれにし　在原業平朝臣

こと書を長〳〵と書たるは、此哥を哀ふかくとかまへたる也、衣のえん過たれと折句の哥なれはくるしからす、きつゝなれにしつましあれはとは、年をへてなれにしつまを思やる心の切なるゆへに、はる〳〵きぬる旅をしそ思と云也、くれ〳〵旅をしそ思といひすてたる余情かきりなし、心あまりて詞たらぬ理也

はや舟にのれ、日も暮ぬといひけれは　日くれぬと云本あり、御家の本には日の字なし、堯孝の本には在之、不定事歟、日暮ぬ、天子の御前にては心あるへき事とそ、さて此こと書をよく思入てみるへし、かきりなくとをくもといふより、以下毎詞心を付へし、京におもふ人は二条后の事にあるへからす、大かたの思人〻なるへし

411 名にしおはゝいさことゝはん

心はこと書に明也、鳥こそあれ、都鳥と云をきゝ侍

らん心いか斗そや、我思人はありやなしやといひすてたる所に、色〻の哀こもるへし、返〻其身に成てみ侍るへしとそ

412北へ行かりそ鳴なる　　読人しらす

〈左の〉こと書に明也、女のつれこし人にはわかれて、しらぬ国よりかへりくる道にて、友まとはしてかへる鴈なときゝての心おもひやるへし

413山かくす春の霞そ　　お　と（壬生のよしなりか女）

此女、滋春か甲州へ行にいさなはれてくたりてと云説可尋之、其ならすとも、女の夫は身まかりて後、思人にははなれすへなきまゝに、せめて都をたのみ所にて思たつを、思かたの山さへ霞へたてゝ、さかひをたに思わかぬ心尤哀ふかし

414きえはつる時しなけれは　　躬　恒

哥は義なし、詞書によりて旅部に入也、白山の名は雪にそなといへるあたり、よく〈いひ〉おほせたる哥也、風躰面白とそ

415いとによる物ならなくに　　貫　之

義なし、無余情哥也、兼好かつれ〳〵草にえせ哥のよしいへり、但当時は又かやうの哥もいかて侍らん、哀なる哥ともいへり

416よをさむみをく初霜を　　躬　恒

初霜より此かた也、たゝ遠き旅の心なるへし

417夕月夜おほつかなきを　　藤原のかねすけ

夕つくよおほつかなきをとは、枕詞なれと、これはひるははや去て、夜の月はまたさたかならぬ折ふしなれは、所のさまもおほつかなけれは、あけてこそみめといふよし也、されは夕月夜、枕詞なから用に立也

418かりくらし七夕つめに　　なりひらの朝臣

詞書は物語にくはし、心は明也、猶盃にのそみて当座の頓作也、花の本の事なれは、さやうの心つかひもあるへきを、天川と云につきて、かくよめる所上手のしわさなり

みこ此哥を　返しえし給はす　惟高は名哥とも数多よみ給へり、しかれとかくいへる、心あるへし

419 一とせに一たひきます　きのありつね

君まてはゝ待の字也、年に一度ならてはかよはぬわたりなれは、今は宿かす人もあらしと也

420 このたひはぬさも執あへす　すかはらの朝臣

朱雀院は寛平御幸也、この度は度の字也、御幸御供なれは、心あはたゝしくて、ぬさも執あへすと也、又私をかへりみぬ心也、されは幸手向山にある紅葉なれは神に任てと云也

421 手向にはつゝりの袖も　素性法師

同御幸の時の御哥也、素性も供奉也、つゝりの袖、能衣と心うるはよろしからす、只疎衣也、卑下也、か様の袖をきりても手向へきを、只今は紅葉に満足したる神なれは返しやせんと也、珍しき作也

物名第十　四十七首

物名とは一切物の名也、世間の境界也、此巻を如此号する事、伝大士と云人の頌云、有レ物先二天一地一、無レ形本寂一寥、能為二万一象主一、逐二四一時一不レ凋、以此頌たてたる巻也、しかれは種々の動物、色々の草木、諸国の名所等を題とせり、しかはあれと、よみ出る心は更にあらぬ事にて、其ことはりをいへり、知者はしり、不知者は不得之、これ物をはかる道にも其習あるへき者歟、君臣朋友の交、治世撫民の中立、生死の始末を思はんにも其便なきにあらす、とりわき此集秘説等此巻にあり、これををもくして、第十に此巻をあめりとそ

うくひす　藤原としゆきの朝臣

422 心から花のしつくに

鶯を立入たる也、鳥とは鶯にあらす、花の滴にぬれたる鳥のなくを、うく又ひすとや鳴らんと也、なにとて鳴らんと云也、理説、物名は物をたはかるやうの心あり、その事をいふかと思へは、又さもあらす

して、ことなる事を本意とする所此理也

ほとゝきす

423くへきほとゝきすきぬれや

郭公を立入て心は恋の哥也、くへき人の時過ぬれは

うらみわひなきて、大かたの人をさへ動せさすると

也

うつせみ　　在原しけはる

424浪のうつせみれは玉そ

なみのうつ瀬をみれは、水のくたけちるか玉のやう

なれは、其をひろはゝはかなからんと也、もとより

水なれはかく云也、理の説、真実の宝珠なりとも、

とるへき理なくはとるへからさるの教也、此心を人

は可思の教也

返し　惣別返しはまへの哥の心を請てよむをいへり、

是はたゝおなし様なる事をよめはいへる也

425たもとよりはなれて玉を　　壬生忠岑

心は、懐中に玉を持たるかと人のとひ侍るやうの事

あるに、更になきよしを答、さらは袖の外にはあら

し、打うつしてみせよと云心也

うめ　　読人しらす

426あなうめにつねなるへくも

むめをうと書もくるしからす、あなうめとは観する

心也、あなうと切て、めにと又切て心うへし、香は

匂つゝ也、花〈なと〉の匂の忘かたき様の事也、下

心、常なるへくもみえぬと云は、無明に対する法性

也、万物法性には侍れと、又実に其とはなし、香は

匂つゝは法性の用也、恋しかるへきは法性のことは

り也、され共、無明法性ともにつゐにまことなし、

法性は常住に無明は変化す、法性は香はしく無明は

かなしき物也、あなうめ〈に〉とは、目の前の無明

の常ならぬ事也、二になる時はかなしくも香はしく

もおもはるゝ也、一如に見れは法性も又常なるへく

もみえぬ義也、又云、大家なとの心更に其家にあは

す、心に常なら(る歟)ぬ所のなき理也、後は人も可忍を、

なにとて常住なる心は侍らぬそと也

かには葉と読桜　かは桜也、東国にはかんはと云也、当時ははねすしていへり、はね字をはにとつかふ也

427かつけとも浪の中には　貫之

うきしつむ玉とは、水のあわのつふ〳〵と玉のやうにうかふを云也、上にみえたる玉のそこにはなき心也、かつくは水底をもとむるよし也、下の心、内外に心を分て心うへき也、浪風は人の心の不定の義也、人の心は十年廿年なれてもしらぬ物也、心のふかくてしられぬにはあらす、不定にしてしられぬ也、又不実なれは也、浪の中にはさくられては不実也、風ふくことにとは、物をよく云ものゝあらぬ事を云心也、玉は面白いひなす詞也、これを実かと思へはさもなきやうの事也、心も又同、実とみれは行跡のさもなきたとへ也

すもゝの花

428いまいくか春しなけれは

春の花のちるあとを鶯のうれふ心也、物はなかめてとは、なにとなくなかめて也、心は万程なきを観する義也

からもゝの花

429あふからもものは猶こそ

義なし、下心、会者定離の理をは歎ましきのをしへ也

たちはな

430あし曳の山たちはなれ　をのゝしけかけ

やとり定ぬを旅なとには思へからす、千炀万歳とみたる人の上猶如此、上句は序也、物名のやうにもなく秀哥也

をかたまの木　是三ケ大事ノ一種也

431みよしのゝ吉野の滝に　とものり

あはをかのかもしは疑也、もしあはをや玉とみつらんと疑よし也

やまかきの木　この木山家にあり、実のちいさき物

也、山柿也

432 秋はきぬいまやまかきの　　読人しらす

心は明也

あふひかつら　あうひあういなとはよます、葵と桂と也

433 かくはかりあふひのまれに

義なし、下の心、始はしたしかりし人の、次第にとたえもて行よし也

434 人めゆへのちにあふひの

是も同名也、心は、あはゝあふへき人なれ共、人めを忍によりあふ事のはるかになれは、こなたのとかにや思なされんと云よし也、又云、人めをもとゝして実ならすは、天道我あやまちとすへきよし也、あふひのまれになるは不実の心也、首尾のあはぬ事を風するなり

くたに　杜丹の類也、苦丹とかけり、にもし例のはね字也

435 ちりぬれはのちはあくたに　　僧正遍昭

おもては、蝶の花にあかぬ心より、あたなる理にまよふ心、余情あるにや、下心、我心のひく物を花にたとふ、物みな跡なき事を心にあはれと思へは、其かたへ着するのいさめ也、此哥談儀の時、やかて上に下心をいへる也、のちはあくたになといへは、花のためかひなき様になれは、故実とこれをいへりとそ

さうひ　　つらゆき

436 我はけさうひにそみつる

けさうひにと立入たり、夜のまにさける花をみて、うひにそと云也、花は桜なとにや、始てみる花の面白に、めも驚くやうなる心の甚を、引返してあたなる物とこそいふへけれと也、花も又我心も也

をみなへし　　友則

437 しら露を玉にぬくとや

此花も女郎花にあらす、義なし、玉にぬかんとてやと也

438あさ露をわけそほちつゝ

花に心をうつして、朝より夕になるまても、野山を分つくし尋みるよし也、序に花をそふとてといへる心也、みなへしりぬる、皆へて知也

439をくら山みね立ならし　つらゆき

此哥はをみなへしを立入はせすして、句のかみにをけり、心は、いく世の秋をかかうへにけんと思に、余情こもる也、物名の哥ともみえす、おもしろき哥とそ

きちかうのはな　桔梗也

440秋ちかふ野は成にけり　とものり

秋ちかくなれは、漸草の色もうつろひみゆるよし也、下心、君臣の中にことのはしけく物をいひをきて、君をも人をもかすむるに、つゐにその色あらはれぬるやうの風也

しをに　紫薗なり

441ふりはへていさ故郷の　読人不知

うつろひにけりとは、花をうらみたる心也、下の心、人の約を変するの風也

りうたんの花　りんたう也　とものり

442我やとの花ふみしたく

野はなけれはやとは、野かなき物のやうにこゝにくると云也、下心、へんに入て人の心をはからぬ人の心をたとふ、したくをちらすと云本あり、したくはちらすよりすこしをもき也

（頭書）以墨被滅　いつくにてもなすへき事を、人のいとふやうの所にて、態事をなすやうのいさめ也

おはな　読人しらす

443ありとみてたのむそかたき

たのむそかたきは、たのむにたのまれかたき也、されは、世をはなしとやみんといへり、一切有為境界の事也、惣は面白哥とそ

けにこし　朝かほの実也

444打つけにこしとや花の

やたへの名実（矢田部氏也、名もしにあたりてよむへし）

花の色をも打つけにうつくしなとはみるへきにあらす、かくしいつるもはかなき露のしわさなれは也、下心、巧言令色鮮矣仁の義也

めとにけつり花　三ケの一種也

445花の木にあらさらめとも　文屋やすひて

心は、作花なれは花の木にあらねともと也、下の心、官位なと成ましき人のなる事あり、又年へたる譜代の臣下なれと、出身せぬ所をなる時もかなと云也、上をそしりて我身を歎よし也

しのふ草

446山たかみつねにあらしの　きのとしさた

義なし、理の説と云は、たとへを執て云也、花をはやはらきうつくしき人にたとふ、嵐を仁の心なき人に比す、されは、大家なとの仁の気なきあたりは、聞伝て賢人もよりこぬ也、その為レ主人は仁の心ある人を我かたにと可招のをしへ也

やまし　しは俗に駒のひさと云草也、只常にしのねと云其歟、山はそのある所の義也

447郭公みねの雲にや　平あつゆき

上は義なし、下心、人の悪事のかくれたる義也、しられぬをたのみて、つゐにあらはれぬれは、身をうしなふいさめ也

からはき　唐なてしこなとの類にからと云字をそへたり

448うつせみのからは木ことに　読人しらす

上句心は明也、玉とは魂也、下の心、うつせみのからは木ことにとは、一切衆生の住所をたとふ、玉とは道のくもりなきをたとへ云、道あるもみえぬ事をかなしむへき風也、又玉とは君子の心也

かはなくさ　三ケの一也

449むは玉の夢に何かは　ふかやふ

義なし、下心、人の欲情を風する也

さかりこけ　木の枝なとにさかりたるも苔の類也

450花の色はたゝ一さかり　たかむこのとしはる高向

哥の心は明也、下の心、世間に少の事と思も、其人の志はふかき事のあるを風する也、哥も（されは）、花の色はうすく少なれと、露の心は涯分とおもへるよし也、又云、そとの事に一生の辛労をするのたとへ也

にかたけ

451いのちとて露をたのむに　しけはる

心は明也、露をたのむにはたのみかたけれは也

かはたけ　河竹とは中殿の竹をも云也とそ

452さよふけてなかはたけ行　かけのりのおほきみ

明也

わらひ　真せい法師

453けふりたちもゆともみえぬ

心は明也、題は草の名、よめるはわらたく火の事也

さゝ、まつ、ひは、はせをは

454いさゝめに時まつまにそ　きのめのと紀氏也、陽成院御乳母也

恋の哥也、いさゝめはしはし也、しはしのまにと思たつ所に、日をうつし、心のきわをはみえて、しかもならぬことをよめる也、成就すへき所を覚悟して、思立へきの教也、世上の理にも此心あり、されはなるへき事をも先つゝしむへき也、況哉不定におゐてをや

なし、なつめ、くるみ

455あちきなし歎なつめそ　兵衛

心は明也、猶歎なつめそとは、うき身そなとしかとうらみなはてそと也、其故はうき事にあふ身とて捨もはてぬ物ゆへにと也

からこと　西国にあり

456浪のをとの今朝からことに　安倍清行朝臣

今朝からことゝ琴（にとは）と異にとをかねたり、春のしらへは楽器に春秋の調子あれは也

いかゝさき　河州にあり

457かちにあたる浪のしつくを　かねみのおほきみ

梶の滴のさら〳〵とちるを、折ふし春なれはいかゝ

花とみさらんと也

からさき

458かのかたにいつからさきに　あほのつねみ（保をあをとヨム也）

かのかたとはあのかた也、いつからはいつより也、

浪ちはあともとは、浪にはわたりつるあともみえね

は也

459なみの花おきからさきて　伊勢

おなし物の名也、義なし

かみやかは

460むは玉の我くろかみや　つらゆき

義なし、よくいひ立たる哥也

よと川

461あし引の山へにをれは

明也、山居を雲の立こめたらんは哀ふかくこそ、優

なる哥也

かた野

462夏草のうへはしけれる　たゝみね

上は序也、行方なき水を我心の愚鈍にも、侘人の理

にもよそふる也

かつらのみや

463秋くれと月のかつらの　源ほとこす

桂の宮はうつまさに侍也、月のかつらは花はあれと

実はなきよし也

百和香（ハクワカウ）　薫の名也

464花ことにあかすちらしゝ　読人しらす

義なし、あかすは風のあかすちらせる也

すみなかし

465春霞なかしかよひち　しけはる

御抄、しもしはやすめ字也、霞の中の道なくは、秋

くる鴈の心なれはかへらしと也

をき火　をこしたる火也

466なかれ出る方たにみえぬ　みやこのよしか

方たにみえぬとは、所をしらぬと云心也、涙の川な

れは也、おきひん時やとは、大かた〈に〉干たらん

時はそこもしられしと也

のちまき

467 のちまきのをくれておふる　大江千里

義なし、下心、晩学なれとも碩学なれはあたならぬよし也

はをはしめ、るをはてにて　はると云二字を上下におきてと也

468 花の中めにあくやとて　僧正聖宝

めにあくやとては、目に満足するやとて分行は、心さへちりて猶あかぬよし也、下心、一切其三昧に入とおもへは三昧にたかふ義也、山林にも市あり、市中にも山林あるかことし、聖宝の哥なれは尤心あるへし、聖宝は醍醐開山清滝一流の源也、僧正の正の字をそはに付ることは、黄門の故実也といへり、此集の時はまた極官にあらす、後極官せられけれは正の字を書入らるゝと也、されとも、よむ時は僧聖宝とよむへしとそ、なを黄門のそはに書給へる子細は、他本に僧正聖宝と侍るあひた、それをもそむきはてす、又已後の極官の理をもあらはし給へるなるへし

古今和歌集聞書 第十一　八十三首

恋哥一

恋部を五巻にする事は人の五大にあてゝ撰也、恋と云物は五大の所作也、仍当流五形也、さて十一巻より下巻と云事は、あらぬ事也、二巻にする時は上下とも云也

469 郭公なくやさ月の　読人不知

御抄、あやめ草はあやめもしらすといはんため、あやめ草といはんために、郭公鳴やさ月とは云也、此類此集に限なし、あやめもしらすとは至ての始也、いまた身に一向しらぬ事は分別もなき物也、恋と云事を身にしる始也、まことのはしめなれは、いかな

る事とも、又いかやうならん事共しらぬよし也、猶御抄に委

470をとにのみ菊の白露　素性法師

是も序哥也、心は、聞て後、よるは終夜、ひるは終日、思あかし思くらして、我思の切なるをもとけすして、たへぬ思に消ぬへしと歎心也

471よしの河岩波たかく　貫之

岩なみたかくとは、我思のたきる心、はやくそとは、こしかたよりかく思きたるに、執分打しきりて、胸中のとゝろきさはくよし也

472しら浪の跡なきかたに　藤原勝臣

御抄に委、猶白浪は跡なきといはん為也、跡なきかたはたよりなき心、風そたよりとは、たとへは思かたのゆかりなとの玉さかなるに、これにこそは、いひも伝めと云心なりとそ、定家卿の注也

473音羽山をとにきゝつゝ　在原もとかた

五文字枕詞也、心は、あふ事のへたゝりて年々を送る由也、年をふると云所に、心つくしなる心もこもり侍るにこそ

474立かへり哀とそ思ふ

御抄、猶心をくとは、隔心の心なるを、是は心をかくるよし也、心は、人をとやかくと思へと、更に其かひなく過ゆけは、よしやと思を、ともすれは心のかゝる時、かやうに忘かたきは、もし又さるへき契ありてやと、たのむ所を哀とそ思といへり、引返し思へる心めつらし

475世中はかくこそありけれ　貫之

吹風は、めにみぬといはんため也、めにもみぬ人を恋ふる心の、先はかなきよし也、世中はかくこそありけれとは、我思のみにあらす、かくある物そと我あやにくなる心より思よる也、又云、世はたゝかうわりなき物にこそと云義也

右近のむまはの日をりの日　右近馬場は西京、左近は東京也、大宮をかきりてある也、ひをりの日とは、

此時官人馬に乗て、的をいる事あり、其出立、黒ひたゝれなと云物をきて、裾を引折て着するのよし、顕注密勘にみゆ、左近は五月五日、右近は六日にあり、これは当日六日の事也、猶物語之時委

476 みすもあらす見もせぬ人の　　在原業平朝臣

一二の句は、ほのかにみたる心也、恋しくはとは、一向恋しからぬにはあらす、みそめて哀と思人の、猶切に成ゆかは也、あやなくは、あちきなく也、余情かきりなし

返し

477 しるしらぬ何かあやなく　　読人しらす

しるともしらぬともは、領状不領状也、いな、せ也、されは、しるともしらぬとも、何かあちきなういはん、心さしによるへき事なれは也

478 かすか野の雪まを分て　　みふのたゝみね

上句は序也、ほのかにみし人の行ゑはいかにと尋ぬる由也、君はもとは、君はいかにと也

479 山桜かすみのまより　　紀貫之

上は序也、心は、はるかにへたゝりて、ほのみし人たしかならねは、いかなる人にかなと心つくしなるよし也、又説、花はさかり久しからぬ物なれは、それによせて、み初し人いかゝ侍るらん、誰かたにもうつろひやすらんなと、とかくおほつかなく思よしとそ、家の説のよし侍り

480 たよりにもあらぬ思の　　もとかた

人に心をもかけ侍るは、其便ありての事なり、されは、何の便なき人に思を付るはあやしき心なりと、我と云よし也

481 はつ鴈のはつかに声を　　凡河内みつね

初鴈は声をきくと云、はつかにといはん為也、中空にのみとは、我思の便なき心也、又こゑをきくは、よそにみるよりはちかき也、中〳〵こゑをもきかすは力なし、こゑ聞程にて、しかも又まことにみる事なきを、中空なるとは云也

482 あふ事は雲井はるかに　　つらゆき

あふ事はとをくて、音にのみきくよし也、万葉に、あま雲〈の〉やへ雲かくれと云哥をとれり、家集には禁中なる人を思てよめるとそ

483 かたいとをこなたかなたに　　読人不知

人を思そめて、とやいひよらん、かくやいひよらんと思へと、あはすはつゐに命さへたへかたきよしの心也

484 夕くれは雲のはたてに

御抄、雲のはたてとは、入日の跡なとの雲すち〳〵みゆるか、はたの手にゝたるをいへり、心は、天津空なる人とは、及かたき人におもひみたるゝよし也、及かたきとは貴人をも云、是は便なき人なとなるへし

485 かりこも〈の〉思みたれて

勘云、かりたるこもはみたれやすき心なり、猶かく思みたるゝとも、いもはしらし、いふ人なくはと也、いもとは、たゝ女を云よし也

486 つれもなき人をやねたく

ねたくは、妬にあらす、後悔の義也、かゝる人を思初て、ひるは終日、夜は終夜、したふ心をくふるよし也

487 ちはやふるかもの社の

よせ恋也、大社のゆふたすきはかくることのたえねは、其ことく思かけぬ日もなきとそへたる也

488 我恋はむなしき空に

心は、一天にみちたる思なれはにや、行かたもなきと云やうの心也、下句は、たゝ思の達せさるよし也

489 するかなるたこのうら浪

是も寄恋也、たこの浦はあら海にて、浪のひまなきによするは、わか人を思心のたえぬよし也

490 夕つくよさすや岡への

上は序也、いつともわかぬとは、人は猶みさほにつれなきを、しゐて思わひ打歎よし也、又云、松のは

のやうに、いつともわかぬ思をするよしとそ、余情風情かきりなし

491 あし引の山下水の

深く忍恋の心也、たきりておつる水のことく、思の切なる由也、こかくれてとは、人しれぬ心也、思の切なるまゝに、せきとめかたきを云にや、序哥なれと優に心あり

492 よしの河岩きりとをし

岩きりとをしなと、こと〳〵しくいへるは、思はさやうにありともをとにはたてし、よしさて力なく恋はしぬとも也

493 たきつせの中にもよとは

渕をは思のたゆむにたとへ、瀬をは思のたきるにそへたり、されとも我思は一変にして、なくさむ時なきを、渕せともなきといへり

494 山たかみ下行水の

山高みとをくは、下にふかく忍よし也、なからへて猶忍つゝこそ侘め、さやうにてしぬともと云也、又云、心にもしらせしといふ程の忍恋也

495 思いつるときはの山の

おもひ出る時とうくる心也、つゝしには用なし、岩まて也、但槇も詞のかさりとはなる也、常に思中にも一段切なる時をいへり、此哥は業平真雅僧正の弟子たるに、思ふ心ありて遣けるとそ、可尋之

496 人しれす思へはくるし

末摘花は紅の花也、人しれす思へは余くるしけれは、色にや出んと思侘たる也

497 秋の野のお花にましり

勘云、秋の野のさかり過、心ほそけなる長月の霜に、お花はかりのこりたる比、りうたんの花やかにさき出たるを、お花にましりさく花とは、紫の色のゆかりを思へるにやとそ申人侍し、惣の心は、色に出てやこひん、あふよしもなき物からなと云にや、哀ふかし、草枯のりうたんの花やかなるを女にたと

へたり

498わかそのゝむめのほつえに

ほつえ、はつえ、両義なれと、ほつえにつく、心は、つほめる梅も色ふかく成行は、鶯のきたりなくやうに、色にいて、ねに鳴ぬへきと云也、又の説、ほつえ、人の心の打解ぬによそへいへり

499あし引の山郭公

心は、君に恋つゝ我いねかてにするころ、時鳥のあはれに打なけは、時鳥も我ことく、いねかてにするかと云也、郭公の妻の事、可随所好

500夏なれはやとにふすふる

義なし、切なる思をかくよそへたり、此五もし、夏の哥にてはあしかるへしとそ

501恋せしとみたらし川に

人は思ふにもかなはす、せんかたなきまゝに、恋せしと祈るさへ、神やうけ給はぬと也、あふ事を祈る心よりおこる也

502あはれてふ事たになくは

人の哀といふ事たになくは、何を思の乱のつかねをにせんと也、又云、我と云あはれ也、思の切なるまゝに、これも人ゆへなれは、哀と打いひてなくさむる心也、思あまる時のことくさ也、忍恋の心也、部立にも叶ぬへしや、恋の乱のつかねを、珍しき物也

503おもふには忍ふる事そ

人を思心の、忍にもまかせす成行を云也

504わか恋を人しるらめや

しるらめやは、人はよもしらしと云義也、惣の心は明也

505あさちふのをのゝしの原

上は序也、人とは思人の事也、切に忍をも云人なくは、人はしらすして、思もなしとや思はんなと云心にや、只人はしらしなるへし、前後の哥にて心うへし、惣しての哥は義なし

506人しれぬ思やなそと

なそとは、何そと云詞也、心は、人しれぬ思は何そ、其ゆへはまちかけれともあふよしのなきはと云義也、ともしはそへ字也、たゝ人しれぬ思はいかなれはなと云よし也、又云、忍と云事、いかなる事そとたにいひとふらふ人のなき由也、是はともし用に立侍り、されと一首を吟するに、此心にあたらすや

507おもふともこふともあはん
物なれやは、物なるや也、恋ともあふましき物を、下ひものとくるはかなしと云心也、是は心つよき女の哥也、其心おもしろし、又云、身を心ともせぬ身なれはの心にや

508いて我を人なとかめそ
御抄、いてとは発言の詞也、ゆたのたゆたとは、大舩は大波にのみうかふ物にて、たゆたふを、たゝよひ物思かたちによそへたり、やう〳〵とかむる人ありやせんの心也

509いせのうみに釣するあまの
釣するうけのやうに、とやせまし、かくやと思あつかふよし也

510いせのうみのあまの釣なわ
義なし、くるしとのみや思渡らんと云に、かなしき心ふかく、思入てみるへし

511涙川なにみなかみを
必みなかみを尋たるにあらす、我身からと思心よりかくいひなす也

512たねしあれは岩にも松は
義なし、恋と云恋は也、我思よはりて後、此理もあれはと、成かたき事のあるを、我思の便とする也

513あさな〳〵たつ河きりの
朝な〳〵は、不断の義也、空にうかれては、たつきなき由也、うきて思のは、人のりやうけせぬ間の事也、人の心いかならんなと思ふ心にや

514わすらるゝ時しなけれは
たつはあしの中にあれ〈は〉、あしたつといへり、み

たるゝにそへいへる也

515から衣日も夕くれに

心は明也、切に恋しき也、哀ふかき哥也

516よゐ〳〵に枕さためん

思の切なれは、ぬる事たになきよし也、いつの夜、いかにねし夜にてかありけんなとの心にや

517恋しきに命をかふる

命にかへてもあふ事あらは、しぬる事は安からんと也、あはてしなは、猶思のはれかたけれはと云也

518人の身もならはし物を

身はならはしの物にてあれは、あはすて心みん、恋しぬる事あるやと、思の切なるまゝにいへる哥也

519忍れはくるしき物を

思侘ぬる心を、人のためにもくるしからぬやうにうき名をもたてぬ人、たれかはあらん、さやうの人にもかたりて、少もなくさまはやと云にや、又の説、くるしけれとさありとて、又忍事をは誰にかたらんと也

520こん世にもはやなりなゝん

只つれなき人をとかくいひわひて、こん世にもなれかし、今の世なから人をむかしと思はかりにといへる也、猿丸か集にあり

521つれもなき人をこふとて

いたく歎さまをいはんとて也、山にもこたふる程歎よし歟、猶つるかなといへる、かひなき事を打侘たるよし也

522行水に数かくよりも

亦如画水随書随合、この心也、只あとなき思をよそへいへり

523人を思ふ心は我に

義なし、おも〈し〉ろき哥也

524思やるさかひはるかに

思やる程さへいかはかり遠く成ぬるにか、夢路にさへあふ人のなきはと也

525夢のうちにあひみんことを
あふ事のかたきを、せめて夢にてもと、打たのみくらせるよひも、思の切なれは、ぬる事の叶はぬを打歎よし也

526恋しねとするわさならし
夢うつゝともに絶はてねは、中〳〵思もたゆへきを、よるは終夜、〈はかなき〉夢にみえて、猶思をそふるよしとそ

527なみた川まくらなかるゝ
義なし、切なる涙をいひ立たり

528恋すれは我身はかけと
かけとなるとは、おとろへたる義也、影は人にそふ物なれはかく云也

529かゝり火にあらぬ我身の
たゝおもひの火を涙の川にうかへて、鵜川をたとへにひけり

530かゝり火のかけとなる身の
此影となる、おとろへたる心にはあらす、下にもゆるといはんとて也、なかれては、年へたるよし也、たゝくるしきさま也、可吟味とそ

531はやき瀬にみるめおひせは
みるは早き瀬に生す、されは涙のはや瀬なれは生る物ならんといへり、珍しくいひなせり

532おきへにもよらぬ玉もの
只つくかたなき思をたとへ云也、顕注に、奥にもへにもと云説、不用之、御注、きゝよからすと侍り、浪の上に乱て生る玉も也

533あしかものさはく入江の
あしかも、あしたつにおなし、心をもしつめえす、かく恋んとしらさりしことをと云也、又、しらすやは、我をせめて云心也、又かねて思ひしにたかはぬよし也

534人しれぬおもひをつねに
序に、ふしの〈山も〉煙もたゝすなり、以之可心得と

そ、切なる思なれは、たえすもゆる山にたとへ云也

535とふ鳥のこゑもきこえぬ

いたりて思のふかきを云也、思ひはふかくなり、人の便はなき心也、こゑもきこえぬは、便さへなきよしとそ、誠以哀ふかし

536あふ坂のゆふ付鳥も

相坂には用なし、ゆふ付といはん為也、我思の切なる比、この鳥のなくを聞ていへり、鳥の人を恋ふるにはあらす

537あふ坂の関になかるゝ

猶此相坂もあふ事にはあらす、さていはて心に思こそすれと云所に、あふをはふくませたる也

538うき草のうへはしけれる

序哥也、ふかき心と云所に色〻こもるへし

539打わひてよはゝむ声に

思わひて声にも立へき心よりいへり、我思の切なるを打いては、山ひこもこたへつへしといへる也、人のつれなくて、さそともいふ事なきより、かくいへるにや

540心かへする物にもか

心をたかひにかふるならひもかなといへり、心は明也、是も珍しき作意也

541よそにして恋れはくるし

入ひもとは、ひもにめひもおひもとてあり、其をむすへは行あふ物也、されは其ことく一ッ心にあらはやといはん為也、只思の切なるまゝ、心も狂するやうにいへる、言語道断の哀也

542春たてはきゆる氷の

水と氷とはおなし物なれと、むすへは別になれり、消れはよくひとつになる物なれは、さやうに君か心へたてなくとけよかしと也、たゝ聊も心をのこさすもかなといふよし也

543あけたては蟬のおりはへ

あくれはなき、くるれはもゆる蟬螢を、切なる思に

よせたり、但鳴くらしなとを、きふくいはて、たゝよるひる思のくるしき事とみれは、さまの優にきこゆる也

544夏虫の身をいたつらに

虫は、をのか思と火とをこんして、一おもひにきゆる也、我は、我おもひはかりにてこそきえめと歎よし也、せめてひとつ思ならはと云義也

545夕されはいとゝひかたき

義なし、いかにも哀ふかし、かやうの哥は思入てみ侍へき也

546いつとても恋しからすは

秋の天は人〈を〉うれへしむる物なれは、わきて秋の夕、思の切なるを云也

547秋の田のほにこそ人を

ほにとは、あらはれてこそ恋すとも、いかて露はかりも忘れんと也、不便なる哥也、ほと云字にあたりて云へし

548烁の田のほのうへをてらす

光のま程も我やは忘るゝと也

549人めもる我かはあやな

人めもる程の身かは、あちきなし、よしやほに出てこそ恋めと打歎也、あらはれてこひは人も哀と可思物をと云也、〈必〉これにしられてはいかゝなと思人はなき人なるへし

550あは雪のたまれはかてに

御抄、かては、常に云過かてなと云義にはあらす、かつ〳〵也、つもるかとおもへは、又はおち〳〵するかしけきを、我思によそへたり、かもし可濁也

551おく山のすかのねしのき

此哥は、万葉に、すかの葉しのきとある、きゝのよろしきに付て、すかのねと入たり、しのきは、なひく心、なへてなとの心也、けぬとかいはんとは、余恋のしけゝれは、さもいひたゝは、哀をもかけてあはんとやいはましと云心にこそ、なひく心にはすか

の葉猶よろし、されときゝを専にする所おもふへし

恋哥二

六十四首

552おもひつゝぬれはや人の　小野小町

思つゝは、やかての心にあらす、程をふる義也、思によりてみゆる夢なれは、又さむるも我心にこそあらめと思に、心にまかせぬ所はかなきを歎也

553うたゝねに恋しき人を

かうはかなきをも人をみし夢と思へはたのむよし也

554いとせめて恋しき時は

いとせめてとは、顕注に、最せめてといへり、されと京極黄門の、此集にいとゝつかふ事なしとあるに憚て、当流には、たゝ切なる恋しき時はと教ふる也、惣の心は、衣を返して夢をみる心よりいへり

555秋風の身にさむけれは　素性法師

秋風の涼しく、やう〳〵心にしむ折は、いとゝ恋しさもまさり行まゝに、年月のつれなさはさもこそあらめ、かゝる折ふしは、人も哀とこそ思はめなと打歎、暮る夜ことにたのむ心にや、又云、身に寒けれはは、さむきのみにあらす、心にしむおりの心也、人丸か、身にさむく秋のさよ風、と云哥を思へるにや

しもついつも寺　今の下御霊の辺云々、人のわさしけるは、七日〳〵の法師事歟なとにや、真性の導師にていへるとは、衣裏の珠の事也

556つゝめとも袖にたまらぬ　あへのきよゆき

人をみぬめとは、人をあひみぬ涙と云にや、衣裏の珠をよせたり

557をろかなる涙そ袖に

前の返し也、をろかなる涙とは、なをさりの涙也、我涙の切なるを云也

558恋わひて打ぬる中に　敏行

夢のたゝちとは、直路也といへり、但たゝ端的の心にや、心はあらは也

559住の江の岸による浪

上は序也、心は、うつゝこそ人めをもよき、あひかたからめと思へは、夢ちのうつゝの心なれは、やすからぬ事のみみゆるを打歎心也

560わか恋はみ山かくれの　をのゝよしき

義なし、しる人とは、あひての事也、不便なる哥也

561よひのまもはかなくみゆる　紀とものり

心は、螢のとかく飛かふを思に、結れたる物かなとみるに、我は猶まとひまされると也、はかなき恋かなと云義也

562夕されは螢よりけに

夕去、夕暮よりは心あり、物思折から、螢のもえわひたるを、いかなる思にかと、我は螢を察すれと、我は猶螢よりもこかるゝ思はまされと、光みねはや我思をはなき物にして、つれなか〈る〉らんといへる心也、不便なる哥也

563篠のはにをく霜よりも

篠の葉は、こと草よりも霜ふかくをく物なれと、猶独ねの衣はさえまさるといへる、哀もこもる也

564わか宿の菊のかきねに

消かへるとは、消ると思へは又もとのやうにいけるよし也、白菊の霜はきゆるとみれと、色のおなしやうなれは、たとへいへり、思の切にくるしき義也、面白したてたる哥也

565河のせになひく玉もの

水中の玉藻のやうに、人にしられぬ恋もするかなと云義也

566かきくらしふるしら雪の　みふのたゝみね

序哥也、下に消るとは、思の切にして下に消入やうの事也、又云、下にくつをるゝ義とも

567君こふる涙の床に　おきかせ

身をつくす心をそへたり、みほつくしは、ふかき所にたつる物なれは、かくいへるに、涙の切なる所みえ侍り

568 しぬるいのちいきもやすると
玉のをはかりとは、少と云義也、既消へき命の其に
はよるましき事なれと、心みにあはんといへとに
や、哀なる哥也

569 わひぬれはしゐて忘れんと
人をとかくいひ侘て、いまはかひなき事をなと思侘
ぬれて、しゐて忘れんとするに、はかなき夢のみえ
て、我をたのまするよし也

570 わりなくもねてもさめても　　読人不知
か文字はかな也、心をいつちやらはとは、いかやう
にか心をもなしてと云義也、猶恋しき物かなと云や
うの心也、心の一すちなるをいかやうになしてとい
へる、おもしろくや

571 恋しきにわひて玉しゐ
詞は、玉しゐと云につきて、からとはつゝけたり、
されとせみのからのやうにいへは、こと〳〵しくい
へは幽玄なし、たゝむなしき物からの名にやたゝん
と云へし、かひなき物から思所の心はかなはすし
て、なき世までの名にやたゝんと歎也、たゝ正直
に、又幽玄に義をとるへし

572 君こふる涙しなくは　　きのつらゆき
涙の水のおほき心をいひ立たり

573 よとゝもに流てそ行
よとゝも、常住也、みなわとは、水のあは也、冬も
こほらぬは、涙のたきる心也

574 夢ちにも露やをくらん
かよへる袖も夢中の事也、思の涙ひまなきよし也

575 はかなくて夢にも人を　　素性法師
此はかなくて、夢をいふにあらす、思わひて、もし
夢にやと打ぬる我ことわさ也、又云、はかなくてと
は、そとみつる夢ともいへり、但此五もし、二をか
ねたる也、幽玄かきりなき哥とそ

576 いつはりの涙なりせは　　藤原たゝふさ
偽ならは人めにのみおとすへきを、忍涙にて真実を

しれと也、珍しき作也

577ねになきてひちにしかとも　大江千里

わきて春雨といへるは、涙のをやまぬによせたり、又折節、春雨の比、物思ふ人のよめるにや

578我ことく物やかなしき　としゆき

時そともなくは、夜〻不断なく心にや、猶いつを時ともなくと云義也、よたゝ、御抄にあり、我おもひのさはくよし也

579さ月山梢をたかみ　つらゆき

梢をたかみとは、鳴ね空なるといはん為也、なくね空なるとは、思の達せぬよし也、しやうともなきをかくいへり

580秋きりのはるゝ時なき　みつね

霧ははるゝ時なきと云、立ゐのなといへるため也、たゝ心ほれ〳〵しく成て、何のあやめもわかぬよし也、又ある空もなきと云義也

581虫のことこゑにたてゝは　ふかやふ

虫はこゑにたてゝ涙なし、我はねにたてねと、涙の切なるよし也

582秋なれは山とよむまて　よみ人しらす

ともし清也、山もうこく斗にと也、又云、身にたのむことある人の、独ねたる夜の心也、逢て後の独ねにあるへからす、部立あはぬ恋也

583秋の野にみたれてさける　つらゆき

乱てさける、我思の千〻にみたるゝに叶へり、面白いひ立也、序哥也

584ひとりして物を思へは　みつね

秋の田と云本あり、夜と云ても田の心あり、心は、我思ふ人〈のみ〉ならす、大かたの人さへ哀ともいふはなしと打歎よし也、又云、思はかなしき物よと云人もなしと也

585人を思ふ心はかりに　ふかやふ

心を空にして鳴と云也、又へたゝり行躰、又云、禁中の人を恋てよめりとも

586秋風にかきなす琴の　　たゝみね

秋風の身にしみ、物あはれなる折ふし、かきならす琴を聞て、いとゝ人の恋しきよし也、秋風楽にはあらす、かやうのたくひ、又古事なとをよむ事あるに、悉そのことをはよます、自然の余情、又当座の事にいにしへを思出よむ也、可意得事とそ

587まこもかるよとの沢水　　つらゆき

上は序也、常よりまさるは、雨のえん也、下句、とまりは古き哥のさま也

588こえぬまはよしのゝ山の

義なし、こえぬまとは、其人にあはぬ間の事也、詞書、義なし

589露ならぬ心を花に

心をゝくとは、かくる義也、風吹ことにとは、我おもふ人に人のせうそこするといふをたとへよめり、風流なる哥のさま也

590わか恋にくらふの山の　　坂上これのり

ちる花の一葉〳〵をたとへても、猶我恋はまさると云也、此哥はくらふる心あれは、ふもし可濁歟のよし侍り

591冬川のうへは氷れる　　むねをかのおほより

下になかれてとは、人の用さるにより、我心をあらはさすして、年を送り、恋わふる義也、上はこほれるは、みさほつくれるさまなり、胸中の思をゝさへたる心也、非忍恋、前後部立にてみるへし

592たきつせにねさしとゝめぬ　　たゝみね

滝津せにとをける、さやうの所の浮草は、ことにおちつく所もなくうきたるへし、されは我思のうきたる心をよそへたる奇特の作意也

593よひ〳〵にぬきてわかぬる　　とものり

かけておもふ心のたゆみなき心也、かり衣は、かりきぬ也

594あつまちのさやの中山

上は序也、山はへたつる心と云義、不用之、中〳〵

何しかといふうちに、人のつらさも、我思も、おほくこもれる也、かく立かへり云心哀也

595しきたへの枕のしたに

思ことも涙も、劫をつみつゝあれと、人は哀ともみえこぬよし也

596としをへてきえぬ思ひは

思の火も、涙の水も、たえさるよし也

597我恋はしらぬ山路に　　つらゆき

まとふ心は、人にふかくとんする心也、さて恋ちのまとひをしらぬ山路によそへたり、心は明也

598くれなゐのふりいてつゝなく

ふりての事、まへに注侍り、紅涙をつくしても、人のつれなき色はかはらねは、袂のみこそといへり

599しら玉とみえし涙も

白玉とみえしは、常ならぬ涙の今は紅涙に成たるよし也

600夏虫をなにかいひけん　　みつね

何かいひけんとは、螢をなにしにもとき思へる、我も同やうにもえぬへしと也、身をこかす程はなにしになと思し義也

601風ふけは峯にわかるゝ　　たゝみね

たえてつれなきは、たえてさりけもなくつれなき也、たとへは高山のうこきなく、風はけし〈き〉には思かゝる雲もやかてたえて、其跡なかるへきに、我思心をよせたり、此哥、ことから無限物也

602月かけに我身をかふる

まことに幽に、又哀ふかき哥也、惣の心は明也

603恋しなはたか名はたゝし　　ふかやふ

たか名はたゝしとは、我ゆへの御名はのかれ給はしと云にや、少をよはぬ人をおもひけるにや

604つのくにのなにはのあしの　　つらゆき

めもはるになといへる、難波の蘆によく叶へり、此所のあしをいへるは、いたりてしけき恋の心也、しるらめやは、人はしらしと也

605てもふれて月日へにける
人になれすして年月をふる心也、いこそは、弓のえん也

606人しれぬ思ひのみこそ
せめて人のしる程の思ならはと打歎心也、我のみそしると云所に、多のうらみもこもりてきこえ侍り

607ことにいてゝいはぬ斗そ　とものり
此川はうへにはみえすして、下になかるゝやうにいひなせり、されはいひ出ぬ思ひの下にたえぬをよそへたり

608君をのみ思ひねにねし　みつね
夢も人の心にてみせ侍らは、すさみともなるへきを、我心よりみる斗はなくさめかたきよし也

609いのちにもまさりておしく　たゝみね
家集には、過にし人を夢にみ侍てとあり、此集には、不逢恋の心也、心は、此世のうちにては何かあひも見しと、更〻思はてたる人を、玉さかにみたる夢の、あたに覚たる、端的誠さも有ぬへし

610あつさ弓ひけはもとすゑ　はるみちのつらき
上は序也、よるこそといはんため、又弓はひけはもゝゝゝと末よる物なれはいへり、義はあらは也、無心なる物もひけはよることはりあるをと、打なけく心也

611わか恋は行衛もしらす　みつね
思そめてより身の行衛もしらす、心のはてもなしとつく〳〵と思へは、あふをかきりと思より外の事なしと云心にや、又あふを限の心一にて、身の成はてん行ゑも、心のおちつきもしらぬよしにや

612我のみそかなしかりける
あひかたき事を思に、彦星の類にやと思へは、其もあはぬとしなけれは、我のみそと云義也

613いまはゝや恋しなましを　ふかやふ
たのみあるやうなれと、命のかゝりて、もしやと思心の猶かなしき様の心也

614たのめつゝあはてとしふる　みつね

あはてのみすくさは、これもはてぬへきを、さはあらて、猶たのむ所を人も哀とおもへと云義也

615命やはなにそは露の　　ともの り

いのちやはとは、我とかろんしていへる詞也、たとへ万年をふる命也とも、思人にあはんにはかへつへし、いはんや露のことくあたなるいのちを、あふにかへんは何か惜からましと云心にや

恋哥三 第十三　　六十一首

616おきもせすねもせてよるを　　在原なりひらの朝臣

一二の句は、思の切なるをふかういへる也、さて、夜をあかしては春の物とてなかめくらすとは、春は空のけしきもろ〳〵と打霞つゝ、物のあやめもわかれぬに、いとゝ物思身にて、そこはかとなくなかめくらしたるさまにや、彼物語には雨をそへたり、此集には、こと書にも侍れと、なくてしかるへくや、又云、昼夜安からぬ心也、ぬるともなくおくるともなきさま也、これはあひたるやうの心、又物語にもそのよしあれと、あはぬ恋の心つくし也、部立の義也

617つれ〳〵のなかめにまさる　　としゆきの朝臣

これも長雨にあらす、なかむる也、つく〳〵と思の切なるまゝに、打なかめゐたれは、いとゝ涙のまさる心也、下句は、袖のみぬるゝをことわさにして、あふ事はなしと云也

618あさみこそ袖はひつらめ　　なりひらの朝臣

涙は心さしの浅深による物なれは、かく云也、身さへなかるとなといへる、優にや、可吟味〻

619よるへなみ身をこそとをく　　読人不知

御抄、縁なともなくて身こそへたゝれ、心は立そふよし也

620いたつらにゆきてはきぬる

心詞ともに明也

621あはぬ夜のふるしら雪と

いたつらにかへる夜の、あまたゝひになるをいへり、其夜の数雪のやうにつもらは、我もともに思きゆへき物をと也、下にくるしき心こもる所、人丸の哥也、此二首人丸哥といへり、可尋之、常の左注は一首を云也、如何

622 秋の野に篠わけしあさの　　なりひら

上句は、露なとを期て、篠分るあさの袖よりもとは、たとへに云也、あはてこし夜は、徒に帰る袖の事也、あさの袖は朝也

623 みるめなき我身をうらと　　小野小町

物語には、まへの哥、返しとみえたり、さてみるめなきは、小町か業平にみえぬ心は、業平にうらむる心あるゆへ也、されは業平のとかにてこそあるを、なりひら我身をうらめしとはしらねはや、あしもたゆきはかり、かれすきぬると云義也

624 あはすしてこよひ明なは　　宗于

これも人のもとにいきて、いたつらに心をつくしつゝ、かくてこよひ明なは、此世はかりの恨にはあらし、なかきうらみとやなるへきと云也、誠大かたの恨にはこえぬへし、尤哀なる哥也

625 有明のつれなくみえし　　忠岑

つれなくみえし別とは、あはすしてかへす人の心也、有明は久のこる物なれはそへたり、惣の心は、夜もすから心をくたき、もしやとしゐてたのむに、人はつれなけれは、力なう立別て行に、有明の月ほのかにて、心ほそきあかつきのさま也、後鳥羽院御時、古今第一の哥はいつれそと、定家々隆に御尋ありけるに、両卿共に此哥と申されけるとそ、又定家卿は、かやうの哥一首よみいてたらんは、此世の思出に侍へしとの給ける也、いか許の事そや

626 あふ事のなきさにしよる　　もとかた

さりともときぬれと、徒になれはうらみて帰るよし也、さて、徒に行てはきぬるの哥よりこれまて七首は、あはてかへる恋也、此内ふる白雪の哥は、さも

みえ侍らねと、此哥のつゝき也、よくみれは又其もさやうにみえ侍、か様の事は部立にて其心をうへし

627 かねてより風に先たつ　　よみ人しらす

風にさきたつ浪とは、あはぬさきより立名によそへたり、これより又、名にたつ恋の部也

628 みちのくにありといふなる　　たゝみね

なき名とりてはとかさねていひたる、おもしろくや、あひみての名さへあらんにと云也、みちのくにありと云心あり、はるかに音にこそきゝし名の、我身の上にと也

629 あやなくてまたきなき名の　　みはるのありすけ

あちきなう、かひなき名の、またきたつよし也、わたらてやまんとは、あはすしてはやましの心也

630 人はいさ我はなき名の　　もとかた

後撰には、人のあひたるよしをいはんといひし哥の返し也、されは其人をさして云也、此集にては、人は世上の人也、一人をさゝす、たゝ昔よりあらぬさまの事そといはんと也

631 こりすまに又もなき名は　　よみ人しらす

勘云、なき名たちてなけかしかりし人の、又もなつかしく物語なとしける人に、さきの事を思いてゝよめるにこそ、此物語してを、まことにあふ心には見侍へからす、これ部立の心也

632 人しれぬ我かよひちの

義なし、此哥もあふ恋にはあるへからす、部立の義也、心不便なる哥也、よく可思

633 忍れと恋しき時は　　つらゆき

つゝめとも思の切なるにしたかひて、次第にあらはれ色みゆるを、山ふかき月の出るにたとへいへり、新き心也、又云、あひみん事はや漸ちかくなるまゝに、忍わひてうかれ出つゝ、思あたりへ行〳〵する様の心にや、是より逢恋へなれは、こゝ（此次）の心部立なるへし

634 恋〳〵てまれにこよひそ　　読人しらす

はしめてあふ夜をしたふ心也、これよりあふ恋也、まへに伊勢物語に逢恋の哥入侍れと、此集にてはあはさる恋と意得へし、部立をみる事第一の習也

635 秋の夜も名のみなりけり　をのゝこまち

勘云、ことそともなくは、たま〳〵あひみては、何事をいひ出したりともなく、思つめたることもかひなくて、あかす程なく明ぬと云よし也と云〻

636 なかしとも思そはてぬ　みつね

義あらは也、人からにこるへし

637 しのゝめのほから〳〵と　読人不知

心は、かすかに聞そめし鳥の声なとも、次第〳〵に打頻、やう〳〵しのゝめの空も明ゆけは、いまはと立別ぬる程のうきを、おのかきぬきぬなるそわひしきと云也、此哥、御門の御哥といへり、可尋之、まことに心正直にして、いつもの事にて、しかも哀ふかし、ほから〳〵は、ほのほのとおなし、きぬ〳〵なるとは、きぬ〳〵にと云也

638 明ぬとて今はの心つくからに　藤原くにつねの朝臣

はしめてあふ夜の心也、今はの心つくとは、立わかるへき事のちかつくよし也、勘云、いひしらぬは、此別の心のいひもならはす思もならはぬ程に、おしくかなしき心なりとそ

639 あけぬとてかへる道には　としゆきの朝臣

五もし、力なきよし也、勘云、こきたれて、かきたれて同心也、心は、かきくらしふる雨にもとまるへきならねは、今はとてかへる道に、いとゝそほちぬる心にや、心は大方の空たにもあるを、物かなしく別行空に剰雨さへふれは也、只かへる道のあやにくなるよし也

640 しのゝめのわかれをゝしみ　寵チヨウ

切なる別のよし也、惣の心は明也

641 郭公夢かうつゝか　読人しらす

心は、時鳥の暁かたのほのかなるこゑと、わか別路の夢うつゝともわかぬ心まとひをそへたり、暁と云

字を専とせり、朝露はおきてといはん為也、朝は心なし、別の時分の事は、下に暁のこゑとあれは也、又云、郭公にとふよし也、又、時鳥夢かうつゝかを、聞郭公の事にして、ほのかにわかるゝ人を思なすらへたる心也

642 玉くしけ明は君か名

心は、我のみならす、君かためを思により、夜ふかくきつるも、猶人やみつらんと、おほつかなく思よし也

643 けさはしもおきけんかたも　　大江千里

けさはしもとは、霜にあらす、詞字也、其を霜にすこしよせていへる也、されは、をくともきゆるとも云也、其きはゝ心も空にて別こしを、立かへり思へは、身もきゆはかりかなしきと云にや

644 ねぬる夜の夢をはかなみ　　なりひらの朝臣

ねぬる夜の夢とは、ほのかにあふ夜の事也、されはあふよの余はかなけれは、まことの夢にも又みるやとまとろめは、打解てもねられす、みえくる夢もなきわかことわさの、みし夜の夢よりは猶はかなきといふなり

645 君やこし我や行けん　　読人しらす

これは二句の哥といふ也、君やこし我や行けんと云二句まてにてことたれり、其分別なき所をおもほえすと云也、夢かうつゝかねてかさめてかといへる、みな心まとひをのへたるまて也、余情かきりなし、下心、一切の我と人との事也、人か来て我をあらはすか、我きたりて人をあらはすか也、夢かうつゝかとは、此人実か不実かと云義也、人は無常なれは空也、然も又仮躰也、夢うつゝも空仮の二也

646 かきくらす心のやみに　　業平朝臣

まへの哥返し也、あふ夜のはかなさも心のやみにかきくらしたれは、分別の思なし、夢共うつゝとも世の人さためよと云也、又よ人のひ文字、可濁之由此説あり、天子御字（此時代可尋之）のよし侍り、二条家の人、講尺の

時、故実、ひもしを濁てよめる、仍当流の義如此、伊物にはこよひとあり、其夜を期する心也、下心は、心の放下也、人境の二を亡したる時節也、こゝには更無語にしてやゝ休したる所也、亡たる所則中道の理也、此亡〻たる所を、哥人の心とはすへし、花に向ては花を弄し、月に対しては月をあはれふ、当意の外、さうさにあつからぬやうに哥人の心はあるへき也、業平の世人定よといへる所、世上に任て、我造作をせさる心也

647うは玉のやみのうつゝは　　よみ人しらす

やみのうつゝとは、人に夜ふかくなとあひたるさま也、うつゝのあふ夜なれと、さたかならねは、やみのうつゝと云也、其はたゝまことにみる夢にかはらすと云よし也、たゝ程なくてあかぬ義也、これもたゝ世上の理におもひあはすへし、世はたゝやみのうつゝ也

648さ夜深てあまのとわたる

さよふけかたの月の、物あちき〈なき〉空に人をあひみつる程、あかす切なる心にや、又云、さよふけかたの月影のやうに、あかすあひ思心にや

649君か名もわか名もたてし

是は忍にあへる中なるへし、勘云、みつともといはんために、なにはなると云也、あひきともいはしは、人もみつとないひそ、我も見参しきともいはしと也

650なとり川せゝの埋木

勘云、人もゆるさぬ事の思の外にこそなれそめけん、思つゝくれは、あらはれはいかにせんと思て、あひみそめけるそと、世のつゝましさ、せんかたなき事をなけきけるにこそ侍らめ、心はおなし事なれとも、あらはれはといひてこそ哥のすかたは艶にをかしく侍れ、あらはれてといひては、きをりにことやうなる哥也、杉板もてふけるいたまのあはさらはいかにせんとかわれねそめけん、たゝ同事也、かれ

はふるき哥にてすなほに、これは艶に侍るを、返〻あらはれはとそ、まことのつらゆきは思はれけん

651よしの河水の心は
水の心ははやくともは、我思は切なりとも、滝のをとにはたてしとは、人にさとはしられしと云心にやり

652恋しくは下にを思へ
紫のねすりは、紫の根にてすれる衣也、色に出なゆめは、我をせいはいしていふ心にこそ、又人にたのめいふことゝもいへり、但忍恋の心は同けれとも、我を云事おもしろくや

653花すゝきほにいてゝ恋は　をのゝはるかせ
花薄、下ゆふひも、枕詞也、心は、ほにいてゝこひんは名のおしけれは、打出まほしき心をも下に思むすほゝるゝと也、はもし清也

654おもふとちひとり〳〵か　よみ人しらす
心は、思ふ中のおなしかきりならて、独つゝなくなり侍らは、たかためにとかいひて、藤衣きんと也、忍恋の切なるよし也

655なきこふる涙に袖の
涙にはしるしなき物なれは、何ゆへともいひなすへけれは、其をぬきかへかてら、服衣をはよるこそきめと也、誰におほせてといふ返しなれは、かくいへり

656うつゝにはさもこそあらめ　こまち
忍ふるも恋ちのならひをはいかゝせん、夢ちにさへ人めをつゝむことのみあれはくるしきと也、もるは守也

657かきりなき思ひのまゝに
こんと云は、行へし也、忍かよひのわりなきを思侘ていへる也、まへの哥には夢ちもやすからぬやうに云、又かくもいへり

658夢ちにはあしもやすめす
夢中に千度百度みたるも、うつゝの一目にはしかしと也

659おもへとも人めつゝみの　　読人しらす

勘云、ありとはみやれとも、えわたらぬ心つくしをよめり、つゝむを人め堤といふによせたり、されは、川とみなからもわたるへきよしなしといふ心にや、人めつゝみ、にこるへしとそ、下心は、心にたかき名利をいたきたるをたとへたり、つゝみは、人のわさなれはかくたとへたり、思へともとは、名利を放れんと思へ共、人界はたゝ此名利よりそたちたる物なれは、此さかひをこえさる所をおもふ義也、川はきわ也、こゝを思放て、此さかひをやすくわたらんと可思事とそ

660たきつせのはやき心を

心は、胸中の思のたきりて、あひみまくほしきを、人めつゝみのせきとめ〳〵するを、堤の水をせくにそへたり　　きのとものり

661紅の色にはいてし

是又二所に枕詞をゝけり、かくれぬの下にかよふとは、沼なとの古きに草のねはひて水のみえぬを、下にかよふ心にそへていへり、哥は義なし　　みつね

662冬の池にすむ鳰とりの

冬の池といへる肝心也、心は、氷はてゝ下のかよひもたやすかるましきにかよふを、つれもなくそこにかよひてと云也、人にしらすなとは、我心をいさむる也

663篠の葉にをくはつ霜の

さゝのはの霜は、ことさらしみ氷る物なれと、色に出ぬことくたとへ思は切にて、しみつくとも人にはしられしと也　　よみ人しらす

664山しなの音羽のたきの

序哥也、心は、をとにも人のきくはかりは恋侍へきかはと、よく思しりなから、やゝもすれは、色にも出ぬへく切なるよし也　　ふかやふ

665みつしほのなかれひるまを

只二所なから枕詞也、古き哥はかやうにいへるか、

たけたかく聞ゆ、ひるまはあひかたけれは、よるを
まつと云也

666 しら河のしらすともいはし　　平定文

しらすともいはしとや、世上の人、我思人の事をあ
やしなといふを、あらぬ事ともいはし、なからへて
つゐにかたらはんと思へはと云心にや、すまんと
は、いもせとなるへきよし也、又云、人の返しなと
によめる歟

667 下にのみこふれはくるし　　とものり

たえてみたれんとは、緒にぬきたる玉は、緒のたゆ
れはみたるゝ物也、心は、忍ことのくるしき程に打
乱ん、人なとかめそといへる也

668 わか恋を忍かねては

山橘は色に出□といはんため、心明也、やまたちは
なは実あかくなる草也、髪そきの時用る物なりとそ

669 大方はわか名もみなと　　読人不知

御抄云、此哥をは、たゝ、我名もみなとこきいてな
ん世を海へたにみるめすくなし、とよみてなにとも
申さるゝ事なかりしかは、海のほとりたにみるめす
くなけれは、湊へこき出なんとよめると思て侍り
き、大かた其理あらはれ侍り、猶我名もみなとゝい
へる所如何、もし我名もみなとゝは、なきになして
いつちにもゆきて、身をなきにやなさん、この海へ
たにみるめすくなくは、いつくにてかあらんと、た
のむかたなきを、湊〈こき〉いてなんとよめるにや

670 枕より又しる人も　　平定文

枕のしると云事は、身にしたしき物なれはいひなら
はせり、心は、更にしる人もなき思を、我涙ゆへも
らしつるかなと、我をこたりを歎うらむるよし也

671 風ふけは浪たつきしの　　よみ人しらす

松の根と鳴ねとをかねたり、哥はかやうなる、めて
たき也、心は明也、たゝ涙の切にしてあらはれたる
心也

672 池にすむ名をゝし鳥の

水鳥の水中へ入か浅けれは、かくれかぬるを、忍ふも忍ひかたき思によせたり、兼輔の哥とそ

673 あふことは玉のをはかり

あひみることは、そとはかりにて、名のたつことは、よしのの滝のことくをひたゝしき、といへり、事の心にかなはぬさま也

673 むら鳥の立にしわか名

村鳥とをくは、さはきたつ心也、名のあまねくなる義にや、されは、ことなしといふとも、はやしるしあらしの心也、ことなしふのふは、うと云やうに云へし、下心、誤てはあらたむへきのをしへ也

674 君により我名は花に

わか名は花にとは、はな〳〵しく人のいひなすにたとへいへり、世にあまねくたつといはんとて、春霞野にも山にもといへり、我名は花にと切て、春霞下に付る様に心得へしとそ

676 しるといへは枕たにせて　伊勢

上句は明也、ちりのたつとは、微塵はたちやすき物なれはいへり、さてちりにもあらぬわか名の、なとかくあまねくかろう立やすかるらんとなけくよし也

恋哥四　七十首

677 みちのくのあさかの沼の　読人しらす

上は序也、かつみる人にとは、あふ事の稀なる人を恋思義也、此哥恋一二に入侍らは、不逢恋にてもあるへきを、部立、初逢恋也

678 あひみすは恋しき事も

あひみて思のまさるよし也、惣は義なし　つらゆき

679 いそのかみふるの中道

是も序也、みすは恋しといへるに、一たひも見はやと思ひし心の、くやしき事なとこもる也、ほのかにあひみてのちの心也

680 君といへはみまれ見〈す〉まれ　ふちはらのたゝゆき

君といへは、みれはみるにつけ、みねはもとより恋

しけれは、とにかくに思の不断に切なるよし也、我恋ととまりたるは、いかにそや侍れと、此哥に執てはたはゝ(を歟)(朱)に侍なりとそ

681 夢にたにみゆとはみえし　　伊勢

我おも影にはつるとは、朝鏡に向てみるに、おとろへたる我影にもはつかしく思へは、夢中にも人にあはん事はうれしかるへきを、夢にも人にみゆるとはみえしと也、いたりて恥る心也、珍しき哥也

682 石ま行水のしら浪　　よみ人しらす

水の白浪のやうにいくたひも、あかす思人なれは、立かへり〳〵見まほしき心也

683 いせのあまのあさな夕なに

みても〳〵満足せぬよし也

684 はる霞たなひく山の　　ともの り

山桜霞のまよりといふにおなし、但、これはあひみて後の猶あかぬよし也、以前の哥は不逢恋也、部立に心少かはる事おほし

685 心をそわりなき物と　　ふかやふ

みても実なき心也、但、又まことに一度なと、ほのかにあひし人、あやにくに恋しきを云か、部立の心也、みる物からや、優なるへし、此哥は恋の一二ならは不逢恋なるへし

686 かれはてん後をはしらて　　み つ ね

はしめはなはたしき中は、後変する事ある習也、其理をもしらてと云にや

687 あすか川ふちはせになる　　読人しらす

我ふかく思人に心のちかひ也

688 思てふことの葉のみや

秋は千草万木うつろはぬはなきを、我おもふと云ことのはは、色もかはらぬよし也、人の心も色かはる義こもるにや

689 さむしろに衣かたしき

心は、思かはしつる旧妻に、立わかれて恋しきまゝに、かれも我をやまつらんと、橋姫を我つまによそ

へいへるなるへし、橋姫の物語の説、不可用之、其外さま〳〵の義あれと、無其詮のよし定家卿もおほしけるなりとそ

690 君やこん我やゆかむの

大かた契れる程に、君やこんといへり、されと猶おほつかなけれは、我やゆかんとやすらふまゝに、槇の戸をもさゝすぬるよし也、かならす一夜の事にはあるへからす、いさよひ、やすらひにおなし

691 いまこんといひしはかりに　　そせい法し

勘云、今こんといひし人を、月ころまつ程に、秋もくれ、月も有明に成ぬるとそよみ侍けん、余情至極したる哥とそ

692 月夜よしよゝしと人に　　よみ人しらす

心は、月おもしろしなといひやらは、こよといふにゝたれは、我身にてはいひやりかたき事なれと、又またぬにてはなきよし也、たゝ心をとかく思わひたる義也、篁か哥也

693 君こすはねやへもいらし

こむらさきは、もとゆひといはん為也、心は、いたつらに夜深霜ふるともと、心にちかひたる義也

694 宮きのゝもとあらの小萩

をきあまる露の、枝もおるはかりなるを、萩の心にはらはせんとて、風をまつにやと、我みるめより〳〵へり〳〵、其ことく我人をまつよし也、是は心いられにまつさま也、のと〳〵とみ侍らは其心叶へからす

695 あな恋しいまもみてしか

山かつは、かきほといはんとて也、心は、なてしこを人によそへて、今もみてしかなとは、もとみし人なるへし、かもしは願かな也

696 津の国のなには思はす

両国は枕詞也、名にはおもはすとは、名聞には思はす、真実に思よし也、とはにとは、常住あひみたきよし也

697 しきしまのやまとにはあらぬ　　つらゆき

上は詞ことに枕詞のやうにいへり、比もへすしてとは、あひみて後猶やかてみまほしき義也

698 恋しとはたかなつけけん　　ふかやふ

心は、たゝしぬとこそいはめ、さらは哀をやかけもせんと云也、にもしはそへ字也

699 みよしのゝおほ河のへの　　よみ人しらす

上は序也、人のなきかことくするを歎て、なみ〳〵にもおもはゝ、かうあちきなき恋をはせし、なくさむる事もあらまし物をとうらむる心也

700 かくこひん物とは我も

心は、人を見初し時、なれゆかは、いかなる思のつまともなり、何たる歎をかせん、身をも徒になすことやあらんと思ひ〈し〉事の、まさしくかくありけりと云也

701 あまの原ふみとゝろかし

是は、陽成院の御めのとのあしきふるまひありしを、君の御けしきあしかりけれは、かくよめりと也、なる神たにこそと天子をうらみ奉る儀也、但此説さる事なれと、只おもふ中のさはりあることにみ侍るへし、これ当流の義也

702 あつさ弓引野のつゝら

御抄云、おもふ中のいかなることかいてこんと、あやふみ思ひしに、末つゐにことのしけゝんとは、よからぬ口舌いてきにたりと云心也、ことしけしとは、諍論口舌をいひならはしたり、左注、あめのみかとは、天智天皇の御事也

703 夏引のてひきのいとを

これはまへの哥の返し也、口舌はことしけくともくり返し、たえんとはおほしめさすもかなといへる心にや

704 さと人のことは夏野の

里人とは、世人のいひたつることしけくとも也、かれ行君にとは、人言により人は枯行を、猶さりともあはさらめやと、たのむよしにや

705 かす〳〵におもひおもはす　　業平

数〳〵にとは、思おもはすといはんとて、先大やうにいひ出る也、心は、思もおもはすもあれ、はやとひかたくなれは、身をしる雨ふりまさるといへり、雨ゆへに人の心みゆれは、身をしる雨と云也

706 大ぬさの引てあまたに　　よみ人しらす

大ぬさは、みてくら、又は榊に麻の苧を付たるをも云、此ぬさは御秡なとする時、あまたの手に執うつして、身の祈をする物なれは、独にとまらぬ男の心をたとへて、思へともえたのますとはいへるにや

707 大ぬさと名にこそたてれ　　なりひらの朝臣

大ぬさは、秡すきてなかす物なれと、よる所はありといへは、我も其ことくつゐに君か方によりぬへきの心也、まへの返し也

708 すまのあまのしほやくけふり　　よみ人しらす

此哥は、序になすらへ哥のよしいへり、塩やく煙の風にしたかひて、おもはぬかたへなひく物なれは、女のことさまになるを、かくなすらへたり、すかたゆうなる哥也

709 玉かつらはふ木あまたに

草のかつらに玉の字をそへたり、あまたの木にかゝれるを、引かたおほき人にたとへて、我にたえぬもうれしからすと云也

710 たか里に夜かれをしてか

我をうとみたる男の気はひを聞て、誰かたに又夜かれをして、わかあたりに声のするそとうらみいへるにや

711 いて人はことのみそよき

いては、発言の詞也、何にてもいはんとて、先いひ出る詞也、ことのみとは、詞のみ也、心は、月草のうつろふやうにあたにしてと也、色ことには、いちしるくと云也

712 いつはりのなき世なりせは

義なし、但、世上に此理のみあり、たのみかたきよ

し也

713いつはりと思ふ物からに

人の心はたのみかたけれと、さりとて又、たれをかたのまんとは、真なる心也、又云、又たのむともいつはり人にてこそあらめと云義もあり

714秋風に山の木葉の　　素性法師

世間の変化をみて、人の心をうたかひ思也、千草万木共うつろひやすけれは也

715せみのこゑきけはかなしな　　とものり

物思時は、万の事にその物にふれてたのまるゝ心もあり、又思うたかふ事も侍る習也、心詞やさしき哥とそ

716うつせみの世の人ことの　　よみ人しらす

うつ蟬の世といへるは、はかなき人言といはんとて也、はかなき世の人言といへは、世のかたへはかなきか付てよろしからす、よく分別すへし、たとへは、同事なれと思わたらせしの義也、惣の心は、人ことのつゝましさに、忘ぬ物からかれぬへきと歎く義也

717あかてこそ思はん中は

心は明也、面白哥也、我も人もあきたき心あらん後は、何の忍草か侍らん、下心、十分ならんとおもふましきの教也

718忘れなんと思ふ心の

あちきなくさのみおもふもくるしきに、忘てもありなんと思なれは、いとゝ恋しき心とそ

719わすれなん我をうらむな

郭公は秋なかぬ鳥なれは、かくたとへて、人のかはらぬさきに我先忘ん、その心は、人もうらむなと云也

720たえす行あすかの川の

夜かれぬ中のとたえあらは、うつろふ心あるとや人のおもはん、さはなきをと也、よとみなはとは、自然のとたえもあらはと也、行末ことなくてと思にこ

（是は次の哥の心歟）

そと云義也、作者あつま人、アツマトとよむへし、あるひはアツマウト

721よと河のよとむと人は

いまよかるゝは、行末なかくとふかく遠慮するを、人はさも思はて、かはるなとやみるらんと也、猶なからへてふかくとしたくするよし也

722そこひなきふちやはさはく　　そせい法し

そこひなきのいもしはそへ字也、たゝ底なき也、此哥は、人の我思心のみえぬなといへる時よめるにや、ふちやはさはくとは、思入心のふかきは大やうなるやうなれと、志はふかき也、はなはたしく思は哀に愁切なるやうなれと、深からぬ物也、されはあた浪はたてと云也

723紅のはつ花染の　　よみ人しらす

始より色ふかく思そめつれは、行末かけて忘ぬへき物かといへり

724みちのくの忍もちすり　　かはらの左大臣

上は序也、我心たれにか乱ん、君ゆへにこそ乱そめつれと云心也

725おもふよりいかにせよとか　　よみ人しらす

秋風になひくあさちは、色ことにといはん序也、あく心にはあらす、心は、今おもふよりも猶いかに思へとてか、色ことにはなるそといへる也、我を思はすとて人のうらむるやうの時よめる哥也

726ちゝの色にうつろふらめと

人の心は、色〻にうつろふらめと、我はしらす、其故は、心し秋のもみちならねはとは、我心は不変にて、うつろふ事をしらねは也

727あまのすむ里のしるへに　　をのゝこまち

うらをみると云に執なせり、我は海辺のしるへにもあらぬ物をと也、心は、たゝうらむへき事もなき身を、人の何故かうらむらんと云よし也

728くもり日の影としなれる　　しもつけのをむね

くもる日の影はみえねとも、かならすある物也、そ

れかやうに人はしらね共、我思ふ心は、人に立そひてはなれすと云也、かけとなるとは、おとろふる心也、影は人の身にそふ物也

729 色もなき心を人に　　つらゆき

色ある物こそうつりもすれ、心は、色なき物なれはうつろはしと云也、又云、人はなにゝよりてかはるらんと云心、末にこもれり、如何

730 めつらしき人をみんとや　　よみ人しらす

とけんするやうにもせぬ帯のとくるは、人にあふへきにやと也、めつらしき人とは、もと見し人也、初たる人にあらす、これ部立の義也

731 かけろふのそれかあらぬか

かけろふは、其かあらぬかといはん為也、春雨のふる日とは、旧人也、昔みし人なれと年へて後なれは、其かあらぬかと云也、此哥をよみあくる時は、降日ときこゆるやうに吟すへし、袖ぬるゝは、心つくせし人に年へてあへは也

732 堀江こくたなゝしを舟

大舩には棚あり、たなゝしを舟は至て小舩也、あひわかれし人を立かへりこふる由也、小舩はいく度も行かへりする物なれは、其によせたり

733 わたつみとあれにし床を　　伊勢

此哥は、仲平に忘られてのち、又とひこんといへる時よめり、心は、思かはしたりし時たに、かくうつろひぬるを、まして只今とひやこんと床をはらはゝ、はかなきしわさならんと云事を、あはとうきなんとよめり、水のあわはかなき物なれは、よそへたり、幽玄至極にして哀ふかし

734 いにしへに猶立かへる　　つらゆき

恋しき度ことに、かひもなくかはりはてたる人を忘すして、はかなう立かへり〳〵おもふよし也

735 思いてゝ恋しき時は　　大伴くろぬし

詞書に明也、猶もと見し人のあたりを行かへりうかゝへる折ふし、鴈の鳴を聞てよめり、人しるらめや

は人はしらし也、序にはしらすやといひて、薪おへる山人のたとへを引、されは貫之かくなをして入也

736たのめこしことの葉　　よるかの朝臣

こと書にてあらは也、我身ふるれはとは、ふるされぬれは也、をき所なしは、文の事なから、少は身の事もこもるへし

737今はとて返すことのは　　近院所の名也、春日烏丸、今の松殿御所也、こんゐんのこんにころへしとそ

心詞かくれたる所なし

738玉ほこの道は常にも　　よるかの朝臣

思人のよそにのみかよふをみて、道をたにせめてまとへといへる心、哀ふかし、又云、是も旧恋也、たとへは、我をすさめし人の、思外にとひきたるを、真実の志にはあらし、いつくへもとふ人の、道をまとひてきたるにやと云也、是可然

739まてといはゝねてもゆかなん　　よみ人しらす

此哥は、詞すかたよろしからすとそ、心は、夜ふかくかへる人をいひわひて、せめて行駒の足をもかひおりて、やすらへと云也、留へき便なきまゝにいへり、誠ふかき恋とはみえたり、此哥は心によりて誹諧にはならぬ也、切なる時はかくわりなき心をもつかふ也、又説、か様の哥集に入事勅撰の恵命也

740あふ坂のゆふ付鳥に　　閑院

こと書にて心は明也

741故郷にあらぬ物から　　伊勢

心のあれてみゆるとは、かはりゆく也

742山かつのかきほにはへる　　寵

上は序也、其人のかたより便はあれと、ことつてはなきよし也

743大空は恋しき人の　　さかゐのひとさね

義なし、なにしにかの心也

744あふまてのかたみも今は(ママ)　　よみ人しらず

義なし、但余情侍る也、我は何せんにと云うちに、人はあふまてのかたみにせよとてこそをきつれ共の

義也

745あふまてのかたみとてこそ　　おきかせ

こと書に明也

746かたみこそいまはあたなれ　　よみ人しらす

勘云、あたなれは、かたき也、あだは謬説也、但、はかなきよしにあたなれとなかむる人おほかり、女房なとのいはんを、あたといへとをしへんも、すこしはきゝにくゝや侍へき、ちかく内裏哥合に、講師此詞を仇とよみあけたりし、ひか事とはきゝ侍らさりしを、誰となく打わらはるゝ声〳〵のし侍しかは、誠きゝよきにつきても有ぬへしと、おもひなり侍ぬと云〻、又云、定家卿此哥にて、かたみこそあだの大野の萩の露うつろふ色はいふかひもなし、仇といへるもなくさめかたき心、あ佗と云もたのみかたく、なくさめかたきよしなれは、たゝ同し事にや

恋哥五第十五　　八十二首

747月やあらぬ春やむかしの　　在原なりひらの朝臣

こと書、物語にいへるを悉のせ侍り、哥の感をしらすへき為なるへし、心は、月やあらぬ春やむかしの春ならぬとは、月も春もこその物といはんため也、又、我身ももとの身也、しかるを后にあひ奉らねは、月も春ももとのやうにはあらすして、たゝ我身ひとつのうき事のみはもとの物なりと云也、又云、月も春も身ももとの物なるに、何事そさもおほえ侍らぬはと也、余情かきりなし、此哥をは、俊成卿物ことに書のせてかんし給へる哥也、尤可仰

748花すゝき我こそ下に　　藤原仲平朝臣

此哥は、仲平いせをたのめ侍しに、此比とたえ侍しに、兄時平物いひなとせしか、忍ふるけしきにもあらさりしかは、うらみてよめる也、ほに出てはあらはに也、むすはれにけりとは、人にちきる義也

749よそにのみきかまし物を　　兼輔

音羽河といふにつきて、よそにのみきかまし物をと

云也、心は、あふ事はなくてみなるゝ斗なるをうらみて、よそにのみきかは思あらし物をなといへる心也、わたるとは、あふ事を常によみならはせり、又云、みなれて年をへたる様の心也

750我ことくわれを思はん　　みつね

我おもふやうに人のおもへかしといふにはあらす、我身を我思やうの人もかなと云也、下句、さやうにてもうき物かなと心みんと也、面白作也

751久かたのあまつ空にも　　もとかた

空はとをき物なれは、人の我をへたてはてたるにたとへたり

752みても又またもみまくの　　よみ人しらす

みれはみたく〳〵あかす思へるよし也、なるゝを人はの、人をは、世間にさしていへる也、あいてにいへは、きふくてよろしからすや

753雲もなくなきたる朝の　　とものり

いと晴てと云義あり、当流には、猒はれてといひて、そのうちに晴ると云心をもつ也

754花かたみめならふ人の　　よみ人しらす

人あまたあれは、数ならぬ身は忘られんと也、めは、君かみるめ也、かたみのめにそへていへり

755うきめのみおひてなかるゝ

うきめのみ生るとは、憂事のみある身なれは也、うらとは、我身のかたの義也、うき身なれは、かりそめにのみこそ人は立よるらめと、うらみたる心也、人をあまにいひなす也

756あひにあひて物思ふ比の　　伊勢

あひにあひては、折にあひてなと云心也、かゝる折にあへは、月も思ありけ〈な〉るの心歟、又五もし、重詞ともいへり、長高く面白哥とそ

757秋ならてをく白露は　　よみ人しらす

秋ならては、秋の外と云義にあらす、其秋の時節の露にはあらてと云義也、ね覚するとは、人もとたえ我も思絶たる程の比、しかも猶思つらねたる、あか

つきかたの枕のしつく也

758すまの海士のしほやき衣

序哥也、衣をるをさのあらきは、間かとをき物也、心は、君か心のまとをなれはこそ、とひもこさるらめ也、心のまとをとは、をろそかになる義也

759山しろのよとのわかこも

若こもすむへしと云義、いかゝ侍らんや、聞よろしからす、若こもは、みしかきこも也、されは、かりにたに人のこぬと云也、かりそめにもこぬ人たのむは、はかなき事といはんため也、上は序也

760あひみねは恋こそまされ

此河は水無河（ママ）といへは、其を以てなにゝふかめてといへり、なとふかくしも思ふらん、人は心のあさき物ゆへにと云心にや

761あかつきの鴫の羽かき

御抄に、しちのはしかき、鴫の羽かき、両説とはかりあり、ある人、五音のかはりめなといへり、此哥の心は、暁ふかきしきの羽をとの百千度するか、哀にかなしきを、人のとふ夜は何となうまきれておほえぬを、独ねのあかつきこれを聞は、只我ことわさにてありけりといはんとて、我そ数かくといへるにや、下心、暁をは明闇のさかひにとる、鴫の羽かきをは迷ふ身のしわさにとる、君をは君子にとる、只聖人の心也、聖人の心といふ物、又身の外になき物なれと、迷へはよそにへたゝり、賢聖の心あらはるゝをきたるといふ、此心あらはるゝ時は迷のしわさはなし、きたらぬ時は迷心のしわさあれは、只此しわさは我心のしわさそと思へきの教也

（頭注）暁の鴫の羽かき百羽かきかきあつめても歎く比かな

あかつきのしちのはしかきもゝ夜かき君かこぬ夜は我そ数かく

762玉かつらいまはたゆとや

玉かつら、吹風、みな枕詞也、無義、今はたゆとや

は、至てたゆる心也

763わか袖にまたき時雨の

人の心の秋にひかれて、時ならぬ袖のしくるゝ也

764山の井のあさき心も

我はあさはかにも思はぬを、人は何とて玉さかにみえくるも、影はかりのやうなるとうらむるよし也

765わすれ草たねとらましを

あふ事のかたからんとかねて期し侍らは、忘もはてぬへき物をと、我心をせむる也

766こふれともあふ夜のなきは

義なし

767夢にたにあふことかたく

心は明也、下句の心珍しくや

768もろこしも夢にみしかは　　けんけい法し

我中は夢にさへみえねは、猶はるけきのよし也

769ひとりのみなかめふる屋の　　さたのゝほる

なかめふる屋のとは、たえゆく人を思侘て、打なかめ〳〵ゐたる屋の心也、程をふる心を、やかてなかめふる屋とつゝけたり、つまは軒の事なるへし、下句はあらは也、又云、かゝる古屋のつまには、忍草ならてはなきの心とも、つまは思のつまの心もあり、なかめふる屋、雨ならねと、きゝのよきやうによむへし

770我やとはみちもなきまて　　遍昭

あらは也、猶まつうちの心は、うつるともおほえぬにの心にや、かんふかき哥也

771今こんといひてわかれし

又こんと云て立わかれし人なれは、やかてもとふやと思へは、こぬ夜のかさなるよし也、思くらしのとは、ひくらしにそへたり

772こめやとは思物から

これも毎夕たのまぬ人を待よし也、折ふしの感にもよほさるゝ心、まことに哀ふかき哥也、吟味すへし

773いましはと侘にし物を

御抄云、いまはと思きりてわひにし物を、さゝかにの又人をまつへきやうに、我をたのむると云よし也、しはの、しもしは、たらねはくはふる也

774今はこしと思ふ物から　　やまぬかは、かな也、身をせめて思よし也、またもの、たもし、可濁也

775月夜にはこぬ人またる　　月にいとゝ恋しき心も一しほなれは、よし〳〵かきくもり雨もふれと云也、さてもたのむ所はなけれは、侘つゝもねんと云儀也、尤余情かきりなし、是は篁か哥也

776うへていにし秋田かるまて　　立わかれて後、月日へたる心也、田と云物は、うへしはしめのことはりたかはぬ物也、されは約を変したる心をうらむる也

777こぬ人をまつ夕くれの　　いかにふけはかといへる、肝心也、又云、いかにふけはかとは、思の切なる時のうらみ也

778ひさしくも成にけるかな　　おもひ入て見侍へき事とそ

779すみの江のまつ程ひさに　　かねみのおほきみ　　首尾明也、あしたつは此所〈に〉よせあり

780みわの山いかにまちみん　　伊勢　　此哥は、我いほはみわの山もと恋しくは、と云哥を本哥にてよめり、本哥は、とひくへき人をまつやうの哥なれは、その心にあたりたつぬる人あらしと思へは、いかにまちみんといへるにや、こと書に其心明也、もろこしのよしのゝ山、とよめるは此哥の返し也

781吹まよふ野風をさむみ　　雲林院のみこ　　吹まよふは、やう〳〵あらくなり行風也、さむみも其心に叶也、またさかりなるへき萩のたへすうつろふやうに、またきうつろひゆくか也、野風はいかにそや侍れと、こゝにてはきゝにくからすとそ、行か

は、かな也、かとうたかひても子細なし、但、哉は思入所ある也

782 今はとて我身時雨に　　をのゝこまち

御注に、いひし詞のかはるとうらみられてよめる也、とあり、ふりぬれはゝ、老にあらす、ふるされぬれは也、御注の心ならは、ふるされぬれは、たのみこしことの葉もなしといへるにや、又云、此ことのはは、人のこと葉也、心かはれは、ことの葉もうつろふよし也、返哥には此儀可然也

783 人を思心木葉に　　小野さたき

前の哥返し也、あさはかには思はぬ心なれは、かろくちりも乱しと也

784 あま雲のよそにも人の

めにはみえてしかも遠さかる人を、天雲によそへたり、かもし、かな也

785 行かへり空〈に〉のみして　　なりひらの朝臣

ふるは、へぬる也、物語には、又おとこあるといへる心を読りと云、此集にては、たゝそなたの心はけしけれはと云よし也、此五もし、天雲をかくなをせり、うつらとなきてとしはへんには、かはるへしとそ、可尋之

786 から衣なれは身にこそ　　かけのりのおほきみ

なれゆかはさりともむつましからんと思し人の、いとゝあひかたけれは、よそにのみ恋んとはおもはさりしと云也

787 秋風は身をわけてしも　　とものり

心は身のうちにある物也、秋風は身をわけてもふかぬに、心のちりて一かたならすなるを、身を分てふかは、心の空にちるもことはりなるへし、さもなきを、こは何事そなといへるさま也

788 つれもなく成行人の　　源　宗　于

秋よりさきとは、とりあへすかはる也、此秋世上の秋にはあらす、大かた我人の中に秋と云事あれと、猶我中のはまたきにうつろふよし也

789 しての山ふもとをみてそ　　兵衛

ふもとをみてとは、よみかへりぬる身なれはかくいへる也、つらき人より先こえしとてとは、さすか又したふ心、又うらむるよし也、かやうの哥、煩しく心得ぬれは、正道にたかふ也、よく正直にしかも優に云へし

790 時すきてかれゆくをのゝ　　こまちかあね

思のもゆるよしをいはんとて、こと書にも、やけたるちの葉とはかける也、たゝ枯たる茅の葉なるへし、さて時過ては、寵愛の其時過てと云義也、やけたるちのはを、時過てかれ行人によそへて、やけたるといふに、我思のもゆるを比したり、小野氏の人の哥にて、何となく哀也

791 冬かれの野へと我身を　　伊勢

思せはとは、思はゝと云義也、冬枯の野は限のやうなれと、行末のまつ事あり、我身はたのみなきよし也

792 水のあはの消てうき身と　　とものり

きえてはかなきを、習のうき身とはいひなから、猶なからへて、もしやとたのむよし也、又云、おもひきえ〳〵する憂身と也、されとまへの説しかるへし、きゆるをはかなきにとる也

793 みなせ川ありて行水　　よみ人しらす

此河うへはたえたるやうなれと、下にかよへは、かはるとおもふ人も、もしや又たえぬ事あらんと思ゆへに、なからへてたのむよし也

794 よしの河よしや人こそ　　みつね

絶たる人の心こそつらからめ、昔かけし情のことのはは、いかゝ忘れんと云也、世上の義も此心侍へき事とそ

795 世中の人の心は花そめの　　よみ人しらす

義は明也

796 こゝろこそうたてにくけれ

我心を悔て歎よし也、此集に此詞おほし、みなうた

ゝと云心也、是一首、世上に云うたてしきと云にお
なし、さのみこのましからぬ詞也

797 色みえてうつろふ物は　　こまち

色ある物こそうつろふと云ことは侍るにと云心に
や、てもし可濁、但、東家には清ていへり、其は猶
うつろふ所のことなるを、よくいひ立る儀也、猶お
もしろしとそ、両説共可用之のよし也

798 我のみや世を鶯と　　よみ人しらす

人の心の花とちりなはとは、ふかく思し人のうつろ
ひはてん後はと云心にや

799 おもふともかれなん人を

花をおもふ心は、まち初しよりいか斗の心つくしか
侍し、されと人の心をもしらすちりはつるはつらけ
れとも、なかく其うらみをとをす心はなき物なれ
は、そのことく哀とおもふ人なりとも、かれなんを
は力なし、いかゝはせん、よしやうらみをものこさ
しと云にや、此理又人の可思所也

800 いまはとて君か枯なは　　よみ人しらす

君か心いまはと絶はてなは、花をもたゝ独のみみて
こそ、猶過にし人をも忍はめと云にや、忍はんと云
か哀ふかき也、又みてや忍はんは、なくさまん也

801 忘草かれもやすると　　宗于あをん（あをん、朝臣とヨム也）

あらは也、珍しき作也

802 わすれ草なにをかたねと　　そせい

つれなき人とは、つゐに打なひく世もなくして、剰
思くたし年月をふれは、中〳〵いまは我も忘てんと
思也、されは我心に生よとおもふ忘草のたねはつれ
なき人の心よりおこる義也、尤珍しき心也

803 秋の田のいねてふ事も

いねてふ事もは、ゆけなと云心と也、又云、いなと
いふ事もかけなくにと也、いやといふ事もいはぬに
と云義也、心はいつれもあらは也、されと人をいね
と云よりも、いやともいはぬにと云は、哥さままさ
るにや、人の所好によるへし、かるは、苅とかるゝ

とをそへいへる也

804はつ鴈のなきこそわたれ　きのつらゆき

世中の人の心は、うつろひたのまれぬ物の義也、世中の人と、大やうに世間の人にいひたるか肝心也、かくいへるもおもふ人の義也

805あはれともうしとも物を　よみ人しらす

御抄、猶あはれともは、愛しあはれふ心也、うしは勿論也、物思時の様也、されは、かゝる折ふしは、いかてか涙のいとまなきそと也

806身をうしと思にきえぬ

不便なる哥也、人をうらみてきえもはてはやと思へと、其も叶はぬ物なれは、力なく人も絶はて、たのむかたなき身なから、かくてもへぬる世にこそと打なけく心也

807あまのかる藻にすむ虫の　典侍直子（二条后の御事也、可請口伝）

此哥は二条后の哥也、此集にはなを（直子）い子と入り、作者なるへし、此后、わか御ふるまひのよろしからぬ事のみありしを、かへりみる心もなく過給ひしを、我からなり、世をはうらみしと思返すこと、ありかたきにや、此集に二条后とのみ入きたるに、此哥斗を別に名をのする事、貫之か心侍るらんかし、此哥、此集の中にも肝心する所侍とそ、此集はこれ道を守る随一也、又典侍とあるは、作者の名を引さけて書事あり、直子は作名也、此哥は一部の大意也、非をくゆる外に道はなき物也、知非聖始なりと云事是也、尤以可思所也、猶可受師説

808あひみぬもうきも我身の　いなは

あひみすなりきぬる事のうらみも、又自然のうき事も、たゝ心ひとつよりありそめし歎也、しかるを、又あはんとするやうに、ひものかひなくとくるは、此ことはりをしらすして、とくるよといふよし也、下心、一切世にありとあり、なしとなす事は、たゝ我しわさ也、仏神の力をもかるましきよし也、はかなきしるしなとをはたのむましきの教也、ひものと

くるは、あふ事のしるしなるを以て、此理をいへる也、上句、我をこたりのある事をよめる哥にこそ

809 つれなきを今は恋しと　　すかのゝたゝをん

此つれなきは、常の義にあらす、かはりはてたる後の事也、其を思きらす、たのむ心を、心よはくもとはいへり、かもしは、かな也、下心、一定なるまし き事を、もしやとたのむましきの教也

810 人しれすたえなましかは　　伊勢

我中の世上にしられて、さていたつらに成たる所、一入の恨なる由也

811 それをたに思ふ事とて　　よみ人しらす

みきとないひそとは、其に付ても人のうたかひ思事もやと云心也、かはりはてゝの後の哥也、部立の儀也、常の忍恋にあらす、忍て人もしらす、なれこし人のかはりての事なるへし、其をたに思事とてといへるに、数〳〵のうらみこもりてきこえ侍り

812 あふ事のもはら絶ぬる

絶ぬはしめの恋しさは、たのみもあれは、真実絶はてゝの恋しさにたくへてみれは、こしかたの恋しさは数にもあらぬよし也

813 わひはつる時さへ物の　　

侘はつるとは、人のたえはてたる後の我思也、今は中〳〵思もなかるへきに、かなしきはいつくを思出る涙そと心を我とせむる義也

814 うらみてもなきてもいはん　　藤原おきかせ

絶はてゝ後は、たゝ我に対する物は、かゝみの影ならてはなけれは、かくいへる也、うらみてもなきてもいはんかたなきと、絶たる人を思心のせんかたなきなるへし、独身に成たるさまにこそ

815 夕されは人なき床を　　読人不知

人のとふ夜なとこそかくもせめ、さもあらぬ床を打はらひなとするは、心もうか〳〵と狂したるやうなれは、我ことわさのはかなきを、歎かんためとなりけるよと也、尤哀あさからす、我身かは疑也

816わたつみの我身こすなみ

勘云、すへて浪こゆると云心は、末の松山よりおこり侍れと、度ことに、末の松山としもをき侍らし、惣の心は、変しはてゝ、かゝる所もなき人を、猶立かへりうらむる事のはかなきを歎く義也、つるかなと云とちめたる所に心を付へし

817あらを田をあらすき返し

あら田よりたひ〳〵すき返し〳〵する物なれは也、人の心はゝやうつろひはつると思へとも、くり返し〳〵実否をみてこそと云也、かくいへるは、はかなきか感となる也

818ありそ海のはまのまさこと

勘云、たゝまさこによせて、かはらす、久しからんとたのめしは、忘るゝ事のおほきなるにこそ、ありそ海は大海也、心あるへし

819あしへより雲井をさして

あしへよりたつ鴈の、次第〳〵に遠さかりて、はてはめにもみえぬ物なれは、我中の遠さかりはてゝ、便もなくなれるによせて歎心也

820時雨つゝもみつるよりも

大かたの世の秋に、万の草木時過て、枯行比の物かなしさにも、人の心の秋は猶わひしと也

821秋風の吹とふきぬる

其人ひとりの心の秋風に、ゆかりの心さへみな色かはる義也、ふきと吹といへる面白や、世上に此理明也

822秋風の吹うら返す（にあふたのみこそ）　小町

あふたのみとは、すこし秋の田をよそへよめり、我身むなしくなといへる、あはれ浅からす

823炎風の吹うら返す　平貞文

うらみても〳〵といはんため也、心あらは也

824秋といへはよそにそきゝし　よみ人しらす

義なし

825忘らるゝ身をうちはしの

中絶するかと思し人の、其まゝ絶はてゝ年へたる由にや、そはに付たる不用

826 あふ事をなからのはしの　　坂上これのり

逢事もなき身なから、もしや〳〵と恋わたるあひたに年をへて、身さへふり行を歎よし也

827 うきなからけぬるあはとも　　とものり

うきなからけぬるとは、うかひ〳〵やかてけぬるとは、はかなきあはと成なゝんと也、行末とてもたのまれぬ身は、あはのやうに消ねかしと思わひたる心也

828 なかれてはいもせの山の　　よみ人しらす

いもせの山の中におつるとは、ふたりの中のたえぬことはり也、へたつる心にはあらす、此哥は恋部五巻をかねたる哥とそ、むつましき斗のかきりは夫婦程の事は侍らねと、なからへもて行は、すい老になり、何事もはかなき習なれは、よしや世中といへり、又云、天地と云、陰陽と云、一切みなあひならひてかけぬ物也、いはんや、夫婦はことにむつましき中なれと、もしはおとろへ、又は、さらてもはなるゝ事あることはりをかくよめり、仰は弥たかきことはりなれは、筆にあらはしかたきことはりにこそ、郭公なくやさ月のといひしより、色〳〵さま〳〵の恋のこゝろいたり〳〵て、たゝよしや世中におさまる也、恋路はつゐに邪正一如の道理也、一部のさとり此哥にこもるへきにや、尤以可仰〻とそ、猶云、恋部初に、郭公なくやさ月といひしより、まつに思をつくし、逢夜をうらみ、別をかなしみ、絶るを歎来て、其事みな事絶て、此哥、上句に恋の大意をのへ、下句にて、よしや世中を休したる所、言語のをよふ所〈に〉あらぬ也

（頭注）本以墨被滅、猶君臣父子のあひたよりもむつましきはいもせの中也、其もたゝかきりのことはり一切にわたる心にて可思道也、されは此哥万事のかきりになる哥也

哀傷哥 第十六　三十四首

此巻は巻の中に部立無之、又貴賤なとの次第をたてす

829 なく涙雨とふらなん　小野のたかむらの朝臣

かへりくるかにとは、道まかふかにの同心也、わたり川は三津川也、思ひの切なるまゝに、あるましき事をいへる所哀也、長高く、珍しく、又歎のふかき所もこもる也、此巻講尺の時は他巻をませす、一巻を一度によむ事故実と云々

830 ちの涙おちてそたきつ　そせい法し

君か世とは、忠仁公の在世を云也、心はあらは也、哥のことからもたけたかく、歎も切なる心也、白河のあたりにと詞書にいへるは、彼君住給へるあたりなれは也

831 うつせみはからをみつゝも　僧都勝延

蟬はむなしき後もからをとむる物なれは也、土さうなとにや、かくよそふらん哥さま、たけあるにや、祇説、土さうならすともかとあり

832 ふか草の野への桜し　かむつけのみねお

墨染にさけを、かならす花も服衣をきよといふにあらす、思の切なる時、かくいへるさま、優に又哀ふかきにや

833 ねてもみゆねてもみえけり　きのとものり

夢なる所をつよういはんとて、ねてもみゆ、ねてもとは云也

834 夢とこそいふへかりけれ　きのつらゆき

思けるかなとは、なけきに打おとろき、こし方をさへ歎観する也

835 ぬるかうちにみるをのみやは　みふのたゝみね

明也、夢の哥あまたあれと、各心かはり侍り、心をつくへし

836 せをせけは渕となりても

瀬をせけは、ことに水もたきる瀬の心あり、思へ

し、されと渕とはなれととまる習あり、別はせくかたなきを歎よし也

837 さきたゝぬくゐの八千度　閑　院（女房也、誰共なし、いたりての上臈とはみえぬにや）

流水かへらす、後悔先にたゝすと云事にて、よみたてたる哥也

838 あすしらぬ我身とおもへと　つらゆき

此哥は、友則此集撰者にて、しかも集も事をはらぬに失ける時よめり、大方哥さまも心詞たくひなく侍を、いとゝ時にあたりてのあはれ、まことに其世まておもはるゝ哥也

839 時しもあれ秋やは人の　たゝみね

此哥も同時の哥也、以前のはことはりをせめて哀に、これはいかにも優にして、しかも又其心哀ふかしとそ、秋はたゝなる人たにあれは、いはんや愁ある人の心いかん、此両首の作者、心を思やりて見侍へし

840 神な月時雨にぬるゝ　みつね

思のうちに、折しも神無月の時雨の梢をつく〳〵となかめて、たゝわひ人のと、我袖の紅涙を思よそへ侍り

841 ふち衣はつるゝ糸は　たゝみね

重服なれは程をへたるに、藤のやつれもいとゝしき比、かく思よそへたる、あはれにや

842 あさ露のおくての山田　つらゆき

こと書、おもひに侍けるころ、山寺へまかりける道にてとは、法事なとの便にや、秋田なとの色付て、露なひきたるなとをなかめてよめるなるへし、秋の田は、種をおろすより秋までは、色〳〵の造作ある物也、人の世中、又此人身をうくるより、さま〳〵の作法侍り、されとも、はかなうなる世のことはりはかりなる物なれは、山田のいねにたとへいへる也、朝露とをけるも心あり、山田のいねは久しきやうなれと、秋になり、今はの程しはし也、朝露は又もとよりかりなる物也、久しきもほとなきも、つゐにか

りなる事はおなしけれは、こゝを観してよめるにこそ侍らめとそ

843 墨染の君かたもとは　　たゝみね

こと書、思ひに侍る人とは、おやの服なとなる人にや、さやうの人をとへは、我人の涙のひまなきをいはんとて、君か袂は雲なれやといへり、打みるに哀にたへぬよし也

844 あし引の山へにいまは　　よみ人しらす

足曳の山へ、肝心也、女の身にて都をはなれ、山里に侍らは、さらてもかなしかるへきを、ましておやのおもひにて、長〳〵とこもりゐたる程、切なる心にや、下句、哀ふかくきこえ侍り

845 水のおもにしつく花の色　　たかむらの朝臣

御抄に、此しつくといへるをしつむにはあらす、しつむはそこへ入なり、ひたるも水に入也、しつくと云は、洗(沈)なれとも水に入はてすなと、色〳〵書給へり、所詮たゝしつくはかくるとおもへは、顕ぬる義なるへし、其ことく君か面影のきえ行様なるも、猶みる心ちするよし也、諒闇の時なれは、池水の花をみてよめる心おもしろくこそ

846 草ふかき霞の谷に　　文屋やすひて

御国忌、これもおなし諒闇の時の事也、五もしは深草の心也、霞の谷に影かくすは、君の崩御をは昇霞といへるなれは也、けふにやはあらぬとは、けふにてはなきかと云心也、又かくれ給し日、今日にあたれ共、御別の遠きをかなしみて、其日の事を今日にてもいかてあらぬそと歎く心にや

847 みな人は花の衣に　　遍昭

言書に明也、猶かはきたにせよといへる、哀ふかくことはり至極せり、此僧正は良少将とて、勅命に相叶へる人の、御門に別奉て、世をのかれての心おもふへし

848 打つけにさひしくもあるか　　近院右のおほいまうち君

こと書に心をつくへし、なき人の宿とみれは、おなし木葉の色も物かなしきやうの心也、尤哀ふかし

849 郭公今朝なく声に　　つらゆき

高恒は貫之忍へきゆへある人にや、心は、此人にわかれしかなしさも、日月過行は打も忘て、年立かへり、程なく夏に成ぬ、大かた、こその此比にやなとは思つゝ、打まきれ過る比、郭公のあらたに打鳴たるにおとろきてよめり、余情限なし、やすらかなる哥は心を付へし

850 花よりも人こそあたに　　きのもちゆき

大かたこと書に明也、猶花なとうへをきては、いく世の春にもあひなんとおもふ習なるを、一とせの花さへさきあへぬまに、身まかりぬるか、思かけぬ心あはれふかし、いつれをさきにといへる詞切なり、心すかた哀に又おもしろし

851 色もかもむかしのこさに　　つらゆき

かけそ恋しきは、なきかけの事也、ことはりかんふかくや

852 君まさてけふりたえにし

こと書にあらは也、猶うらさひしくは、何となくと云心也

853 君かうへし一村すゝき　　みはるのありすけ

是もこと書に明也、猶野へ共なりにけるかなと、とちめたるに心を付へし、さうしとあるは、としもとの北方也、御春はそこにつかへし人也

854 ことならはことの葉さへも　　友則

こと書、とものりかちゝは有常也、惟高へゆかりなる人なれは、其哥をめしける也、哥は義なし、からめいたる哥のさま也

855 なき人の宿にかよはゝ　　よみ人しらす

なき人のやとゝは、むなしきあとのやとり也、かゝる所にかよふとならは、かけてねをなくと、其なき人につたへよと也、此鳥は冥途にかよへは也、かけては、人なきやとの思と、其人いかにとおもふ、二

の心をかけて也

856たれみよと花さけるらん

白雲のたつ野とは、をくりの煙にもあらし、此哥の心は、さるへき人なとのむなしくなれる跡に、哀となかむる人もなき宿なとに、春の花のさきたるを打なかめて、よろつ心ほそき時よめるにや、無人の跡なれはとて、雲のたつ野となるへきならねと、荒たる所のさまをいはんとてかくよめり、されは、さうのけふりをさして白雲と云はかりには侍へからす、能く心を付へきにや、白雲のしろきにも必心を付すして可吟にや

857かす〳〵に我を忘ぬ

こと書、五のみこいつれともなし、王孫なるへし、心は、此山の霞、さうの煙を心にこめて、大かたの山の霞をもあはれと云心なるへし、ろう〳〵と山は打かすみて哀ならん折は、思出よと云心にや、此女みこ、日ころのうらみはれぬ事なとのありけるを、心にこめて、山の霞をみよとはいふ也、数〳〵にとは、何事につけてもなと云心にや

858こゑをたにきかてわかるゝ　よみ人しらす

こと書に心は明也、声をたにきかぬと云其心也、哀ふかゝるへし、なき跡までふかき契のすゑをおもふ心かなしくや

859もみち葉を風にまかせて　大江千里

風のさそふ木葉はかきり〈の〉時いたる物なれは、思よせていへる也、やまひをもき折の心、まことにかなしきみるめなるへし

860露をなとあたなる物と　藤原これもと

今はとおもふ人の心のかきり、哀ふかしともいふにたらすこそ

861つゐに行道とはかねて　なりひらの朝臣

此哥を、昨日までけふとは思はさりしと云義、不用之、只打まかせて、きのふけふとはしらぬといへる、尤肝心也

862かりそめの行かひちとそ　ありはらのしけはる

行かひちとは、行かふみちと云心也、其に甲斐国を立入る也、道の空にてなくならん心、猶一しほかなし、母にみせよなといひける心をも詠吟にこめて、此哥を〈は〉可思也かし、此哀傷部説儀の事、一日に読事とそ、是故実なりと承き

雑哥上第十七　七十首

863我うへに露そをくなる　よみ人しらす

此哥は身の上に更つねになき思の露をいはんとて、天河を渡る舟のかいのしつくにやといへり、思よらぬ心也、露のおほきとは思へからす、たとへは、鴈の涙やおちつらんなと秋部にいへる其心とおなし、此哥を雑哥の第一にをく事心あり、別紙在之

864おもふとちまとゐせる夜は

あらは也、おもふとちは朋友なるへし

865うれしきをなにゝつゝまん

あらは也、物を袖につゝむと云は、賞翫の心、又忝きやうの時いへる也、猶可請師説

866かきりなき君かためにと

此哥左注に忠仁公の哥のよしみえたり、伊物には、業平の哥とみえたり、殊ろくなとつかはすといへり、もし忠仁公の家集なとに書くわへ給ける、紛けるにや、心は、志をいたしてなと云心也、時しもわかぬ、此集にては雑の心あるへからす、作花の事も入ましき也、但常の花も年〳〵絶ぬ物也、此集にも、花のことよのつねならはといへは疑なし、殊君かためといへは、君にひかれてときはなる心もあるへし

867紫の一もとゆへに

其人ひとりゆへに其ゆかりまて切に思ふ義也、たとへ哥の心にや、下心、あるましき執心にひかれて、分別の心なくして愛すましき物をも愛するのいさめ也

868 むらさきの色こき時は

心まへの哥におなし、色こき時とは、寵愛のさかり也、下心、又同前

869 色なしと人やみるらん　近院右のおほいまうち君

こと書にあらは也、思心も色にはみえぬ物なれは、白きゝぬによせたり

870 日の光やふしわかねは　ふるのいまみち

こと書、なんまつは実名也、浪松也、なを心は、やふしわかぬはめくみのへたてなき心、はなは栄花の義也、猶石上は氏也、磯上といへは浪松といへる利口のやうなり

871 大原やをしほの山も　なりひらの朝臣

神代の事もとは、天照大神、春日明神は陰陽の二神にて、君臣合躰の御神也、今は二条后は御子に春宮を持たてまつり給へは、又君臣の契かはり給はす、されは、をしほの山も神代を思出らんといへり、恋の心にあるへからす、猶云、東宮は陽成の御事、此君二歳の御時、其御祈のため行啓也

872 天津風雲のかよひち　よしみねのむねさた

五節は袖ふる山に天人のくたりし事をうつせり、さるにより、今の舞人をも天人になすらへて、雲の通路吹とちよと、只今の乙女の舞にかんしていへる也、此哥、遍昭の哥に尤詞心たくひなしとそ

873 ぬしやたれとへとしら玉　河原の左のおほいまうち君

こと書に其理明也、まへの五節同時にはあらさるへし、さらはなへてのとは、とへといはねは、よし〳〵たれかにてもあれと云也、憐愍の心也、ことからこけておもしろき哥とそ

874 玉たれのこかめやいつら　としゆき朝臣

こと書、くら人ともは女蔵人也、ともかくもいはす成けるとは、こかめのさま又其ことはりをかしけれは、后の御まへにてわらふなるへし、さて、玉たれ〈の〉こかめの事、御抄にも風俗の哥によみなら

はしたるとはかりあり、其いはれ侍へきを、当座の哥にたかふ心あれは、あらはさすとそ、可受師説、心はすてに后の御まへに出たれは、其を沖に出てけりといへり

875 かたちこそみ山かくれの　　けむけい法し

こと書、女とものわらふといへは、かたちなき法師にや、哥の心は明也、心は、花にといへる所おもしろし、作者の心に成て可思、心あるへき哥也

876 蟬の羽のよるの衣は　　きのとものり

よるの衣のうすきとは、如何なれと、方たかへに立よる所なれはうすき縁といはんとて蟬の羽のよるの衣と云也、一夜はかりの契なれと、あるしの心のなつかしく、情ふかきをうつり香こくもとよめる也

877 をそく出る月にもあるかな　　よみ人しらす

我あなかちに月をまつ心よりさつしいへる也

878 我心なくさめかねつ

此哥、昔伯母すてたりけん人のよめると大和物語に侍也、不用之、この心は、物思〈やうなる〉人の更科は月の道地なれは、此月を見侍らはいかにも我心もなくさむやと思に、おもふより猶月すみのほりて、哀もふかきに、思人にもみせまほしく、こしかたの空も恋しく、心一のさま〳〵に成行は我心のなくさめかたきをかくよめるにや、又云又云、此山の月をなかむるに山も月もたくひなくすみわたりたる、此かんに如何ともすへきかたなけれは、其心をなくさめかねつと云也、哥はたゝ本説由緒なといふ事も入へからす、さしむきて心も優にすかたもきよくあはれのふかきを、道の本意とは守るへき也とそ

879 大方は月をもめてし　　なりひらの朝臣

大方はとは、俗に十の物七八なといへるかことし、大よそと云おなし事にや、心は、人の身には此世のちの世につけても思へき道のある事なるを、秋ことの月に思うかれ、なかめなれ行まゝに打おとろきて、こしかたの身のをこたりを打歎て、月をもめて

しこれそ此と、心に思つゝくる哥也、かならす月に限るへからす、折ふし月にむかへは、月をもとはいへり、何事にも物にとんして身上を忘るゝ人は如此たるへき也、是は心にある哥也、かくよめる上は詞に出ぬにてはなけれと、むねのうちにふかく観する心あれはかくいへる也とそ

880 かつみれとうとくもあるかな　つらゆき

かつはかく也、心は、こと書に侍るやうに、みつねか尋たるを月によせて、かくみなからも、みつねか心のうときを、月影のいたらぬ里によせたり、みつねか貫之のかたへうとかりしをうらむる心あるにや

881 ふたつなき物と思しを

心はあらは也、無余情哥のよしいへり

882 天河雲のみおにて　読人しらす

月のはやくうつり行をしたひてよめる也、はやき事をいはんとて、雲のみおとも、天河とも云也、只月のうつるをみて、かやうにあんし出たる也

883 あかすして月のかくるゝ

心はあらは也、みるうちに月のかくれたるをしたふよし也

884 あかなくにまたきも月の　なりひら

こと書、やとりにかへりては水無瀬也、かくるゝかはかな也、心は明也、山のはにけてといへるを、山のは〈に〉さしむきてみれははいかい也、時にのそみて物をねかふはあるましき事をも思ふ習也

885 大空をてり行月し　あま敬信（キヤウ）

こと書には、その事やみけるとあれと、つゐに斎院かはりたるよし小書にみゆ、哥の心は、一旦のなき名はつゐに晴行よし也、女の哥のやうにもなく、古風躰也

886 いそのかみふるからをのゝ　読人しらす

此哥恋にあらす、たゝふるくしれる人を思よし也、これをもとゝして恋にいはんも勿論也、勘云、ふるからをのは枯野をいふ、冬野には、なへて木葉、草

の色ものこらぬに、柏は枯たる葉の枝につきて、春まておちぬ物なれは、ひとりもとの心忘ぬ物とてよめるとそ聞侍しかと、これを説なとゝて申へき事にもあらす、とてもかくても侍りなん、猶惣の心は述懐也、昔はさる人の、とありしかくありし物をと、色〻にみし世を忍やうの心とそ

887 いにしへの野中のし水

御定説云、むかしよかりし水と思へは、ぬるけれともくむ也、そのことく、うときやうなる人なれと、もとのよしみを思てたつねいふ義也、是はもとしれる人につかはしたる哥也、恋にあらす、是も老後述懐也

888 いにしへのしつのをたまき

御注、たかきもいやしきもすきし事は詮なし、いにしへさかへたりしを以、今のおとろへもかくされす、今さかへたるをもて、いにしへのつたなきをもおほはす、されは、さかりはあひともに一たひありし物也といへる也、たゝとにかくに、いにしへの成たる事は身に思のこして詮なきよし也、只かひなきいにしへを忍ふこゝろ也、これも老人の述懐同

889 今こそあれ我もむかしは

勘云、おとこ山、おとこの遁世の後、むかしを思出てよめるとのみしりて侍と云〻、御注、男山とは世にありし時の事也、さかゆくは栄花の事也、又云、さかゆくといはんためにおとこ山とも云なるへし、此両首は世中の不定なる事を思て、つゐの身の事を心に持にや侍らん

890 世中にふりぬる物は

御注、猶此哥は作者さる人のなるへし、古たるはかりをいふにあらす、なからのはしといひて、名たかき物も世にふるさるゝことく、我身もかうはあらしと思とも、世にふるされあまされたるよしの心也、誠甚深の義にや

891 篠の葉にふりつむ雪の

御抄云、くたつとは、雪のおもれはもとのかたふきくたる也、猶わかさかりはいかにとなけきたる心にや、はものはの字可清也

892おほあらきの杜のした草

此五文字、おあらきと読へしとそ、ある義にはもしのまゝよめりともいへり、心は、大小の人にすてられたる義也、駒は無心に人は有心の物也、されは老ぬれは、心のあるにもなきにも思すてらるゝよし也、左注如常

893かそふれはとまらぬ物を

としといひてとは、急なる心也、心は、かくしはしもとまらぬ年をかそへて、はかなくことしは、いとゝ老ぬるよと歎也

894をしてるやなにはの水に

此てもし清と云説如何、いつれにもをし出ると云儀也、水のをし出る所河口なとの事歟、みつといふに水の字をかけるは濁てよむへき為也、又みつの寺、大伴のみつなとをも濁と云説如何、当流にはさもあらす、からくもとは、いたくもなと云心也、上は序也、たゝ苦労して老たるよし也、老を歎心也、左注如常

895老らくのこんとしりせは

此哥も猶あるましき事をはかなくかくいへるなるへし、此三首みな心のをろかにして、さとき所をいはぬや肝心ならん、たとへは、神明の和光同塵する、同事也、衆生をろかなれは、神も又をろかになりて道引給かことし、はかなくいひたる、下に神明の心も侍へし、惣してはかなきやうの事や哥道のまことならん、左注に、みたりの翁の事種々名あり、可請師説

896さかさまにとしもゆかなん

これもたゝあるましき事を老のかなしみのあまりに歎いへるなるへし

897とりとむる物にしあらねは

ことしもかく過る事よといひては、年〳〵過る心を、あはれ、あなうとなけきたる程、尤あはれふかきにや

898 とゝめあへすむへもとしとは

とゝめあへすはやき物なれは、ことはりにとしとはいはれけりと、上句をはとちめて、かくも我よはひのつれなくて過ぬる事よと打歎心にや、むへもとしとは、年と速とをかねたり、しかもはかくも也、さうもといふ心にもつかふ也、所によるへし、よはひかのか文字は哉也、又云、しかもつれなくは、上を二度返してかこち云心也

(頭書) しかもつれなくは、思とるともなくとし〳〵過るよはひを歎く心也

899 かゝみ山いさ立よりて

心は明也、序にそのさまいやしといへり、心は、けにあはれ侍にや、仍花のかけにやすめるとはいへるなるへし、二三の句かいやしき也

900 老ぬれはさらぬ別の

御抄云、さらぬわかれは、不去の別也、のかれぬ由也、心は明也、此こと書に、とみの事といへるは、俄の義也、心ちなとわつらひける時にや

(頭書) 老ぬれはゝ生老病死の義也

901 世中にさらぬ別の

千世もと歎は、物語にはいのるとあり、なけくといふに祈心は侍る也、人の子のためとは、公界の人也、かく云か優なるへし

902 しら雪のやへふりしける　ありはらのむねやな

一二の句は、かへる山、雪ふる所なれは枕詞也、されとも星霜のつもるよし也、帰る〳〵とは、年の立かへり〳〵老行よし也、かへる山は帰といはんため也

903 おいぬとてなとか我身を　としゆき

御抄云、せめきけんは、責来けん也、歎うらむる由也、こと書に心は明也

904ちはやふる宇治のはしもり　　よみ人しらす

万葉に、道早根(ママ)菟なとかけり、是は宇治の宇もしを執ていへり、如何、宇治橋守は神祇なれは、常のことく五もし可心得にや、されは、神とつゝけねともかやうにもつかふ詞也、橋守は姫明神也、我年の老ぬる事をなけくあまりに、橋守の年へぬるを哀と思心也、橋守はむかしより道をまもる神也、此哥は、道ある人の徒に老ぬる後、我身を橋守になすらへてよめる哥也、尤心面白くや

905我みても久しく成ぬ

是も老たる人の哥なるへし、心は義なし、姫松は松の惣名也、但年ふりたる松の一本なとはかりあらんをさしていはんはいかゝとそ、又小松ならは其理叶へきをいく世へぬらんなといへは、〈古〉木也、大小生すかひなるなとを云へきとそ、此哥猶可尋之

906住吉の岸のひめ松

心は義なし

907梓弓いそへの小松

あら磯なとに神さひてたてる松のかくあるへくもおほへぬか、大木なるをみて、うへし時、たれか万世までと、かねて種をまきけんと云心にや、哥さまゆかしき姿也

908かくしつゝ世をやつくさん

心は、かくしつゝとは、させるせんもなき身の徒に世をつくしてなからへぬる事を歎よめるにや、高砂の松は世をへて久しきも、世にしられ、其かひある物なれは也、古風躰也

909たれをかもしる人にせん　　おきかせ

心は、昔とありし、かゝりしなと云事も、又只今の身上もあはれむ人なくて、独身に成たる老後をなけくに、こゝに年へたる物は高砂の松なりけりと思に、其も又むかしの友ならねは、誰をしる人にて、心をものへんと也

910わたつみのおきつしら浪(ほあひに)　　よみ人しらす

塩あひにうかふあわはつくかたもなくて、しかもきえぬ物なるを、身のよるへなきさまなからなからふるによそへたり、下心、わたつみとは大海也、其を世界にとる、塩をはあちはひのかたへとる、又塩あひをは、善悪の間にとる、世界の善悪をあちわひみて、我身のうかひて、よるへなき理を思とるへきの教也

911 わたつみのかさしにさせる

わたつみとは、海童共海神ともかけり、心は、白浪の上に淡路嶋のうかひて、面白みわたされたるをみて、海神のかさしの白波を以ゆひたてゝ、此嶋をうかへたるかとみたるよしにや、眺望の心也

912 わたの原よせくるなみの

是も遠望也、よせくる浪はしは〳〵といはんため、しは〳〵はしけき也、しけくみまほしきと云也、心は明也

913 なにはかたしほみちくらし

これも遠望也、わか浦(ママ)やしほみちくれはと云同心也、あま衣は雨の心をそへていへる也、蓑のなすらへ也

914 君をおもひおきつの浜に　たゝふさ

こと書、貫之かいつみの国にといへる、受領にあらす、たゝふさは和州受領也、君をおもひおきつとは、よる〳〵思しよし也、我おもひて尋くれはこそ住所をもしれ、そなたよりはせうそこの志もなきといへるにや、鳴たつは、尋ぬるといはん為、又ありとたにきくと云便也

915 奥津なみたかしの浜の　貫之

沖津浪たかしと云は、名のきこえある心也、浜松の名にこそとは、かゝる名所のきこえすやはあらんと君を待わたりつると也、所からによりてこそ待〈え〉つれと述懐の心也、此二の名所泉州也

916 難波かたおふる玉もを

義なし、心は、述懐の由也、臣下は其ことゝなく

て、とをく行は徒にひまある故也、其は時にあはぬ也、されは、あまとなるといへるも其心也

917住吉とあまはつくとも　たゝみね

こと書に理あらは也、但、住よき所そと云人はありとも、其をたのみて久しくなありへそ、なれゆけは人の忘草も生るならひある物をと、其人をいたはりをしへたる也、人はつくとも〈と〉云へけれと、所海辺と云、又下〈に〉人と云字あれは也

918雨によりたみのゝ嶋を　つらゆき

一本きたれともは、蓑と云につきて着の字をもかねたる也、されと、けふゆけとには及へからす、名にはかくれす、難波によせたり

919あしたつのたてる河へを

白き鶴のすにたてるか浪とみゆるの義也、たつのむれゐたるなとをよめる也、すにたてるは河の洲也

920水の上にうかへる舟の　伊勢

こと書、中務のみこは寛平御子、延喜帝御連枝也、心は、伊せは法皇の御思人なり、しかも思に叶はぬやうの心侍ける比にや、今夜はこゝにもとまらせ給へかしの心也、其を直には申えぬ心を舟によそへていへる、尤おもしろく、君は舟なと云義、努々あるへからす

（頭書）又伊勢は敦慶親王の思人也、其比の事にや

921都まてひゝきかよへる

きこえたかき所なれは、〈都まてひゝきかよへると云也〉、琴と云につきて浪のをといへり、をしていへる義也、浪のをと云義はあるへからす、所水辺なれは、かれこれにかく云也

922こきちらす滝の白玉　行平

こきちらすは、山田のいねのたくひ也、心は、数〳〵みたるゝ心也、世のうき事のおほきにたとへ云也、我恋は浜のまさこのことし、心は明也、たゝかくしたてたるさま粉骨の至極也、猶かくいへは世のうきも多心也

923ぬきみたる人こそあるらし　なりひらの朝臣

滝の白玉の乱ちるを、水精なとのをゝぬきてみたすやうなれは、此水上にぬきみたる人そあるらんと也、さて袖のせはきには、数ならぬ袖には過分なるなと云心にや、述懐也

924たかためにひてさらせる　承　均（作者之儀まへにあり）

布なれやは布にてかあるらんと也、眺望也、心は明也、滝の哥共奇特也

925清滝のせゝのしらいと　神たい法し

たきの白糸をみて、まことの糸ならは、山分衣をも織てきまし物をと也、山分衣、よく滝の辺にてよめる哥に似合侍る也、肝心とそ、惣の哥は眺望の心なるへし、猶山分衣上下よく叶へり、哥の本躰也、往古の哥のすかた也

926たちぬはぬきぬきし人も　伊勢

たちぬはぬきぬきし人とは、仙人也、仙の岩屋とて滝門（ママ）にあり、心は、今は其人もなし、なにゝ布をさらすそと云也、又云、此人を常の人にして、誰かたちぬはぬきぬきし人の侍る、あやなくも、なにゝ山姫の布さらすらんと云義あり、此哥は仲平に忘られて、父か大和に侍る所へ行て住し比、龍門へまうてゝよめる哥也、山姫のはかなくせんなきを我思によそへていへり、わかいかにと人を切に思ても、其をさそと取用る人もなき物をと思よせたり、伊勢は常に物思をのみしけるよし家集にもみえ侍れは、哥に述懐のおほき也、是のみならす、哥人の一期のやうを尋〈知〉て、其哥の心をしれとそ

927ぬしなくてさらせる布を

布引にて七夕によめる哥也、我ぬしになりてかさんといへる也、滝の眺望也

928落たきつ滝のみなかみ　たゝみね

義なし、同眺望也

929風ふけと所もさらぬ　みつね

めつらしくいひたてたる哥也、同眺望也、ことのは

に及へからす

女房のさふらひ　台はん所也　　三条町（惟喬の母静子也）

930 おもひせく心のうちの

此哥、御門の御心なとをうらみ奉る事なとありけるにや、其折ふしなれは、我思を此絵の滝にそへていへり、心は明也

931 さきそめし時より後は　　つらゆき

これも絵に書初しをさきそめしと云にや、絵なる花なれは面白又祝の心もあり

932 かりてほす山田のいねの　　坂上是則

是も屏風の絵に、いねや鴈のあるを、かりてほすと云に、鴈をそへたる也、上句は、こきたれてといはん枕詞也、こきたれては、いねによせていへり、しきる心也、おちつく所は我なきわたると云義也

雑哥下 第十八　　六十八首

933 世中は何か常なる　　読人不知

あすか川のかはる渕瀬をみて、世中にいつれの事、いかなるわさか常ならんと思とる心也

934 いく世しもあらし我身を

心は明也、只あまのかる藻といへるか、みたるゝ心のみならす、哥のたけも高くなりて、めてたき也、此哥の心を人はよく思へきことはり也

935 鴈のくるみねの朝霧

此哥はくるみをかくし題にてよめるなと云、此集にては用ならぬならぬ事也、鴈のくるかたゆると思へは、又はきたり〳〵するを、我思にたとふると云は不用、たゝかりのくる峯の朝霧はれすのみといひすてゝ、下句を云へし、折ふしの哀をよくいひいてゝ優なる哥とそ、序哥なから、かやうなるは句になる也、可分別とそ

936 しかりとてそむかれなくに　　たかむら

五もしたつよき詞也、心は、うしつらしと云ても又そむかれぬよし也、されとも、うきふしことには先

なけかるゝ事、世上みなある事也、ことしあれはを下に付て意得へし、五句一連になまけたる所なき哥也、又人におろかなると云は此心也

937都人いかにととはゝ山たかみ　をのゝさたき

こと書に理あらは也、山たかみはれぬ雲ゐと云さま、甲斐のしらねなとのかけ思やら〈れ〉て誠哀ふかし、行平卿の、もしほたれつゝにはまさりたる哀也

938わひぬれは身をうき草の　小野小町

こと書に大かた明也、みかはのせうは三河允也、あかたみにとは田舎見にと云義也、小町かおとろへたる時節にや、心は、物を思〳〵てわひぬる身は、おちつきさたまらぬ物なれは、身を浮草とよそへたり、されはいつかたへもさそふ人あらはと、打歎いふ心にこそ、余情限なし

939あはれてふ事こそうたて

哀てふは、其事となふ物をたのむよし也、なからへは又いかなる事もやなと云義也、さらぬたに世はすてかたきを、もしやさりともなとおもふ心にひかれて、いとゝ捨かたき事を思返して歎たる心にや、うたてはうたゝ也、いよ〳〵なと云心也

940あはれてふことのはことに　よみ人しらす

心は、あはれ昔は、とありし物を、かゝりし物をなと云ことのはの義也、此ことのはにをく露は古を恋忍ふ涙なりけりと心にことはる義也

941世中のうきもつらきも

涙に告と云事はもとよりなけれ共、物ことにさし出る心をいへり

942世中は夢かうつゝか

心は明也、只よの中のはかなさを時にあたりて思とる時の義也

943世中にいつら我身の

我身とてある物は、いつらたゝありてなき物なり、されは哀とやとはなき物なれは也、あなうとはある物なれは也、又ひたすらうき物とやいはんと云義也

944 山里は物のわひしき

物のわひしきとは、万にことたらて、しかも哀にもさひしくも、とりあつめたへかたけれと、世のうきになすらふれは、猶住よきと云義也、さひしきといへるよりもわひしきは一事をさゝぬ詞也

945 しら雲のたえすたなひく　　これたかのみこ

此みこ文徳第一のみこにて、十禅の位にもつき給へき御身の、其ほいもかなはすして、しかも世をのかれ、をのゝ奥山ふかき里におはしまし比、世中を思とりて読給へる心、まことに哀あさからすこそ

946 しりにけんきゝてもいとへ　　ふるのいまみち

知にけんとは、世中のさはかしきさまは紛ぬ物なれは、しりにけんといへり、きゝてもいとへは、此理を我としらすは聞ても也、たゝ世中は風浪のさはきに風のしきるさまにてこそあれと、我心にも人にもをしふる心也

947 いつくにか世をはいとはん　　そせい

勘云、世をいとふとてもいつくにかこもりゐぬへき、心こそ野にも山にもゐるへくおほえねと也、又推する心は野にも山にもゆきて迷ひもこそすらめといへる心也

948 世中はむかしよりやは　　よみ人しらす

一説 むかしよりやうかりけん、又我身ひとつのためになれるにやと、二なからうたかはしき心也、惣別は、昔よりやはとは昔よりよもうからし、我身一のためにやと云義也、但両義共におもしろし

949 世中をいとふ山への

是は世すて人なとの、山家に卯花なとうへをきてよめる歟、我うき世といとふのみならす、草木さへうの花と云花さけるよと云義也、猶うきと云名をつきて、しかも色に出らんと云也、草木と云事、大やうに見侍へし、上古の哥はかやうにいへる所、幽玄也

950 みよしのゝ山のあなたに

ふかきよりふかきをもとむるは、世のいたりてうき

所もあらはれ、又世をいとふ心の切なるもしられ侍る也

951 世にふれはうさこそまされ

先上句詞つかひ妙也、末の句ことはりをいはて、岩のかけ道ふみならしてんといへる、尤優なるへし、岩のかけ道といへは、かゝる難所をもふみなれてと云所に甚深の心あり

952 いかならんいはほの中に

昔化外道四人ありしか、生死をかなしみて、あるは天にあかり、あるは海に入、あるは市に交り、あるは巖の中にこもりし事あるを思へると也、此説、講尺の時は慥申され侍し、祇聞書には、いかならんとは、世にすみ侘て、いつこのうら、いつれの山かくれにてか、なと思つゝくるに、こゝもかしこも、世のうかるへき事を歎て、いかならん巖の中にすまはかはと云也、猶甚深の義也、余情猶可工夫、巖の中までもうき事は至へきの心也、さて猶心に尋る心あり

953 あし引の山のまに〳〵

たゝ山にまかせてすまんと也、とにもかくにも今打まかせたる所に、哀も道心のふかき所もこもる也、あるかひは山のかひによせたり

954 世中のうけくにあきぬ

御抄に、うけくは世中のうきと云に同事也、山下かせのさむけくにもさむきよし也、世のうきにあきはつれは、おく山に行てや消なましと云義也、其を木葉にふれる雪を序のやうにいひなせり、ことに木葉にふれる雪と云事、哥のかさりとなれり、又一段はかなき心あり、可吟味〻〻

955 世のうきめみえぬ山ちへ　ものゝへのよしな

心は明也、同もしなきとあれと、えもし二あり、かなつかひかはる故也、こと書にてことにたくひなし

956 世をすてゝ山にいる人　みつね

よすて人の山にても猶つらくは、又いつちへゆかん

と、其人をせめて云やうの心にはあらす、猶其人に
心のおくのあるへきを思心おもしろくや

957いま更に何おひいつらん
こと書に種々の心こもるへし、哀ふかき哥なるへし

958世にふれはことのは茂き
ことのはしけきとは、世にふることわさの茂き也、
されは世のうきふしも一かたならぬ義也、呉竹は世
と云、うきふしといはん為也、鶯はわかねなきかち
なるにたとふる也、又云、ことのはしけしとは、世
中の人の物いひさかなくてやすからねは、鶯の如ね
なきかちなる心なりとそ

959木にもあらす草にもあらぬ
左注、高津のみことあり、桓武の御姫宮にて、〈高津
の内親王と号せり〉、平城御連枝なから思外に入内あ
りしか、又其ほいある様にもなかりけれは、木にも
あらす、草にもあらす、はしたなる身とよみ給へり

960我身からうき世中と
此哥二の義あり、一には、物思我身からうき世中そ
と云初て、人のためさへかなしまするの心也、又一
の義、我身からとは、世を主にして云我身也、我う
き世中と名をうちつきて、人のためさへかなしくあ
らするよと云也、世をすてゝと云よりこゝまて五首
一躰侍とそ、十分にあらぬにや、次の説は少誹諧に
成てよろしからすや

961思ひきやひなの別に　　たかむらの朝臣
ひなの別とは、田舎へわかれ行かなしみにおとろふ
る義也、羇旅部に、わたの原やそ嶋かけてとよめる
其時の事也、あまのなわたきはたくる義也、思はす
に心なきあま人と身をおなしうする義也
ことにあたりて　つみにあたる心也、宮のうちは内裏
也

962わくらはにとふ人あらは　　行平
彼卿流罪の事、其証なし、伝にも除名の義みえす、
但かく書る上はしはしなとありしにや、心は、わく

らはにとは、玉さかにもとふ人のあらは如此こたへよと云やる義也、尤哀ふかし、幽玄の躰也

963 あまひこのをとつれしとそ　をのゝ春風

こと書、左近将監とけてとは、解管(ママ)の義也、心は、女の只今とへるをかくいへるは、山ひこは物のひゝきにこたふるか、いつれかいつれともわかぬ物なれは、我身の我とも人とも思わかぬかなしみを、山ひこのとふかと思よし也、尤めつらしくや、我身の解管(ママ)せられて、我とも人ともわかぬ所をよそへいへり、音信しのしもし可清也

964 うき世には門させりとも　平さたふん

こと書まへにおなし、かやうの身と成て、猶いてかたき世のつらさをかくしたてたり、心詞又めつらしくや

965 ありはてぬ命まつまの

人の一生はたゝ露のうちなるに、うき事なくもかなとは、種々のうさつらさを心をこめていへり、一切の人の思へき所也

みこの宮　東宮の御事也

966 つくはねの木の本ことに　みやちのきよき

春のみ山とは、春宮の御事をそへいへり、つくはねの木の本ことに立よるとは、猶めくみをたのむ心也、春宮の御かたへ立よる人なとのもとをたのむ事あるにや

967 光なき谷には春も　深養父

こと書にあらは也、猶光なき谷とは、月日の影もいたらぬ所也、心は、世のめくみにあつからぬよし也、春をはめくみのかたにとる物なれは也、得は失のことはりなれは、それにあつからぬをたのしむ心也

968 久かたの中に生たる　伊勢

久方の中に生たるとは、月中に桂はあれはかくいへり、作意のなす所也、光をたのむとは、后宮の御かけをたのむ義也、中宮をは秋宮と申、月をかたとる

故也、此こと書、家集にはかはれり、伊勢は宇多御門の御子を持奉て、かつらにをき取らせて、我は后宮へ宮仕申侍るか、雨の日のつれ〳〵にや、かつらの事を思出て打しほれてゐたる、中宮哀と思召て、月のうちのかつらの人をこふとてや雨も涙もふりそほつらん、とあそはして給へる、御返しによめるとあり、但此集にさは侍らす、集にいへるを可用也、されと家集之義も捨かたけれはしるす也

969 今そしるくるしき物と　　なりひら

こと書にあらは也

970 わすれては夢かとそ思

こと書、かのみむろにまかりいたりてをかみけるにつれ〳〵として、このつれ〳〵としてと云うちに、惟高（ママ）の御子の一生の心こもれり、誠余情おほきこと書也、貫之の心みえ侍り、又夢かとそ思と云五文字、はかりかたき余情とそ、堯孝法印は此哥をきゝては涙をおさへかね侍しとそ

971 年をへて住こし里を

こと書に明也

972 野とならはうつらとなきて　　よみ人しらす

物語には鶉となりて鳴をらんとあり、如此なをして入り、年はへんといへは詞もよろしく堪忍の心もみえ侍り、さて、かりにたにやはとは、たゝ鶉と鳴て年をもへは、其ことゝなき便にも尋やこんと云心也、狩の心あるへからす、此返し尤人の心にかくへき所也とそ

973 我を君なにはのうらに

なにはのうらにとは、何はの事にも心とむるさまもみえさりしかは、うきめをみつのといへり、なにとも思はさりしなとの心也、みつのつもしにこりて云飛鳥柏人あり、当流はすみて心うる也

974 なにはかたうらむへきまも

うらむへきまもとは、いつのあひたにかはかり思なるへきそとかこつ義也、うらむことも程ありてこそ

あらめと云心也、猶いつこをみつとは、何をわかうらめしき所とみてかと云也

975 いまさらにとふへき人も

させりてへとは、させりといへと云義也、とふへき人のとはぬなとをうらむる心にや、誰にても我やとのさまをかくいへと、公界にいへる、面白也

976 水のおもにおふるさ月の　　みつね

さ月といへるは草のしけき比なれは也、上は序なから、うき草のうきと云、又ねをたえてなといへる為也、ねをたえては、我にうき事あれはにや音信を絶したるはと云也、こと書に明也

977 身をすてゝ行やしにけん

我とはん事のかならすあるを、打過る折ふし、人の方よりうらみおこせたるに、ことのはなけれは、我も尋ぬへく思つゝ、かくをこたりつるは、我心やいつくへも行てかく侍らん、されは、思より外なる物は心なりけりと陳したる義也、此作者の哥、毎首たゝには侍らすとそ

978 君かおもひ雪とつもらは

こと書に明也、をのか思ひはとは大頼のいへる也

979 君をのみおもひこしちの　　大頼

義は明也、猶こしの白山は大かたの雪なら〈ね〉は、我思になすらふる也

980 思やるこしのしら山　　貫之

こと書にあらは也、優にやさしき哥也、思入たる哥也

題しらす　　よみ人しらす

大かた此二は第一巻に書了、猶種々儀あり、ことによりて、いつれをも可用也、しかはあれと、此義尤此集の肝心にや、義ある哥なとは、題を書侍らん事本意なきにこそ、又、よみ人しらすと云て、左注に其名を書事は其人を賞する義也、大方のをは書侍らす、又至てたかきをは一向書あらはし侍らす、特此集御門の御哥みえ侍らす、其故あるへき也、惣して

此集は教戒のはしたることをあらはし、集を撰て天下の道とするも大道にあらす、くたりたる事也、しかはあれと、仁徳を顕し、治世の旨をたつる集なれは、いつれの人のよみ侍るも、御門の御哥なるへき心也、たとへは、民のかしこきは君の賢也、民の直は君の直也、まかるは君のあやまちなるへき心也、楽にも治乱の二の声を以やすくあやうきをしることく、此集の姿は治世のかたち也、然は此集入哥人の哥、君の御哥なるへき義明鏡也、惣而読人しらす、云に、一は勅勘の人の哥、二にいやしきたくひの哥、三には貴人、あるは神詠、又は数おほくいる人のをも読人しらすと入も侍也、又読人不知といふをしゐて尋ぬへからす、此集の故実也、第一に書侍るを又こゝにて書も其故あるにや

981 いさこゝにわか世はへなん

たゝ伏見といへるは山城也、すか原やふしみと云は大和也、此哥の心は、此里のあれたるをみて、名たかき所のあれぬるを哀とみて、いさこゝに我世をもへて、やつさすすまん、かゝる所の荒行か惜きにと云心也、すか原や伏見のさとゝは人の境界也、すかはらとはことのおほくあつまりて、人事のしけきたとへ也、国をたやかに人の心すなほなる時は、神はたゝ天にましまして立くたり給事なし、されは、あれまくもおしとは人の心みたりかはしくして、情欲におこるを、あれまくもおしといへり、心の不平なるをあるゝとは云也、然はちかつて我こゝに世をへて邪をさけ正をそたてんの御心也、仍利生と罰とは此時あらはるゝ也、夫日本は神国也、神代より人の世とわかれて仁王はしまるは、大道廃て仁義興之理也、仍日神此時和光同塵し給て、邪をたゝし、徳をほとこしまします者也

982 我いほはみわの山もと

此哥は三輪明神御哥也、をたまきの事なとは不可用之、心は、此山に跡をたれ、和光のめくみをほとこ

し給所なれは、たのみをかけん輩は尋きたれとの義也、杉たてる門、有口伝、下心、我いほとは垂跡の立と也、三輪の山本とは、衆生の貪瞋癡の三毒也、三毒のあつくたかうして、此輪を出かたく、こえかたきを、みわの山本と云也、此三わをこえよとめくみ給は、神明の心也、仍衆生の三毒のたかき山のかけにちかつて跡をたれ給て、衆生をまねき給者也、又人に此三毒のあつまる所は四大五蘊也、此うちに心地の和光のあるを神とす、心地の和光とは慈悲正直是也、此心地の和光にて三毒は破るゝ也、是は明神をからすして一心に和光する所也、此理をよく守へきと也

983 我いほは都のたつみ　　きせむ法し

此哥は喜撰法師世をのかれて、宇治山のおくに入、身をおさめ心を安してよめる哥也、しかそすむとは住えたる心也、まよへる物はこゝをうしといふ也、誰も身をおさめ、心を安しなは、人々の喜撰なるへし、此哥はしめをはりたしかならす、暁の雲にあへるかことしといふ、心は、序の注にくはしく書のせ侍り、下心、我庵とは王舎城の心也、我とは心王也、天台に王即心王舎則五蘊と尺する是也、城は本覚法身の都、こゝを都のたつみと云也、世をうち山とは、五蘊の中に六塵の山あるを云也、善悪たゝ一心にある事をさとるへきの教也

984 あれにけり哀いく世の　　よみ人しらす

さるへき人なとのやとりの思の外に荒はてゝ、住こし人も行ゑしられすなりて、音信もなき旧宅を打なかめて、いく世の宿ならんとあはれふ心也、下心、世のにこりふかくして、人の心のまかりよこしまなるを、あれたるやとゝいへり、住けん人の音信もなきとは、仁心の失たるを云也、仁の機は人にある物なれと、心と持うしなふことはり也

985 わひ人のすむへきやとゝ　　よしみねのむねさた

こと書、ならへまかりけると云、遍昭の母ならにあ

れは、折〳〵行かよふなるへし、又俗名を書事、おもてに女のもとへやりたる哥なれは也、又俗の時の哥にや、荒たるやとに琴引けるとあれは、侘人そ住らんと思てみる折から、ひく琴のねも歎く心此声にありと云義也、怨者其吟悲の心也、下心、生死の二法にむすほゝれたる地水火風空の五大のかりにして、あやうき有為のさかひをあれたる家にたとふ、これをやとゝする人の身のみてるを、かくかなしみのあるを侘人と云也、其あひたになすことわさはみな安からぬを、歎くはゝることのねとはたとへいへる、尤人〻歎へきの風也

986 人ふるす里をいとひて　二条

物思人の都にも住わひたれは、都をも人ふるす里と思侘、うかれ行に、ならの京にいたりてみれは、こゝも人の住ふるしたる里なれは、うき名なりけりといへる也、人にふるされ物思人の哥なるへし、下心、定心なき人の堪忍の心なくて、こゝをさり、かしこに行ても同愁にあふ義也、影ヲ悪(ニクン)テ走と云心也、富貴薄命皆天然の理也、此理をおもふへきの教也

987 世中はいつれかさして　よみ人しらす

故郷とてたのむも住終る事もなく、うとき里とてもなからへ住事もあれは、かりの間にいつくをさしてか思ひさため、わかともせんと云心也、下心、これより下三首は心身の始終をいへる哥也、此哥は身の方へとる也、世界は常住にして其方所もなし、只一身来てすめはしはしのやとり也、仍身のかたへとる也、十界悉其分〻の住所也、然れは、いつくをさしてかさためたる所とはせん、誰か又さして我物ともせんと云にや

988 あふ坂のあらしの風は

行衛いかならんともしらす、たのむにかたき習なれは、此嵐のかせにはたへかねぬれと、なを侘つゝそぬるとよめり、ぬるはふる心也、詞をいたはりてかくよめり、又ね覚なとにやよみ侍けん、誠かんふか

き哥なるへし、下心、此哥をは心にとる也、四大五行のあひあふさかひを相坂とはたとへ云也、嵐の風とは、無明の一念にひかれて、五行のあふ坂あれは、有為転変の嵐の風もある也、只世のはけしくくるしき心をいへり、此心ははてもなく行ゑもしらねは、此境界に侘つゝそふると云にや、寒けれと、行衛しらねは、侘つゝそなと云所、心のしる所なれは心にとる也

989 風の上にありかさためぬ

此三首は蟬丸の哥也、此作者引律に達して、しかもさとりの人也、心は、我身一の只はかなうかろきありさまの、更にたのむ所なきは、風の上のちりにことならぬ物なれは、よそへて行ゑもしらす成ぬへしといへる也、下心、以前二首は身心の二也、此哥は此二のはてをいへる哥也、風の上のちりとは風大地大也、塵は土也、水火を風塵にもたせたる也、人の身は風にもたれてかろき物也、五大所成に生して老病死にうつりて、つゐに行ゑしらすなりぬるの心也、但帰空とみるは二乗の見也、生死共に常住理也、是法住法世間(位脱歟)相常住也、一切衆生天地万物五行にはなるゝ事なし、いさこゝにと云よりこゝまて九首に、悉以世界に云、神道仏法今世後世をのこさす身上をはかる哥也、尤以可仰とそ、抑、集に部立をする事其謂あるうちに、なを雑哥とたつる事故ある者也、第一に、我上に露そをくなるとよめるは、一滴の露よりおこる心をはしめとして、思とちまとゐせる夜は、うれしさを何につゝまんなと、次第にさま〳〵の人事、生死去来の事までをましへ、恋、述懐、祝言、雪月花の興はいふに及はす、のせたり、是雑哥の義、道の本意もあらはるゝ也、されは神道をあふけは王法全し、世間をなけゝは仏法あらはる、此九首を肝心といへる、是也

990 飛鳥川渕にもあらぬ　　伊勢

此作者、宇多御門の御寵愛なれしなこりなく、うつ

ろひおとろへ行、その哀先おもふへし、せにかはるを銭を立入なと云、甚不可然、此哥は先飛鳥川をよひ出す事肝心也、此河の渕せにかはる事、只天然の理也、昨日はさかへて作、けふはおとろへてうるも、たゝ自然の義也、此哥は、女の中務に伝受の哥にさせける哥也、心は、これにて哥のさまをもしり、身をおさむる道の便ともなす也、如此世中はせにかはり行物そと思へは、人にふかきうらみもなく、物にとゝまる執もなかるへきにこそ、しかれは、進退のため此哥に過へからす、哥のさま又殊勝なりとそ

991 故郷はみしこともあらす　　ともの り

こと書にあらは也、つかはしける、朋友なるへし、みしこともと云に碁をそへたり、をのゝ〈え〉朽しとは、秦王質か古事より思よせたる也、心は、故郷といへと人の心かはれはかひなし、あらぬ所もむつふれは契となりぬる心也、只和のよく至所、簡要なるへきの義也

992 あかさりし袖の中にや　　みちのく

こと書によくあへり、女は大かたはかなき心なれは、かりになれたる友にもかく志ふかき物也、ありかたき事のやうにはあれと、又あまりなる事也、されは人にしたしまんとて、あるましきゝはの心を思はんも過たる事なるへし、過るはなをし及さるかことしといへは、此程を思はからふへしとそ

993 なよ竹の夜なかきうへに　　藤原のたゝふさ

寛平の御時、もろこしの判官にめされて下略、もろこしの判官とは、遣唐使にともなふ人也、なよ竹はよなかきといはん為也、夜なかきは東宮御世をいはふ心也、おきゐては霜のえん也、物を思ふとは、かくめてたき御影にて、さるへき朋友とましる身の、旅立いてん事を思よしにや

994 風ふけはおきつしら浪　　よみ人しらす

此哥の事、顕注密勘に、沖津白波は盗人のと云事お

ほつかなきよしをいひて、今案、万葉に、伊せの山辺御井にて、わたつみのおきつしら浪立田山いつかこえなん君かあたりみん、此ことく立田といはんため沖つしら浪といひ、おきつしら浪といはんとて風ふけはと云なるへしといへる勘に、沖津白浪盗人の事とそきゝ侍し、此今案、可興可仰、やまとにはあらぬから衣のたくひなるへしといへり、然は顕昭か心におなしきにや、こと書よく心を付て可吟味、貫之は哥の本といへるよし奥義抄にみえたり、能〻可思量物をや、余情かきりなき哥也とそ

995 たかみそきゆふ付鳥か

たかみそきのゆふ付鳥にてかと云義也、おりはへ、打はへなとやうの詞也、心は、立田の里の鶏の八こゑなとをかくよめる也

996 忘らるゝ時しのへとそ

これは人もみえぬあたりに、文なとのありけるをみてよみけるにや、人もみえぬといふも、我忍へき人には侍へし、我しるやとりなとなるへし

（頭書）又我と此哥をよみて書をくにや侍らん

997 神な月時雨ふりをける　ありすゑ

こと書に明也、貞観の比とは、清和の御代までは万葉なとたしかならぬにや、心は、ふりをけるとは、昔よりかくあつめをくことはなと云心也、神無月は時雨の枕詞也、もし又此哥よみけん時にや、ならの御門と撰集と云心を一首にて答侍る奇特の義也

998 あしたつのひとりをくれて　大江千里

雲の上まできこえつかなんとは、続と云心也、君に告申人あれかし也、鶴鳴九皐聞天と云文を取てよめり、官位をくれたる人の述懐也

999 人しれすおもふ心は　かちをん

春霞は枕詞也、是も望事侍てよめる哥なるへし

1000 山川の音にのみきく　伊勢

これは寛平御門おりゐ給てのち、伊勢も禁中に侍らさりけれはよめる哥なるへし、伊勢は彼御門の御思

人なりし也、身をはやなからとは、川にはみおとてふかき所をいへは、よそべいへり、はやくも同えん也、心は、身を昔のことくしてみるよしもかなと云義也、心詞たけありて、しかも哀ふかき哥とそ

雑　躰第十九

雑躰と云は雑哥にかはれり、雑哥は季恋雑旅行述懐〻旧等、皆以交るを云也、雑躰とは長哥還頭哥（ママ）誹諧等也

短哥

此事古来の難義とせり、万葉集に一所ありといへと無所見、久安の比崇徳院御代人〳〵に哥をめしけるに、短哥を一首つゝくはへてたてまつれと仰けれは、俊成卿以下奉ける也、彼時の勅諚も此集にかけるにより短哥と仰下されけるにや、顕輔清輔俊頼なとの義は、たとへは、いか程もいひつゝけて、その志をとをくのへ侍るを長哥といひ、短哥とはかくなかう侍れとも、そのうちにいひきり〳〵詞うつりて、三句とも五句ともとをして跡をひかす、詞のつゝきいひきり〳〵すれは、みしかきゆへに短哥といふといはれ侍るとかや、俊成卿はかならす是に同心する義はなけれと、大かたさにこそあらめと准してをかれける也、千載集に短哥とかゝれけるを、定家卿は此集の遺恨也といひ給けるとそ、万葉にありと云義、たとへ一所なとは所見ありとも不可用と也、其上所見なきにや、万葉は悉長返なるをは長哥とも書、又作哥なとかけり、さては貫之かあやまちとすへきにや、其又其義あるへからす、但、定家卿のおもふ所侍へき歟、久安の御時も短哥をめされしおくに反哥とてみな一首加之、其時人数十二人歟、されは奥に短哥あるへき義歟、此集にも忠岑哥に、君か世にあふ坂〈山〉の岩し水の哥入侍り、一所にあるは、惣に及ほすへきとそ、あるへき義なれは、又なきもある義に准すへしとそ、長哥はいか程なかくい

ひつゝけたるをも、おくの一首にて其理をつゝまやかにいふ也、たとへは経の偈同事歟、たゝ当流の義は、おほつかなきをそのまゝをき侍るを心とする也、猶可尋之　祇注分也

題しらす　　よみ人しらす

1001 あふ事の　まれなる色に　思そめ　我身は常に

此四句義なし、此一首は恋の哥也

あま雲の　はるゝ時なくと云枕詞也、如此句〻枕詞あり

ふしのねの　枕詞

もえつゝとはに　思へとも　あふことかたし　何しかも　人をうらみん　以上四句又義明也

わたつうみの　おきをふかめて　思こし　思はいまはいたつらに　成ぬへら也　行水の　たゆる時なく　かくなわに　水草也　思みたれて　雪にもえんあり　ふる雪の　けなはけぬへく　消はきえたくと也　思へとも　以上義なし　えふの身なれは

御抄に、金吾申されけるは、閻浮の身なれはを、えふと書なり、人界の身なれは思はしと思へとかなはすと云よし也、猶仿払なれと、ならひつたへたる説なれは注付之とあり、長哥よみやうは、上をひき、下をおこして、あるは枕詞、あるはえんの詞なとにてくさりつゝくる也

なをやます　思はふかし　あし引の　山下水の　木かくれて　たきつ心を　此三句又序也　誰にかも　あひかたらはん　色〈に〉出は　人しりぬへみ　すみ染の夕になれは　ひとりゐて　あはれ〳〵と　なけきあまり　せんすへなみに　せんするやうなき心也　庭にいてゝ立やすらへは　白妙の　衣に袖に　をく露の　〈けなはけぬへく〉　思へとも　これより卅一字の詠也、義は明也

ふるうたゝてまつりし時のもくろくのそのなかうた

古うた奉りしとは此集に古人の哥を奉る事也、もくろくとは此集撰様の心也、をとはの山の春霞といふ

より四季賀恋哀傷雑色〳〵のしなをよみ入たる也

つらゆき

1002 ちはやふる　神の御代より　くれ竹の　世々にもたえす撰集の事　あまひこの　をとはの山の　はるかすみ　思みたれて　五月雨の　空もとゝろに　さよ深て　山ほとゝきす　なくことに　誰もねさめて　唐にしき　立田の山の　もみち葉を　みてのみ忍　神な月　しくれ〳〵て　冬のよの　庭もはたれに　ふる雪の是まて四季をよめり　なを消かへり　これは此集撰に沈思するよし也

年ことに　撰するあひたの年へたるよし也

時につけつゝ　哀てふ　ことをいひつゝ　君をのみ　千世にといはふ

是は撰集の色〳〵を又のへたり、其につけても君を祈る義也

世の人の　思するかの　ふしのねの　もゆる思も　あかすして　わかるゝなみた　是は離別也、まへの五句は恋なり

ふちころも　をれる心も　是哀傷也

やちくさの　是より雑也

ことのはことに　すへらきの　おほせかしこみ　まき〳〵の　中につくすと　いせの海の　うらのしほかひ　ひろひあつめ　巻〳〵あめる心也

とれりとすれと　玉のをの　みしかき心　短才のよし、卑下也

思あへす　猶あら玉の　としをへて　大宮にのみ　久かたの　ひるよるわかす　つかふとて　かへりみもせぬ　わか宿の是より卅一字詠也

大宮にのみ久かたのと云より、此集撰する間の事也、ふる春雨のもりやしぬらんとは、かく心をくたき、むかしいまの哥をあつむれと、猶のこる事やあらんと云心を、もりやしぬらんといへる也

ふる哥にくはへて奉ける　同時の事也　忠岑

1003 くれ竹の　世々のふること　なかりせは　いかほのぬ

まの　いかにして

古き世の哥ともなくは、此集もいかてか撰劫(ママ)もをはり侍らんと也

おもふ心を　のはへまし

旧哥侍らすは、此撰集も侍らし、しからは、みつからの思をものへしと也

あはれむかしへ　ありきてふ　人丸こそは　うれしけれ　身はしもなから　ことのはを　あまつ空まて　きこえあけ　すゑの世までの　跡となし

これまて人丸かうへの事也、天子の師判となりて、道をのこすによりてこそ、只今の撰集も侍れと、よろこふよし也

いまもおほせの　くたれるは

撰集勅命の義也、人丸の事を先あけてかく云也

ちりにつけとや　続塵の心、塵の字をも続とよむ也

ちりの身に　いやしき心也

つもれることを　ちりのえん也

これをおもへは　けたものゝ　雲にほえけん　心ちして　千々の情も　おもほえす　ひとつ心そ　ほこらしきとは、及かたき道なれと、かやうにおほせのくたりて、かゝる道をえらひたてまつる此一事をよろこふよし也、たとへは、けた物のはのほりかたき空にも薬の力にてのほることく、人丸の道にひかれて、此道にいたることをよろこひて、余の千々の心も及はぬよしにや、一条禅閤の御説は、大かた君のめくみは千々にかうふれとも、此集の撰者となさるゝ此一心は猶すくれたると云義とそ仰られ侍し

かくはあれとも　さやうにはあれともと我身を卑下の義也

てるひかり　ちかきまもりの　身なりしを　たれかは秋の　くるかたに　あさむき出て　みかきより　とのへもる身の　みかきもり　おさ〳〵しくも　おもほえす

てるひかりちかきまもりのとは、日をは天子にたと

ふ、心は、君にちかきまもりの心也、近衛の番長なりし事也、忠岑番長の時の義也、誰かは秋のくるかたにとは、忠岑右衛門府生（右は秋也）になる事也、あさむきいてゝとは、欺字也、心は、はかりいたしてなといふ義也、番長より右衛門府生になるは、あかりたる事なれと、君にちかき所をしたひ〈た〉てまつりて、かくいへり、されは、心ならす外衛を守るよしにいひなせり、よりておさ〳〵しくもおもほえすとは云也、新勅撰、くら人よりかうふり給はりていかゝおもふと仰こと侍けれは、年へぬる雲井はなれてあしたつのいかなる沢にすまんとすらん

こゝのかさねの　うちにては　嵐のかせも　きかさりき　とは、ちかきまもりの事也、君にちかき身ははけしき風をもきかぬ義也

いまは野山し　ちかけれは　春は霞に　たなひかれ

是より四時ともに君に遠さかれは、うれへあるさまをいひなせり

夏はうつせみ　なきくらし　秋は時雨に　袖をかし冬は霜にそ　此五句又まへのたくひ也

かゝるわひしき　身なからに　しるせる（つもれ）年を　しるせれは　以上明也

五のむつに　天子へ奉公三十年の事也

これにそはれる　わたくしの　老のかすさへ　義なし、奉公以前なるへし

やよけれは　よきり過る心也、たゝはやきなり、いよ〳〵の心もあり

身は〈い〉やしくて　年たかき　ことのくるしさ　かくしつゝ　なからのはしの　なからへて　なにはの浦に　たつなみの　義なし

なみのしわにや　しはをはなみによそへいふ物なれは也

おほゝれん　さすかに命の　おしけれは　こしの国なる　しら山の　かしらはしろく　なりぬとも　をとはのたきの　音にきく　老すしなすの　くすりもか　君

かやちよを　わかえつゝみん

不老不死の薬もかな、我としをわかうして、君かちとせにあはまほしきの心也

1004 君か世にあふ坂山の岩し水こかくれたりとおもひけるかな

此反哥は長哥の心を此一首にふくませよめる也

冬のなかうた　　みつね

1005 ちはやふる　神な月とや　此長哥一首義なし、末に作者の述懐をいへる也

七条后うせ給にけるのちによみける

1006 おきつなみ　あれのみまさる　　伊勢

此長哥こと書にあらは也、尤おもしろく哀ふかき物也、此内、いせのあまも舟なかしたるとは、いせか我身の便をうしなへるを云也、又冬かれの花すゝきを我身に比したり、よそにこそとは、をの〳〵女房なと立わかれなは、よそ〳〵にこそ見めと云也

旋頭哥

文字の心は、かしらにめくると云心也、又はしめにかへるやうの心也、よみやうは五字七字の間に一句そふる也、六句の哥にて五句は五句につゝき、七句は七句につゝく所をかしらにめくるとも、はしめにかへるともいへり

1007 うちわたすをちかた人に　　読人しらす

此花は梅花也、梅とはみえ侍れとも、たくひなくおもしろくみゆれは、寄妙（ママ）なる所を、何の花そもとはいへり、返し

1008 春されは野へに先さく

御抄云、花まひなしとは、花もいひなしにてこそあれ、やすらかにいかゝなのらんといへる也、哥をかけるやう、君てへはとはいへは也、けなはけぬへし、物にさりける、かやうにかくやうに、花もいひなしを花まひなしとかけるなり

1009 はつせ河ふる河のへに

義なし

1010 君かさす三笠の山の

義なし

誹諧哥　誹ソシル　諧和也、ト、ノウ也、カナウ　五十八首

此はいかいの事、他流の義は、物をいかにもよくいふ人の、あらぬ事を云か、しかもよくいひなせるよしとそ、当流に不用之、当流の心は、非レ道教(ママ)レ道、非ニ正道一進ニ正道一と云、是に叶へり、史記に滑稽段と云、其にたりとそ、後漢の代の始光武の時、東方朔と云者あり、長ひきゝ人也、是は実には仙人也、世に出て政をたすくること数度といへり、これをもつて、あはせて其心をしると云事もあり、此巻に、長哥五首、旋頭哥四首在之、いつれもすくなきに、誹諧哥六十首に及へり、他流の義ならは、これまてえらひいれん事あるへからす、これはたゝ道をたすくるはかりことなれは、如此数おほく入也、されは一部をたてすして、物にそへて入事、是又尤甚深の義也、六義に風を第一にをけるも其理あり、余は風にしたかひてあらはるゝ也、五大も風大をもつて詮とする也、風大又地水火によりてあらはるゝ也、此誹諧も長哥旋頭哥によりて、しかも肝心なる所、尤にや、巻くおほしといへとも、第十物名は、たはかりの心也、此哥は又世界の道をなをす心なれは、不可思議の理にこそ、猶以可尋之

1011 梅の花みにこそきつれ　よみ人しらす

下句、いとひしもをるのし文字はてには也、時しもあれと云よりは少心よはき也、時しもあれと云は思入て云詞也、此哥の心は、鶯の人にをそれて、飛なきするか、人く〳〵といふ様なれは、花見にこそこしか、鶯にはさはらぬ物を、いかて人く〳〵とはいふそと云心也、鶯の我に心をくよし也、花みにくる人は、我ためにはあしからぬ人そとしらぬは、鶯のをろかなる也、又鶯の花に心をやりて、木ったひなとするを、こなたもおもひやらぬ心にや、下心、我おもふ事をは人にはいはて、しかも人をうらみ、人

をゝそれ、又人をいとひなとするは、みな此鶯の心也、たゝひとへに思ふ事あらんをは、よろしきさまにいひいてゝ、其心をうけん事にこそ、匿怨而友其人といふをきらふ心也

1012 山吹の花色ころも　　素性法師

これは花染にあらず、たゝ花の色をさしていふ也、又云、黄衣なりとも、哥には義なし、世上に口さかなく、よしあしにつきて物を云人のおほきに、此山吹のやうに侍る物はなしと云心也、顔回か終日不語と云心を思へきの教也、又云、花色衣はかさりたる人の躰也、さやうの人の下に実なるもあり、其をよく分別すへきのをしへ也

1013 いくはくの田をつくれはか　　藤原敏行

してのたをさは時鳥の別名也、時鳥〳〵といへは、してのたをさをよふと云也、たをさといふにより て、いくはくの田をつくると云也、下心、世上したりかほなるなといふ事のよし也、たとへは作もなさぬ田をさをいくはくかよふと云かことく、道をゝこなふ人のさらにをこなひえたる事もなきを、なをおこなはん〳〵とするは、いよ〳〵身のためもくるしく、又悪名もたつ也、おこなふにたへすは身退道を思へきに、いとゝなりかたき事をする、詮なき也、此理を思へきの教也、又世かをこなはれぬ時もあるへし、行蔵の二をおもふへき也

1014 いつしかとまたく心を　　藤原かねすけ

またくのくもし清也、またくとはまつと云心也、其をあゆみのまたくに執なせり、心は、あすあはん事を猶いそきて、はきをかきあけて、天河をさしまたき〳〵けふやわたらんといへり、猶まつ心急にして、けふよりわたるよし也、下心、成就すへき事の一定あるを、猶短慮にして、功なるへき時をまたすして、いそく物はかならす不慮の事もいてくる、やふるゝ事侍也、欲速不達の心也、もし又、事なるへき事の、おほつかなくとをからんは、いとゝ心をの

とめて、ゆるゝかに侍へき也、いつれも短慮の道にたかふ事を教云也

1015 むつこともたつきなくに　　みつね

いつらは秋のなといへる、誹諧也、あふ夜はみしかくともなくさむへきを、猶あきたらぬ心也、下心、欲のさかりなる事をいへり、小欲知足にして侍らは、楽にも侍へきを、喜あれは、いとゝ楽をかさねんとするにより、人民の愁もふかくて、国もまたからす、朋友の中もあしくなる、然はいせんの喜もかひなくて、身をも失也、此義を可思のいさめ也、又愛により理を破る義也、夜のあけ日のくるゝは天地のことはり也、天理に任すして、長きをみしかしといふは、愛にひかるゝなり、これをいさむるなり

1016 秋の野になまめきたてる　　僧正へん昭

心は、此花のうつくしきか露のしら玉をかさりてなまめきたてるを、其もはかなし、霜ふり、野分ふかは、たゝ花も一時そと云義也、秋の野とをける肝心也、下心、一生六十年のうち無常の上に身をゝきて、物のきよらをつくし、身をかさり居を安する人は、たゝ秋の野の霜をまち、春の花の嵐をまつことはりを教いさむる心也、秋の野を居のかたへとる也

1017 秋くれは野へにたはるゝ　　読人しらす

つまてみるへきとは、俗に人をつむなと云事也、其を花つむによそへたり、女郎花と云につきて、誰かけさうせさらんと云心なり、下心、実ならぬ人の時にあひ、なす事なとになれ、よる人もたゝその人の心にしたかひ、ついそふするよし也、あしくみる人も、思なからしたかふ道なきものは、なを悪事をそふるにより、其人もおとろへの基となる、秋をはおとろへのかたへとる也、これを思へきのいさめ也

1019 秋きりのはれてくもれは

みえは、見えもはてす、かくれは、かくれもはてぬをみなへしと云はいかい也、下心、秋霧をは世の不定へとる、人の心の、とするかと思へは、かくする

なと、たとふる風也

1019 花とみておらんとすれは

うたゝあるさまの、あまりなるさまの名にこそと云也、大方の花とみておらんとすれは、たはれたる女の名なるさまなれはと云にや、出家の人の哥といへり、下心、さるへき人の世にあひ、すかたなともたくひなきを、しかるへき人にこそとなれよれは、心たしかならすして、たのみかたく、いふ事なとも実ならぬにたとふ、さやうの人をは、先心をみて、たのみもよるへきの教也、又云、出家の者の女郎花の名に執てきらふ二乗の心也

1020 秋風にほころひぬらし　むねやな

義あらは也、下心、身に及はすあるましき事をねかひ、身をくるしむる人を風する也、猶つゝりさせてふとは、蛬の鳴ねを云、又蛬をはつゝり虫といふ、幸その野にほころひたる、かく執なせり

1021 冬なから春のとなりの　ふかやふ

こと書にてあらは也、下心、なに事もその一事はてゝ、又はしまる事のよきを、さもあらてあるは、人の物いふ半を我おもふ事を云、これ無礼の事也、又道を行、その人事もとゝかぬに、又大事を思くはたつるなとのいさめ也

1022 石上ふりにし恋の　よみ人しらす

久しう思そめし恋のふりぬるまゝに、我にたゝる時、そのをこたりをしりぬるといふよし也、いそねかねつるは、をこたりをえせぬ心也、下心、ほのかにし初し悪事のつもり〳〵て、身にたゝりぬれは、それを甫も叶はて、身をうしなふ心也、されはすこしのひか事をも、その時に悔てあらたむへきの教也、猶たゝるとは、物をさのみ思入て、年へぬれは心も狂するやうの心也

1023 枕よりあとより恋の

枕をは善にとる、跡をは悪にとる、恋をは欲情のかたへとる也、欲に善悪の欲あり、善の欲はせめてな

れとも、其さへ事過るはしかるへからす、まして悪欲にひかれては、前後左右を忘るゝ物也、さるさまの人はかならす欲心より身をはたす事あるをいさむる教也

1024 恋しきか方もかたこそ

恋しきかとは、恋しきと云事かと云義也、惣の心は、恋しき事もおもひあつる方ありてこそあれ、只思ひにほれ〳〵しくて、たてれをれともなき心ちする也、方所もなき心ちすると云にや、下心、恋をは貪欲にとる、とんよくに着して方角前後を忘ぬる事を風する也

1025 ありぬやと心みかてら

心は明也、たはふれにくきとは、あはすしてあらんと心みんは、我心にたはふるゝやうの心也、下心、たとへは、世をものかれてあらはさてもこそあらめと思て、我心もためしかへりみす、山ふかくなとこもり侍るに、さてもありにくゝ、世中も恋しくなりなとして、身をあらぬさまにもてそこなふなとをいさむる心也

1026 みゝなしの山のくちなし

一切人の思は、耳にきゝ口にいふより恋しき事もあれは、きく事なく、ことかたらふ事なきを、我思の下染にしたらは、人も恋しからしと云心也、下心、此二によろつの欲情しんいもおこりて、人毎に身をほろほす事を思へき教也

1027 あし曳の山田のそうつ

僧都古事不及注之、哥の心は、さやうならん物さへ我をおもふといはゝ、うれはしきことゝいふ也、おほしとはをほしめさは也、ことは如也、是常光院かたの説也、其はよからぬ人を僧都のことくの人と云也、東家には、其一人をさしていへは事の字也、下心、物をいとなみたくはへて、其を大切におもふ心也、事たらてわひぬる者は朝夕のうれはしさ侍る也、冨貴はこれをたくはへてうしなはしとするに、

やすき事なければは、たゝうれはしきことくそといふ也、されは、たゝが〈な〉しみをもしゐて思はされと云義也、そうつは田をまもる物なれは、世にたくはへする物にたとへて尺する也

1028 ふしのねのならぬおもひに　　きのめのと陽成院の御めのと也

ふしのねのならぬとは、不成と云義也、此詞のつゝき、はいかい也、心も又はいかい歟、下心、我思立所、我なす事をよくわきまへてなさすして、もしやさりともなと思て、その事をなすはあしき也、たとへは成就せすとも力なし、神たに心に叶はぬ事こそあれなと思なりて、身をそんし思をする事あるをいさむるの道也、猶もえはもえの、はもし可濁、もえはもえよと也

1029 あひみまくほしは数なく　　きのありとも

つきなくは月のなきによそへたり、みまくほしは星にそへたり、心は、あひみたき心は数〳〵あれと、其人に便なくてまとふといへり、下心、人につきなくの人を仁者にたとふ、さやうの人をたつぬるに、みたりかはしき世上にひかれて、便もなく成てまとふよし也、尋まとふも我心の定心なき故也、こゝをよくおもふへきの教也

1030 人にあはんつきのなきには　　小野小町

思をきてとは、久しく思ゐたるよし也、惣の心は、人にあはん便のなくてむねこかるゝ也、下心は、欲にどんして更に余をみす、をろかなる心故に、思こかるゝ理をしめす也、はしり火の火もし可清也

1031 春霞たな引野への　　藤原おき風

心詞共にはいかい也、下心、役にあたらぬ物の其役をのそむにたとへたり、若菜のつまるゝは役也、それにならはやといふは身にあたらぬ役をねかふ心をいさむる義也

1032 おもへとも猶うとまれぬ　　よみ人しらす

かゝらぬ山もとは、ふてう（不定）なる人なれは、心をかけぬかたもあらしと也、惣の心は、郭公なかなく里の

といふにおなし、かゝらぬ山もといへる、誹諧也、下心、我かたへくる人の又他人の方へ行をうらみいましむる事あるにたとへ云也、殊学問なとの朋友にある事也、りんしやくの心あるましきの教也

1033 春の野のしけき草はの　　平貞文

草はのつまとつゝけたり、ほろゝとそなくとは、ほろ〳〵と涙のおつるなと云やうの事也、下心、世の万物にしけきことわさにひかれて、行住座臥安からぬ事の風也

1034 秋の野につまなきしかの　　きのよしひと

しかのかひよとなくを、それはなにそ、たゝせんなき我恋のかひよとなくにてこそあれと也、年へてもつまなきは何を思のかひそととかめて云也、世をせはくすむたとへ也、妻をは余類にとる家人等の心也、其人の分〳〵にあるへき物を略してちいさくすれは、その事叶はて誰もかなとこふる事ある也、過分にもなく、すほくにもなくあるへき事をしめす也

1035 蟬のはのひとへにうすき　　みつね

すゝしなとはきなるれはよる物也、されはなるゝにつけてなれよらんと思へは、いよ〳〵まとをくなると云義也、恋の哥也、下心、ひとへにうすきとは、あさき義也、遠慮なきかたにとる也、さ様の人はなれぬれと、真実心のよる所なきゆへに、知音も破るゝ物也、朋友のちなみ浅深をみるへき事の教也

1036 かくれぬの下よりおふる　　たゝみね

上は序也、ぬなわは水草也、根をそへてねぬなわと云、哥の心は、ねぬ名とは、ふたりねぬを、ねたるなといふ名をはたてし、くる斗をはいとひそと云也、下心、朋友とましはるに、其人の短をいはさらん、友をいとふ事なかれのをしへ也

1037 ことならは思はすとやは　　読人不知

おもはぬ人のかはりもさらはせて、かけてのみをくを歎く義也、下心、人になれぬへくは、ことはりをあきらめ、非をなをし、其事〳〵にあたりて、よき

事をもあしきふしをもいひきらてありふるは、わさはひをひく物也、此理をしるへきの教也

1038 おもふてふ人の心の
偽ある人の胸中のかくれたるをくまと云也、其心にかくれて見はや、いかにあさまならんと云よし也、下心、ことをたくみにし色をよくする物の、仁たる事すくなしといふたとへ也、又云、おもふと云人にさこそと打まかせてあるへし、しゐて底をみんとするも非也、いつれにても此義をおもふへき也

1039 おもへとも思はすとのみ
義なし、下心、君臣の中にては、これたゝをよそ心也、こゝを可思教也

1040 我をのみおもふといはゝ
無義、下心、人の実の表裏あり、又心詞のたかふ、其を知へきのいさめ也

1041 われを思人をおもはぬ
あらは也、下心、むくひのことはりをつゝしむへきの訓也

一本ふかやふ　是は基俊の本にたゝまへよりのことく読人不知と侍を、他本ふかや(ママ)と侍れは捨かたくて被書加云々

1042 おもひけん人をそともに
あらは也、下心、君臣の間におもふへき事なりとそ

1043 いてゝゆかん人をとゝめん
一本よみ人しらす　まへにおなし、定家卿本もなし
鼻をひるは、いむ事侍れは行人もしやとまると、となりにはなをたにひよかしと云心也、鼻ひるは吉事にも云也

1044 くれなゐに染し心も
人の心変しやすくて、ふかき心の色も忘るゝよし也、人をあくとは我をあく也、猶そめし心は人の我にふかき心と云也

1045 いとはるゝ我身は春の
のかひかてらにとは、いとふやうの事、俗に野すて

にするなと云様の心也

1046 うくひすのこそのやとりの

上は序也、我をふるすとやと云心也、ふるすといはんとて、こそのやとりと云也

1047 さかしらに夏は人まね

さかしら、賢の字をよむ、心は、たとへはやもめなる物の心也、夏の程は誰もひとつにぬる事なけれは、下には思あれと、人まねにさかしたちて思なけにして、冬になりて、篠のは打さやき霜さむき夜なとは、もとよりの独ねなれは、誰をたのむともなく打歎ぬるよし也、下心、もと何事もかしこくとおもひし事の、はかなきを悔思出て、いま更(さし)あたりて身を歎やうの事にたとへたり、又云、思慮なき事をしらするをしへ也

1048 あふ事のいまははつかに　　平中興

あふ事の稀になれは、たま〳〵の契も夜ふかくならてはなきよし也、はつかは廿日にそへ云也、下心、人はたゝはしめもはても同やうなるかよき也、初はめつらしく甚しく、人をして後うとくなるやうの義也、よひよりあひみる月をは、人につようなるゝかたへとる、廿日の月をは人にうとくなるかたへとる也、これみな定心なき作法をしめす義也

1049 もろこしのよしのゝ山に　　左のおほいまうちきみ

心は、いかなるもろこしにても、又我朝ならはよしのゝ山のおくにても、思人にはをくれしと也、もろこしの吉野とつゝく、はいかい也、又云、もろこしのよしのゝ山とは、此山もろこしにはなけれと、遠くともたつねんの心をつよくいはんとて、もろこしのよしのゝ山にといへり、さるにより、此哥ははいかいになる也、此哥は伊勢か、みわの山いかに待みんの返し也、三輪吉野同国也、又よしの山は身をかくす所なれは、かく云也、下心、何事にも思立道あらんに、あまりなるまて及はぬ事、たくみおもふ事を思へきのいさめ也

1050 雲はれぬあさまの山の　　なかき

雲晴ぬは煙を云、我思のはてはあさまの山のもゆるやうにこそあらめ、あさましやとみなから、なを人の心をみてこそやまめと云也、人の心をみてこそとは、世界の人の順路なる心をみてこそ此山のもゆる事はやまめと也、此山の世界の思のもゆるにおなしけれは也、仍あさまの山のあさましやと云也、みてこそとは山殿かみてこそ也、下心、世間の愁は身上にきたる事のあるにたとへ云也

1051 なにはなるなからのはしも　　伊勢

此つくるはつきぬる也、心は、たくひもなく身の古ぬるを歎也、此哥はつくるか作の字ならは、はいかいには成ましきにや、序にいへるは作の字也

1052 まめなれとなにそはよけく　　よみ人しらす

よけくは除也、心は、苅かやのみたれたるは自然のさまなれは、あしきとも云へからす、さやうに上は乱ていかにとみれと、さもなき人もあれは、除よけ侍ましき義也、実なりとみゆる人の下の心さもなきもあれは也、下心も則是也

（頭書）今案、実なるとみるもあしく、みたれかはしとみるもあしからぬ人ある心歟

1053 なにかその名のたつ

しりてまとふとは、あしきとする所に迷ふよし也、我のみならすとおもふかまことの迷也、下心、悪をためしにひく事をいさむる也、此心第一のはいかい也

1054 よそなからわか身にいとの　　くそ

こと書に明也、我身にいとのは、いとこをそへたり、又糸に針をすくる心にて、いつはりにすくとよそへ云也

1055 ねきことをさのみきゝけん　　さぬき

ねきことゝは、神に祈る心を云也、其をあた人のこなたかなたより人のいふことをきくにそへたり、あまり心よはきは後の歎となる義也、世上又同

1056なけきこる山としたかく　　大輔

わかなけきか山とたかくなれは、くるしき故につら杖をつき物思よし也、下心、ならぬ事を思て、つゐに身をいたつらになすの心也、山としたかくを、又年の字に云事もあり、こゝに云にてはあらす

1057なけきをはこりのみつみて　　よみ人しらす

歎をは数〳〵こりつみて、其しるしはなきよし也、なけきをはなと云所によりはいかい也、心も少はいかい也

1058人こふる事ををもにと

あふ期をあふこにそへていへる也

1059よひのまにいてゝ入ぬる

上は序也、われて物思、こなたかなたになる心、又あふ事はほのかにて、わりなく物思義也

1060そへにとてとすれはかゝり

あふさきるさは行さまくるさま也、心は、たゝこなたかなたへ物のちかふ義也、あないひしらす、かゝる事はいかにと歎心也、猶そへにとては領解したる心也、下心、別になし、たゝ世上にはかゝる人のみ也、尤よろしからぬ事也、其を風する也

1061世中のうきたひことに

たゝ世のうきことの茂きなり、風の哥也

1062世中はいかにくるしと　　もとかた

義なし、是も風の哥也、是は以外の誹諧也

1063なにをして身のいたつらに　　よみ人しらす

やさしとは、はつかしき也、心は義なし

1064身はすてつ心をたにも　　おきかせ

身はすてつとは、おちふれはてたるさまの事也、しかありとも心をは放埒にもたしと云心也、つゐにはいかゝなるととは、心のすちめをたゝしくすへきの義也、下心、身はすてつとは五大は分散すとも、心は金剛正躰なる所を可思の義也

1065しら雪のともに我身は　　ちさと

義なし、下心、心はきえぬ物にこそと思ふは、心に

落たる心也、心境共に大己なる所則金剛不懐法身也
壊

1066 梅花さきての後の　　よみ人しらす

すき物とは、好色の事也、下心、実を本として花の
をくれたるよし也、まことに実過て花やかなる所な
けれは、世人眉をひそむる事侍也、たゝ花実を相兼
て、身上を持へきの教也

1067 わひしらにましらな鳴そ　　みつね

今日の御幸の事を山のかひあるとはいへり、惣はあ
らは也、但此哥は、今日の御幸、諸人歓喜なる時な
れと、傍人又歎ことなれは、其をましらにおほせて
いへり、是は世を謗したる哥なれは、往古より密し
ていはさるはこれなり

1068 世をいとひ木の本ことに　　よみ人しらす

うつふしそめとは、あさ衣をふしにて染たる心に
や、たとへは、桑門の衣のくろき色をいふ歟、うつ
ふしとつゝくるは、打うつふして世を観する心にや
侍らん、又云、此誹諧の結句に此哥を置事、其心あ
るへし、梅花みにこそきつれといふより、世間の人
々の上の善悪をゝしへ、又は政道のふかきことはり
をしめしなとして、つゐには、人はたゝ世をのかれ、
是非を放下するを本意とすへきの心なりとそ

古今和哥集巻第廿

廿巻事、此巻は一段有子細事也、十九巻の雑躰も余
集にはかはれり、殊此巻は神道王道兼てあみたる巻
也、此巻をは天真と伝也、京極黄門云、与日月俱(トモニ)
懸鬼神与争(トフ)レ興(ヲ)と云文選の詞にていへる也、此文の
心は、明如日月、深如鬼神、是則天真ノ理也、上に
賀部にも、君を祈る心侍れともまさしく君をいはふ
心は此巻也、王者の道はこゝにあらはるゝ也、いか
んとなれは、日神の御代より天の日次をうけて天子
即位し給て、新年の米を以、てつからみつから供し
て、天神地祇にまつらせ給大嘗会の事あり、神楽は

日神岩戸を出給し嘉瑞をうつして、ひるめの神をおろし奉て、舞曲をそうして、天下安全の宝祚を祈奉る者也、これ三国にすくれたる道也、誠王道肝心也、王道神道みな哥の徳に顕るゝ也、哥も又天真独朗の道也

大哥所御哥　オホタト三字ニヨムヘシ、大(御)の字は敬て加たる字也

大哥所と云は、大内のうち西の壬生の東南皇嘉門北は、安嘉門近衛也西の土御門の南、東上東門、西は上西門のとをり、図書寮の東にあたりて方一町也、南北に門あり、大嘗会新嘗会等に舞妓のまいる時、大哥の人発物音云々、此所は諸国風俗神楽催馬楽一切之哥曲を司ル所也、又云、此国の名を司ル事在之、可尋之

おほなほひの哥　大直日と書、一切節会の時、群臣内裏に祗候の日を大なほひと云、又云、大なほひ直なる心也、神の御名に大なほひと申も直の義也、又天照大神の御心をまなひうつす天子の御心を大直日とも云也、群臣の君をあかめ奉るも又君の直をうつす心也

1069 あたらしき年のはしめに

此哥は聖武天皇天平十四年正月十六日踏哥に太安殿に出御ありて、舞妓御覧の時、大哥の人弾琴歌、此哥也云々

是も群臣祗候の心を云歟、あたらしき年とは、新年を云のみにあらす、御代のはしめを祝也、かくしこそとは、今をいはふ詞也、千とせをかねてとは、今より行末のちとせをかぬる心也、又の心、たのしきをつめとは、正月十五日宮内省より百官御薪(カマキ)を奉る事をたのしきをつめとよめりともいへり、いつれも群臣君の直を請テ私なき心也、続日本紀にありと云々、可尋之

ふるきやまとまひの哥　大和より出たる舞也、国の風俗也、延喜以前なれはふるきといふ也、和州よりはしまれはやまと舞といへり、たとへは駿河より始た

るをするか舞といふかことし、おもては、国の風俗を則王道に用る也、万事を捨さる王道なれは都の風となる也、又十一月玉しつめの祭鎮魂祭ト書、大嘗会辰日節会にやまと舞を奏す、春日祭又諸社祭にも此舞あり

1070 しもといふかつらき山に

しもとは木の末也、其をゆふかつらと也、序哥也、ふる雪はまなくといはんため也、さて面は恋の哥也、下心は、君は臣をめくみ臣は君をうやまふ心のひまなきよし也

あふみふり　あふみの国よりうたひ出したる哥也、ふりは曲也、哥の事也、国の風俗は民の口つから詠いたす也

1071 あふみより朝立くれは

朝たつは、夜ふかく出る心也、旅人なとの出るさま、惣の心は、羇中眺望也、下心、君の御調を奉るとて、暁ふかく出立て上京するよし也

みつくきふり　前は一国の風、是は一郷の風俗也

1072 みつくきの岡のやかたに

妹と我と也、ふりはも、羽もとよむへし、心は、我さかりはもと云同心也、しかれと此哥をは葉とよむへし、心は、ふりやうはいかにといへる儀也、艶なるさま也、下心、朝恩にさかへたる人の、思事なくあかせる朝の霜をみて、民のうへをあはれふよし也

しはつ山ふり　しはつ山は近江とも、一説豊前とも云、是も一郷の風俗也（清又濁とも云也）

1073 しはつ山打いてゝみれは

たなゝしを舟はいたりてちいさき舟也、心は眺望哥也、下心、君につかふる人の少身にして、徳にもあつからぬを云也、嶋こきかくるは陰居なとしたるさま也、猶落者はさやうにても君を仰へきのをしへ也

万葉 四極山打越見者笠縫之嶋漕隠棚無小舟

神あそひの哥　是は惣の目録

とりものゝ哥　神あそひの内のとり物あり、惣而とり

物は十種あり、但こゝには四種あり、榊不変、かつら詫、弓随、杉憶持

1074 神かきのみむろの山の

此神垣のみむろの山、非名所、神の室也（御殿也）、名所のみむろ山も神のみむろよりおこれり、哥の心は、社殿の神さひて神木の物ふかき躰也、尤感あり、可思慮

1075 霜八たひをけと枯せぬ

八度は数おほき義也、心は、霜雪のふかきにも枯せぬを人の堪忍の心にたとへたり、立さかふへきとは、榊によそへて神職の人をいはふ心也、又誰にても祝心也、かもはかなの心也、もはすつる詞也、万葉にはうたかひの心にいへり、下心、榊の霜雪にたへたるやうに神にも君にもつかへ奉るへきのをしへ也

1076 まきもくのあなしの山の

かつら取物也、是は此あなしの山の社頭にして、霜月神事の時、暁かたのさむき折ふし、山人のまいりをかむ事あり、其所には風はけしくて、かしらをかつらのやうの物、又何にてもまきて、嵐をふせく事あり、今神楽の時、山かつらを執てかふりにかけぬるをかくいへる也、めつらしきさまなれは、風流の心にて、山人と人もみるかに山かつらせよといふ也

1077 み山にはあられふるらし

是もとり物のかつら也、心は明也、公任卿九品の哥には、これを上品中生に立たり、めてたき哥なるへし、下心

1078 みちのくのあたちのま弓

是は植物の木也、されとま弓といへは取物の弓によめる也、心は恋の哥也、末さへよりこは、行すゑはらて我かたによれと云義也

1079 わかゝとの板井のし水

くむといふに杉を用也、哥おもて明也、下心、世にかくれゐたる人の心也、水は人のくまぬを水のためよき事とせり、されは、水の心もしつかに水草おひてゐたるよし也、其を閑居の人の進退によそへいへ

り、里とをみなといへるも陰居の心にや

ひるめのうた　昼目也、天照大神の御事也、日神なれは、ひると云文字にあたる也

1080 さゝのくまひの〈く〉ま川に

此哥は、万葉には、さいのくまとあり、神楽には諸神をおろし申事也、殊、天照大神を勧請し奉て、あかり給をしたふ心也、又神楽の本哥に、いかはかりよきわさしてか天てるやひるめの神をしはしとゝめん云々、是はあらはにきこえたり、篠のくまの哥はおもてにきこえねは、ひるめのうたとこと書をかける也、何哥にても、心にあたる時詠せるかことくうたふとみえたり、此哥、元来神楽の哥にはあらさる也、日神をしたひ奉るは正直をしたふ心也、我心を神とひとしくとねかふ義也、駒とめてとは、馬は神の乗物なれはよく心かなへり、猶影をたにみんとは、しゐてしたひ奉る心也、篠のくま大和あり、万に、左檜隈檜隈川尓経馬ゝ尓水令飲吾外将見

かへし物のうた　呂の律にうつるをいふと云々、かへし物と云名目は詠曲にも侍らすや、これは催馬楽律の哥也、源氏物語に、青柳おり返しうたひてなといへり

1081 青柳をかたいとによりて

此哥は、春部に、鶯の笠にぬふてふ梅花、大略同心也、これらは、まことにうたと云物のすかた也、かくはかなふいへるか無事自然の義に叶也

1082 まかねふくきひの中山

吉備中山備中也、まかねふくとは、くろかねをほり出て、ふきかたむるを云也、帯にせるは、細水の谷をめくれるか帯にゝたる義也、をとのさやけさとは、清字也、心は、深谷までも君恩のいたらぬかたなき義也、世をほむる也、万葉に、さやけきと云おほし、みな其所をほむる心也、昔はかく大かたに哥をはいひて、底に思ふ心をふかくこめたり、世くたりては、たゝ詞に祝をさきとしていへり、されは、

詞くはしく成て心さし浅きにや、左注、此哥は承和の御へのきいのくにの哥、承和は仁明御事也、御へとは〈濁也〉、御燹と云義也、よみくせまて也

1083 みまさかやくめのさら山

万代無事の心也、善悪共に名をたてしとはありかたき君の御心也、名の名たるへきはつねの名にあらすの心也、此心は、名のきこゆる事を望とにはあらす、無為自然の名か実なるへきを、其をねかふよし也、左注明也、水尾は清和御事也

1084 みのゝくにせきの藤川

心あらは也、元慶　陽成院の御へのうた也

1085 君か代はかきりもあらし

心は明也、此長浜は勢州也、仁和は光孝御事也

1086 あふみのや鏡の山を

明也、あふ〈み〉のやの、のもしやすめ字也、此類おほし、たてたれはゝ哥の風詞也、これは今上の御への哥とは、当代也、しかるに、今上も御うへ、御へも御うへなれは、同事のやうなれと、今上は御名なれはかく重てかける也、さて此哥に至て、作者を書事、黒主は当代の人にて此哥入也、されは、当代を賞して書る也、巻軸の哥又同こゝろ也

東哥　東国の惣名を先かける也

みちのくうた　一国の風俗也、是は国〻の風俗を云義也

1087 あふくまに霧立わたり

恋の哥也、義は明也

1088 みちのくはいつくはあれと

陸奥所〻あれと、此所たくひなきに、舟なとのすき行をしたへるよし也、かなしもとは愛する義也

1089 わかせこを都にやりて

待とをなれは猶恋しきの心也

1090 おくろさきみつのこしまの

此所のおもしろきを、人ならは都へさそはまし物をと云也

1091 みさふらひみかさと申せ

御さふらひ、侍臣也、宮城野を宮禁に執なせり、心は明也

1092 もかみ川のほれはくたる

出羽国にあり、心は、水はやきによりて、のほる舟のせかれてかしらをふりて、のほらしとするやうなれは、いなといひなせり、上は序也、いなにはあらすいかさまになといひのへたるよし也、この月はかりを此一月どさすやうなれは、哥のさまいかにそやきこえ侍り、いかさま行末になといへる心也

1093 君をゝきてあたし心を

心はあらは也、松山の浪の事、此哥より始にや、可尋之、ある義云、此七首は融公の家に塩かまをうつし、其外もみちのくの名所をうつしをけるを、恋の哥によそへて、人にもよませ給けると云説もあり、不審の事なるへし、いかさまにも国の風俗の哥なるへし

此巻の事、以前も天真のよしいへり、天真は思量の限にあらす、日月星もまさしく眼前にして、しかも実所をしらす、此巻の哥、あるは風俗、あるは神楽、あるは恋、あるは旅の哥也、恋の哥とみれは君臣の理、神明の心をいへり、王道も天真のまことを顕して一切衆生におほふ心あり、されは、はかりかたき所を日月鬼神にたとへて、定家卿書出給へり、第一の哥は天子のはしめをいひ、はての哥は天子の徳いたれる所をかけり、此集の眼目也、只天真独朗の理をあふきねかはゝ、をのつから道にかなひ、此集の心をもわきまふへきと也

1094 こよろきの磯たちならし

めさし清也とは、磯菜つむ器ともいへり、又和布かるわらはを云ともいへり、其器を持によりての義にや、沖にをれ浪とは、かゝる物のうへをも君のめくみ給て、其事わさをやすくせよといふ心也

1095 つくはねのこのもかのもに

このもかのもは、こなたかなた也、つくはねは深山にて、かけふかき所なれと、君か御影にはしかぬよし也

1096 つくはねの峯のもみちは

木しけき山にて、万木の落葉つもれるをなへて愛する心也、下心、君の心は遠親平等なるへきの義也

1097 かひかねをさやにも見しか

見しかのかもし清也、みてしかなと云義也、けゝれなくは心なく也、五音也、さやの中山よこたはりふして、かひかねの興をかくす義也

1098 かひかねをねこし山こし

嶺をこし山をこし也、上は旅にして故郷をしたふ心也、下心、其風人ならは君命のありかたきを、とをく告たきのよし也、をのつからも、めくみはつたはりぬへけれと、猶かくいへるも忠臣の心さしにや

1099 おふの浦にかた枝さしおほひ

恋哥也、上は序也、なりもならすもとは、我思事はかなひもかなはすも、其人にねてかたらはまほしき心也、猶ふして実ありとも実なくとも也、下心、ねてかたらはんとは和の心也、その事はなりもならすも、人には先和すへきの心也、不和の人ありとものの心也、君の人をあはれひ給はん事又おなし

1100 ちはやふるかものやしろの

是は臨時の祭の時うたふ哥也、作者敏行朝臣をあらはして書事、鏡山の所に書之、此祭は、宇多御門また王侍従と申ける時陽成院御宇、賀茂へをはしまして、御あそひありけるに、神詫の事ありて、其後春宮に立給へり、仍寛平元年十一月廿一日己酉日始て此祭あり、使は左近中将藤時平也、舞人十人東遊あり き、其時うたへる哥也、此哥を巻のはてにあむ事、王道の徳、此佳瑞に過さる故也、延喜の朝の御撰集なれは、其心ことにめてたきにや、此哥は巻頭の哥のことく、あちはひを付すして大道に意得へきなりとそ、彼佳瑞は王侍従にてかもへおはしまして、狩

をし給て、御遊ありけるに、俄霧立くらして、前後をわかさりしに、老翁来て、当社にはたひ〳〵の祭あり、しかるに冬の天、祭もなく、神さひてあれは、祭をし給へきよしあり、いかて我身に応すへき事にかと申給へは、叶へき事ありとて、うせぬ、其後為東宮

以上千百一首

家〻称証本之本乍書入以墨滅哥今別書之

此心は、これより以前の本に、杣人と云哥より初而数首其所に書入てあれと、これを不用によりて、以墨被滅侍るを、定家卿みるめいかにそや侍れはにや、奥に如此書入給しと也

第十　物名

1101 杣人は宮木ひくらし　つらゆき

物名、ひくらし、とよむ、ともし清也、惣の心は明也、左注は物名の郭公哥の次、うつせみの哥のまへに此哥ありと也、准他之

1102 かけりてもなにをか玉の　かちをん

人のなきからはほのをとなる物なれは、其魂かけりても何をみんと也

1103 こし時と恋つゝをれは　つらゆき

こと書、くれのおもとは種〻説あれと、大みねにんにくの事也、夕くれのおも影と云所に彼名あり、こし時とは夕暮の事也、明也

1104 をきのゐて身をやくよりも　をのゝこまち

嶋へのへ文字可濁也、心は、をきの火にて身をこかすよりもといへり、又物名を宮こしまへと直にいへる所如何、されは都をはなれてこしと、又この嶋へをわかるゝとかかなしきと、二に分て云へし

1105 うきめをはよそめとのみそ　あやもち

世のうきめをは、よそに遠くなしてと云義也、雲のあわたつとは、白雲の淡にゝたれは也

1106 恋部 けふ人をこふる心は

心のたきる義にや

1107 わきも子にあふ坂山の
もとあひみし人を忍にこふるよし也
1108 いぬかみの床の山なる
心は明也、いさや川を名取河と云事、此哥の外にも侍るや、可尋之
左注あめのみかとは、天智天皇御事也、まへにもあり、其下の詞明也
1109 山しなのをとはの滝の
此哥は此集に入侍れと、いぬかみの哥の返しなれは、其証としてこゝにかける也、但他本又此哥も以墨被滅にや
1110 我せこかくへきよゐなり
くものふるまゐとは、蜘蛛のなすわさ也、手をひらきてさかるは喜にあらす、手をゝさめてさかるは尤為喜、こと書、みかとを恋たてまつるとは、允恭天皇の御事也、心は明也、序の注にいへる哥也
1111 みちしらはつみにもゆかむ　つらゆき
此忘草、ことに昨日まてはありて、けふはなき草にあたれり、心は、恋ちのくるしけれは忘まほしきよし也

十一首、但十首也、山科の哥除之歟

黄門奥書云
此集家々所称雖説々多　是は諸家本々の不同之義也
且任師説　師とは基俊々成よりの義也
又加了見　あるは春霞たゝるやいつこと、俊成卿の本に侍るを、たてるやと書、あるは以墨滅哥を奥に書入、皆了見也
不顧老眼之不堪、手自書之　是定家卿老後ニ以自筆此集添削の一部を書給へるよし也
近代僻案之好士　其比の人たるへし、誰共なし
以書生之失錯、称有職之秘事　筆のあやまりを剰秘事のやうにいへる義也
可謂道之魔姓、不可用之　これは人のあしくなるをおさへたる所也

但如此用捨、只可随其身所好、不可存自他差別　是は和の道也、定家卿の心也、又此集の大意なれは也、人にあらそふ所なきの旨尤ありかたくこそ

志同者可随之　他人定家卿の志におなしくは是にしたかへといへる也、しゐてこれを用よと云義にはあらさるへし

此奥書は貞応本の一義也、此以後又加録本を書り、其には、僻案輩とあり、好士といへるにはまされり、其は一両年以後なれは、猶よく調所もあるにや、しかれと、二条家は嫡々たるにより貞応本用之、されは僻案好士とかける也、以此奥〈書〉之意、此集の大意をも、黄門の心をも可量知、毎人の教戒たる物也

戸部尚書　其時定家卿民部卿なり

予此集伝受之儀於越後府中自然斎宗祇旅館／文亀元辛酉六月七日令始行同九月十八日終功訖

文亀元年九月日　　宗碩（花押）

後年又宗祇老聞書引合不審之所少々書改之早